

研究紀要

第 27 号

2019

公益財団法人とちぎ未来づくり財団
埋蔵文化財センター

研究紀要 第27号 目 次

- 栃木県北部における縄文時代中期前～中葉の土器編年 塚本師也 (1)
- 栃木県域の経塚について（覚書） 池田敏宏 (52)

栃木県北部における縄文時代中期前～中葉の土器編年

つか もと もろ や
塚 本 師 也

- | | |
|--------------|------------|
| 1 はじめに | 4 下総台地の編年 |
| 2 編年の方法 | 5 栃木県北部の編年 |
| 3 基軸とした既存の編年 | 6 今後の課題 |

栃木県北部においては、阿玉台 I a～II式期は阿玉台式土器が主体を占め、少量の大木式系土器（七郎内 II群土器、口縁部に原体圧痕を配す土器、隆帶や沈線を縦横に配す土器等）が伴う。阿玉台III式古段階には七郎内 II群土器が急増し、阿玉台式土器を凌駕する。口縁部に原体圧痕を配す土器、隆帶や沈線を縦横に配す土器も残る。そして次期に数を増す楓沢型や湯坂型等の新たな大木式系土器が出現する。大木式系土器の突起は、扁平なS字状突起が主流である。阿玉台III式新段階には、大木式系土器の主体が七郎内 II群土器から楓沢型へと変わり、湯坂型も目立ってくる。大木式系土器の突起は、環状の粘土を組合せ、中空化が始まる。縄文施文される阿玉台III式土器も一定量存在する。阿玉台IV式期には阿玉台IV式土器と楓沢型が主体となる。突起は更に中空化する。七郎内 II群土器は、この段階まで存続し、楓沢型と連動して隆帶が太くなる。加曇利 E I式古段階には、浄法寺類型が主体となり、口頸部文様帶に沈線を添わせない貼付隆帶で渦巻文や波状文を描く土器が組成をなす。阿玉台式土器、楓沢型の土器、七郎内 II群土器が無くなり、土器群の構成が一変する。加曇利 E I式中段階には、加曇利 E I式土器、加曇利 E 式に中空の突起が付く土器、口頸部が加曇利 E I式で体部に大木式のモチーフを施す土器、口頸部の渦巻文に剣先文を附加する大木 8 b式土器、樽形を呈す大木 8 b式土器、浄法寺類型の土器が組成をなす。隆帶脇に沈線が沿うようになる。また、この段階になると中空把手に沈線による加飾が表れる。加曇利 E I式新段階は、口縁部文様帶に渦巻文と橢円形区画文を交互に配す土器が主体となる。火炎系土器が消滅し、浄法寺類型も見られなくなる。

1 はじめに

H30（2018）年10月27・28日に、新潟県津南町においてシンポジウム「馬高式土器の成立・展開・終焉」が開催された（津南町教育委員会2018）。縄文時代中期中葉の新潟県中越地方を中心に分布する馬高式土器（火炎土器）を取り上げ、先行する「五丁歩式」、後続する「板倉式」との関係、更には火焔型・王冠型の地域差等、多岐に亘る問題が議論された。また、火炎土器に類似する「火炎系土器」が分布する新潟県中・下越の周辺地域の発表者から、各地域の土器様相や本場中越地方との関係について報告された。筆者も関東地方北東部の栃木・茨城県域に関する報告を行った。

ところで、新潟県中・下越地方および火炎系土器が出土する秋田・山形・福島・栃木・茨城の各県は、中期中葉には所謂大木式土器が分布する。これらの地域と火炎土器の本場中越地方との関係を論じる際、大木式系土器を介して並行関係を把握する必要が生じる。筆者はシンポジウム当日の発表で、関東地方東部、栃木県那須地方、福島県会津地方、新潟県阿賀町の編年案を示し、その並行関係に触れた（塚本2018）。

筆者は以前、浄法寺遺跡の報文において、栃木県北半部の中期中葉の土器編年を発表した（塚本1997）。それ以降は、当該地域の土器編年については、断片的な指摘をするに留まっている。20年が経ち、資料も増え、新たに考えたこともある。今回のシンポジウムの発表で、栃木県北部の土器群と周辺地域の土器群との並行関係についてある程度考えがまとまった。そこで本稿では、栃木県北部を中心とする中期前～中葉の土器の編年案を、下総台地（関東地方東部）の土器編年と対比するかたちで、提示することとした。

2 編年 の方法

栃木県では海老原郁雄が中期縄文土器の編年に精力的に取り組み、昭和55（1980）年前後には、編年の大枠は把握されていた（海老原1981等）。筆者をはじめ多く研究者がこの編年を基礎としている。特に大木式系土器の細別は、周辺地域の土器編年に与えた影響も大きかったようである。海老原の編年では、細別型式ごとに代表となる特徴的な土器が示されており、前後の細別型式には、系統の異なる土器が配置されている。主体となる土器が、細別型式によって入れ替わるという当該地域における中期中葉の土器群変化の特徴をよく捉えたものである。更には、前後の細別型式の差異が明瞭で、理解しやすい編年である。

縄文時代中期前～中葉の栃木県北部では、関東地方東部と共に阿玉台式土器や加曽利E式土器と在地の大木式系土器が共存する。筆者は、既に編年が確立している関東地方の土器編年を援用し、それらと伴出する在地の土器を年代的に位置付けるという方法を取った。そして、連続して変化する系統の把握に力点を置いた。浄法寺遺跡の報文で示した栃木県北部の編年がその成果である（塚本1997）。筆者が、系統の抽出と系統内での変化の把握を目指したのに対し、海老原は、前後の細別型式の差異の把握を目指したのである。

土器群の差異を捉らえて編年をすることと、同一系統内での変化を把握することは、相反することではない。今回は両方の視点を取り入れることを心がける。既存の編年に対し、現在における有効性を検証し、そのうえでこれを援用し、一括遺物を分析して在地の土器を年代的に位置づける。そして各系統の消長を動態として捉えることとしたい。

3 基軸とした既存の編年

栃木県北部の中期前～中葉の土器編年を行う前に、その基準とした関東地方東部の土器編年について、筆者の考え方を示しておく。

縄文時代中期前葉、栃木県北部、関東地方東部とともに阿玉台式土器が分布する。阿玉台式土器の編年については、西村正衛による編年（西村1972・1984）が、現在最も流布している。自身が発掘調査した利根川下流域の貝塚の層位的出土状態をもとに、隆帯の脇に沿わせる押引文等の施文具の変化を捉えた編年である。隆帯に沿って単列の角押文を施すものをI式、複列の角押文を施すものをII式、爪形文を施すものをIII式、沈線を施すものをIV式とした。木之内明神貝塚Aトレンチ第一純貝層出土の土器は、それ以下の層から出土した土器より発達した型式であったため、阿玉台I式をa種とb種に細分した。後述するが、その後の発掘調査により、西村が提唱した各細別型式の土器のみで構成される一括遺物が複数確認され、この編年の有効性は証明されたといえる。この編年は、施文具の差異を基準としているため、各細別型式の差異が明瞭に把握できる。更には、小破片でも同定可能という特徴を持つ。

西村による編年案提示の直後、佐藤達夫が阿玉台Ib式を2細分した（佐藤1979）。その内容については詳細には公表されていないが、多くの研究者がこれに従っている。筆者も阿玉台Ib式を2細分したが、その内容について、ある程度考えを示した（塚本2000・2008・2013a）。また、筆者は近年阿玉台III式を2細分した（塚本2008・2013b）。筆者の細別案については後述する。

阿玉台式に後続する縄文時代中期中～後葉は、栃木県北部も含め関東地方全域に加曽利E式土器が分布する。加曽利E式土器は制定者の山内清男により2細分された（山内1940）。その根拠は磨消縄文の有無である。仙台湾周辺の中期大木式土器の大木8a・8b式と大木9・10式もこの基準により区分している。山内は更に4細分案を考えていたようであるが、その内容は公表されず、詳細は不明である。その後多くの研究者により3～5細分された。昭和55（1980）年のシンポジウム「縄文時代・中期後半の諸問題」により、加曽利E式土器は、各研究者によって細別型式の呼称は異なるものの、概ね変化の捉え方については共通していることが確認された（神奈川考古同人会1980）。今回対象とする加曽利EI式（磨消縄文出現以前）は概ね以下のとおり3細分される。

- i 沈線を沿わせない貼り付け隆帯で、口頸部文様帶に横S字文等を配す。
- ii 沈線を沿わせた隆帯で横位に展開する渦巻文が、口頸部文様帶の上下の区画に接するか、上下区画と縦位の隆帯で連繋するように配される。関東地方南西部では頸部を無文帯とする。
- iii 沈線を沿わせた隆帯で、口頸部文様帶に渦巻文と区画文を交互に配す。関東地方南西部では頸部を無文帯とする。

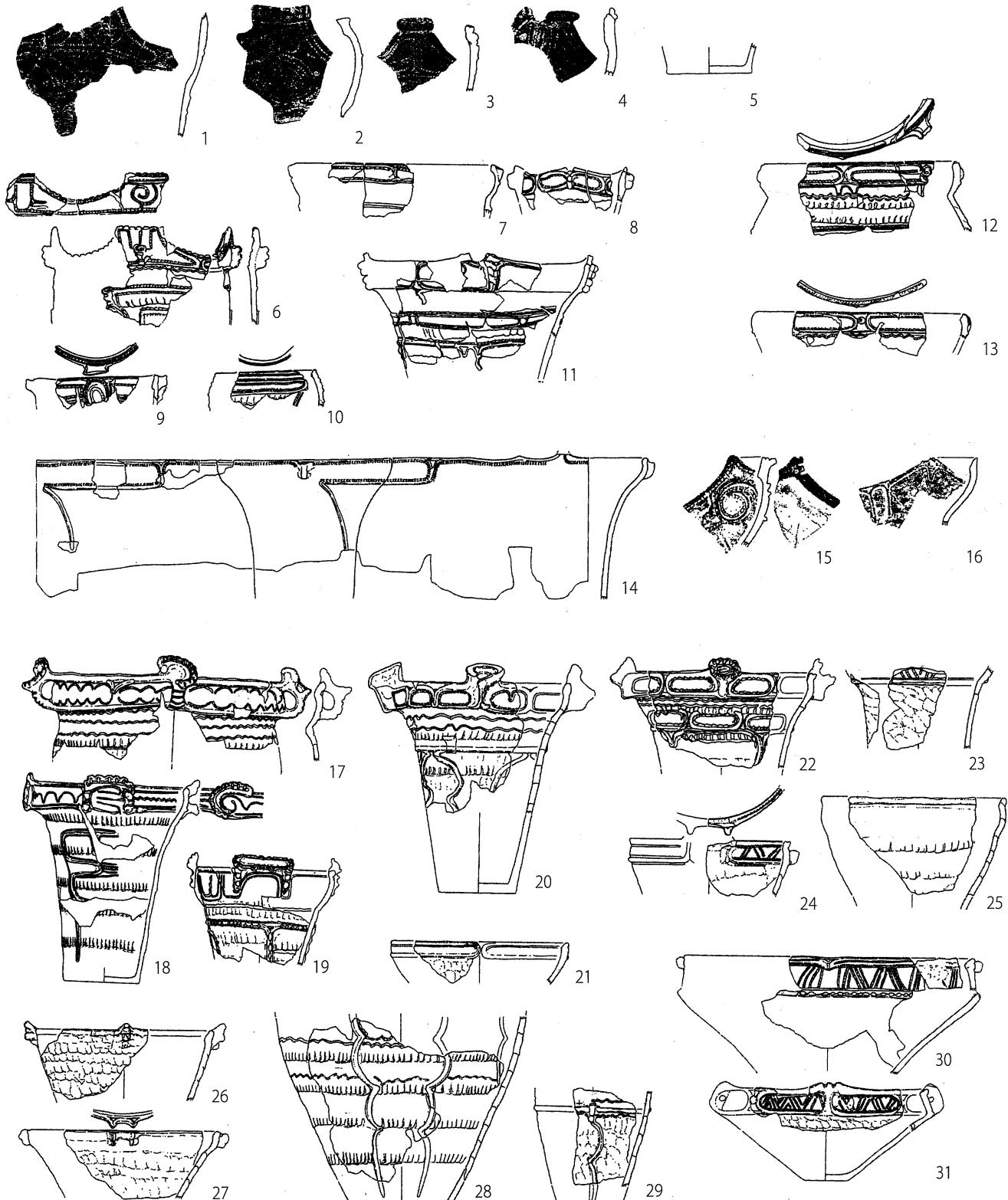
加曽利E式土器は関東地方の東西において地域差がみられる。加曽利E式土器の編年は、関東地方南西部を中心に行われてきた。その一方で、栃木県北部との類似点が多い関東地方東部（下総台地）の土器に対しては、明確な形での編年案はあまり示されなかった。特に加曽利E I式古段階については、不明な点が多い。この段階においては、下総台地の土器を基準として、栃木県北部の土器を把握することができなかつた。

加曽利E式の東西関東地方での地域差は、『日本先史土器図譜』において既に触れられている（山内 1940）。東西関東の同じ年代の土器を別頁に掲載し、「下総方面」「武藏野方面」と偏在性が指摘された。その後、安孫子昭二が動坂遺跡の報文で、「加曽利E I式の範型と動坂遺跡の型式」と題し、本格的に関東地方の加曽利E I式の東西差を論じた（安孫子 1980）。縄文地文で、口縁部文様帶に「鍵状文」（クランク文）を配す土器を東関東の代表的な型式とし、撚糸文地文で、口縁部文様帶に○字状文を配す土器を西関東の代表的な型式と指摘した。一方、下総台地では、勝坂・阿玉台式と加曽利E式の間を埋める土器型式（年代的に独立した土器型式）として中峠式土器が制定された（下総考古学研究会 1976）。下総考古学研究会以外の研究者は、中峠式の取り扱い、特にその存否に苦慮したためか、東関東の加曽利E I式最古の土器について積極的には論じなかつたようである。その後、埼玉県の研究者が、中峠式土器は年代的に独立した位置を占めるのではなく、阿玉台IV式・勝坂式終末と加曽利E I式に併存する一群の土器であるとの見解を示した⁽¹⁾（細田ほか 1982）。埼玉県花積貝塚2A号住居址出土土器を、東西関東の加曽利E I式古段階の共伴事例と捉え、これをもとに東関東のE I古段階の土器が示された。筆者もこの埼玉県の研究者の見解を支持してきた。しかし、近年に至るまで、明確に下総台地における加曽利E式初現期の土器の内容を明確に示した研究事例に乏しく、漠然とクランク文の土器があるといった程度の理解がなされているにすぎなかつた⁽²⁾。

筆者は、関東地方北東部の加曽利E I式古段階の土器を把握するに当たり、沈線を沿わせず貼り付け隆帯のみでモチーフを描くという施文手法に着目し、この手法が見られる土器とそれに共伴する土器を見極めるという手段を用いた。そして栃木県中央部の上の原遺跡JD12や茨城県南西部の西原遺跡第61号住居跡出土土器群（第13図）を検討し、これらを加曽利E I式古段階と捉え、これらの土器組成から、関東地方東部の加曽利E I式古段階を捉え直してみた。関東地方東部の加曽利E I式古段階（武藏野台地の中山谷遺跡・岩の上遺跡の加曽利E I式古段階の土器に並行する段階）には、中峠式土器が主体を占め、この地方で主体をなすと思われていた加曽利E式土器⁽³⁾は少数である。そして、下総考古学研究会が捉えた「中峠式」の組成は、この段階の下総台地の土器様相に近いと考えるに至ったのである（塚本 1997・2004・2010）。関東地方東部の土器編年を援用して、関東地方北東部の土器編年の確立を目指したわけであるが、加曽利E I式古段階については、栃木県南東部・茨城県南西部（鬼怒川・小貝川の中・下流域）の土器群の把握から、関東地方東部の土器組成を捉え直すことになったのである。

4 下総台地の土器編年

筆者が栃木県や茨城県の土器の編年的位置づけを行う際に援用した、関東地方東部の土器編年を概観する。なるべく地域差を考慮しなくて済むように、狭い範囲に限定したいため、千葉県柏・松戸市域を中心とする下総台地北部の土器を対象とする⁽⁴⁾。阿玉台I a式 阿玉台I a式土器は、西村正衛が調査した千葉県香取市木之内明神貝塚Aトレンチで、阿玉台I b式がまとまって出土した第一純貝層より下の層から、先行する五領ヶ台式を混じえずに出土したため、細別型式として設定された（西村 1969）。西村は、隆帯脇に単列の角押文を沿わせる阿玉台式土器をI類とし、これをa種とb種に細分した。阿玉台I a式土器は、破片資料が多く、長い間類例が増えなかつたため、その存在を疑う見解もあったが、近年では完形土器や遺構内出土の一括遺物も増え、年代的に独立することは確実となつた。平縁の土器と波状口縁の土器がある。波状口縁の土器は、先行する五領ヶ台式の系



S=1/10

1～5：寒風台遺跡土坑4 6～13：根之神台遺跡 14：中山新田Ⅰ遺跡 151 埋甕土坑
15・16：向原遺跡 17～31：中山新田Ⅰ遺跡 081 住居跡

第1図 下総台地の阿玉台式期の土器（1）

譜を引くもので、頂部が平坦なものと尖ったものの二者がある。頂部が平坦なもの（第1図2～4・6）は、波頂部下に渦巻状のモチーフを配すことが多い（第1図2等）。頂部が尖るもの（第1図15・16）は、波頂部の左側縁に二個のキザミを加え、弧状・渦巻状のモチーフを配す土器が特徴的である（第1図15）。平縁のものは口縁部に祖型的な狭い橢円形区画文を配す（第1図7～10・12・13）。阿玉台I b式と異なり、隆帯と単列の角押文がともに1周しないことが多い（第1図7）。

下総台地では、阿玉台I a式土器は破片資料が多い。松戸市寒風台遺跡土坑4が、阿玉台I a式のみで構成される一括遺物である（第1図1～5）。松戸市根之神台遺跡に、器形復原可能な土器がまとまっている（第1図6～13）。この時期、下総台地では、ほぼ阿玉台I a式土器で構成されたと考えられる。

阿玉台I b式 阿玉台I b式は、口頸部区画文、頸部素文帯、体部垂下降帶文という以後の阿玉台式を貫く基本的な文様構成が確立する。阿玉台I a式同様隆帯に沿って単列の角押文を施す。平縁で口縁に区画文を配す土器では、隆帯と単列の角押文がともに1周する。平縁土器のなかには、特徴的な扇状突起をつけるもの（第1図18・19、第2図1・2・6・18・21・23・27・28）が目立つ。遺構内出土の一括遺物も多い。阿玉台I b式は、佐藤達夫が2細分して以来（佐藤1974）。多くの研究者が2細分している。筆者は、実例をあげ、2細分案の内容を示してきた（塚本2000、2008、2013）。

阿玉台I b式古段階 阿玉台I a式にみられた五領ヶ台式系譜の波状口縁の土器が廃れる。平縁の土器が主体となる。区画内部に角押文でモチーフを描くものは少ない。口縁の区画の接点から上方に伸びるように付けた花弁状の低い突起を持つ土器は（第1図20、第2図4）、本段階の特徴といえる。角押文は側線と節が直交する典型的なものが多い。下総台地において一括遺物を出土した遺構として、中山新田I遺跡081・091住居跡、水砂遺跡028住居跡をあげることができる（第1図17～第2図9）。なお、茨城県南部には良好な一括遺物として、前田村遺跡第365号住居跡、東田中遺跡第29号竪穴建物跡の出土土器（第10図1～17）がある。

阿玉台式前半期の土器（阿玉台I a～II式）には、器面にヒダ状圧痕やキザミ目列を巡らすものが目立つ。ヒダ状圧痕を成形時のすべての粘土帯の接合部に巡らすもの（第1図26・27）、ヒダ状圧痕の間隔を開けるもの（第2図23・27）、キザミ目列を巡らすもの（第2図5・28）と型式学的に変化する（塚本2008・2013）が、変遷は漸移的である（高山1997）。この段階の一括遺物として取り上げた遺構の出土土器は、ヒダ状圧痕が多く、キザミ目列は少ない。阿玉台I b式古段階には、ヒダ状圧痕が優勢であったことが分かる。

この時期、下総台地では、ほぼ阿玉台I b式古段階の土器で構成されたと考えられる。僅かに、水砂遺跡028住居跡では、猪沢式系の土器（第2図7・8）がみられる。

阿玉台I b式新段階 平縁の土器では、口縁の区画内部に角押文で波状文や斜行文を描くものが多くなる（第2図18・23・26・28）。阿玉台I b式古段階では少なかった波状口縁の土器が増える（第2図10・22・26）。区画の接点部分が上方に伸び上がったもの（第2図10・11）、波頂部の皿状・渦巻状の突起から、扁平な弧状・S字状の隆帯を垂下させるもの（第2図22・26）等がある。角押文は、竹管の先端を斜めに削いた工具で押し引きしたものが目立つようになる。

良好な一括遺物として、中山新田I遺跡096住居跡、子和清水貝塚252号住居跡、高根木戸遺跡72号住居跡、後貝塚四号竪穴出土土器（第2図10～30）等がある⁽⁵⁾。

この時期、下総台地では、阿玉台I b式新段階土器が主体を占めたと考えられる。新道式系の土器の共伴がみられる（第2図13・16・17・20・24）。前段階より西関東系の土器の量が増えたようである。

阿玉台II式 隆帯に沿って複列の角押文を施す。半截竹管の内側を器面に当てて押引きしたものが多い。櫛歯状工具による条線を沿わせるものもある。器形、文様構成、文様モチーフは阿玉台I b式新段階とほぼ同じである。阿玉台II式になると、ヒダ状圧痕よりキザミ目列が多くなる。

下総台地では良好な一括遺物が少ない。子和清水貝塚111号住居跡出土土器（第3図1）がある。茨城県の筑波山南側の地域では、中台遺跡SK27（第10図18～23）がある⁽⁶⁾。

阿玉台III式 隆帶に沿って爪形文を施す。阿玉台II式土器と阿玉台III式土器が共伴する事例が多く、II式に伴うIII式と、II式を伴わないIII式に違いがみられたため、阿玉台III式を2細分した（塚本2013）。

阿玉台III式古段階 阿玉台II式土器と阿玉台III式土器が伴う段階である。この段階の阿玉台III式土器は縄文が施されないのが特徴である。平縁、波状縁があり、口縁部区画文、頸部素文帯、体部垂下隆帯の基本構成が引き継がれるが、体部中段に、幅広い楕円形区画文を配す土器が現れ（第3図2・7・21・32）、一定量を占める。この段階の阿玉台II式土器とIII式土器は、隆帯脇の押引文の種類は異なる（複列の角押文と爪形文）ものの、文様構成、口縁部断面形はほぼ同じである。阿玉台III式土器の爪形文は、半截竹管の外側を押引きしたものが主流であるが、この段階には半截竹管の内側を押引きした爪形文もみられる。

下総台地北部には良好な一括遺物が多い。大松遺跡SI087・090、中山新田II遺跡055住居跡、子和清水貝塚92・106・117・149号住居跡等の出土土器（第3図2～第5図14）が好例である⁽⁷⁾。

この時期、下総台地では、阿玉台II・III式土器が主体を占めたと考えられる。勝坂式系土器も少量みられる（第3図29～31、第4図6、第5図8・13・14）。また勝坂式土器の顔面突起を取り入れた阿玉台式土器（第3図9・27）や勝坂式に多い有孔鰐付き土器を阿玉台式の手法で表現した土器（第3図15）もみられる。そもそも、阿玉台III式土器の爪形文は、勝坂式のキャタピラ一文を受容したものと考えられる。古くから指摘されているように、子和清水貝塚からは大木7b式土器（第4図19）が出土している。

阿玉台III式新段階 波状口縁の土器（第5図15・24・27・28、第6図3）と平縁の土器（第5図16・30）があるが、波状口縁が優勢である。阿玉台Ib～II式では断面三角形であった隆帯が、太い断面蒲鉾状となり、尖っていた波状口縁の頂部が平坦で分厚くなる。前段階の体部の楕円形区画文は低調となり、再び垂下隆帯が多くなる。そして地文に縄文を施すものが出現する。この時期、口縁部に大木式系土器に由来する横S字状の単位文を取り入れた土器が出現する（第5図18）。後述する大谷津A遺跡から好資料が出土している（第10図27・31）。

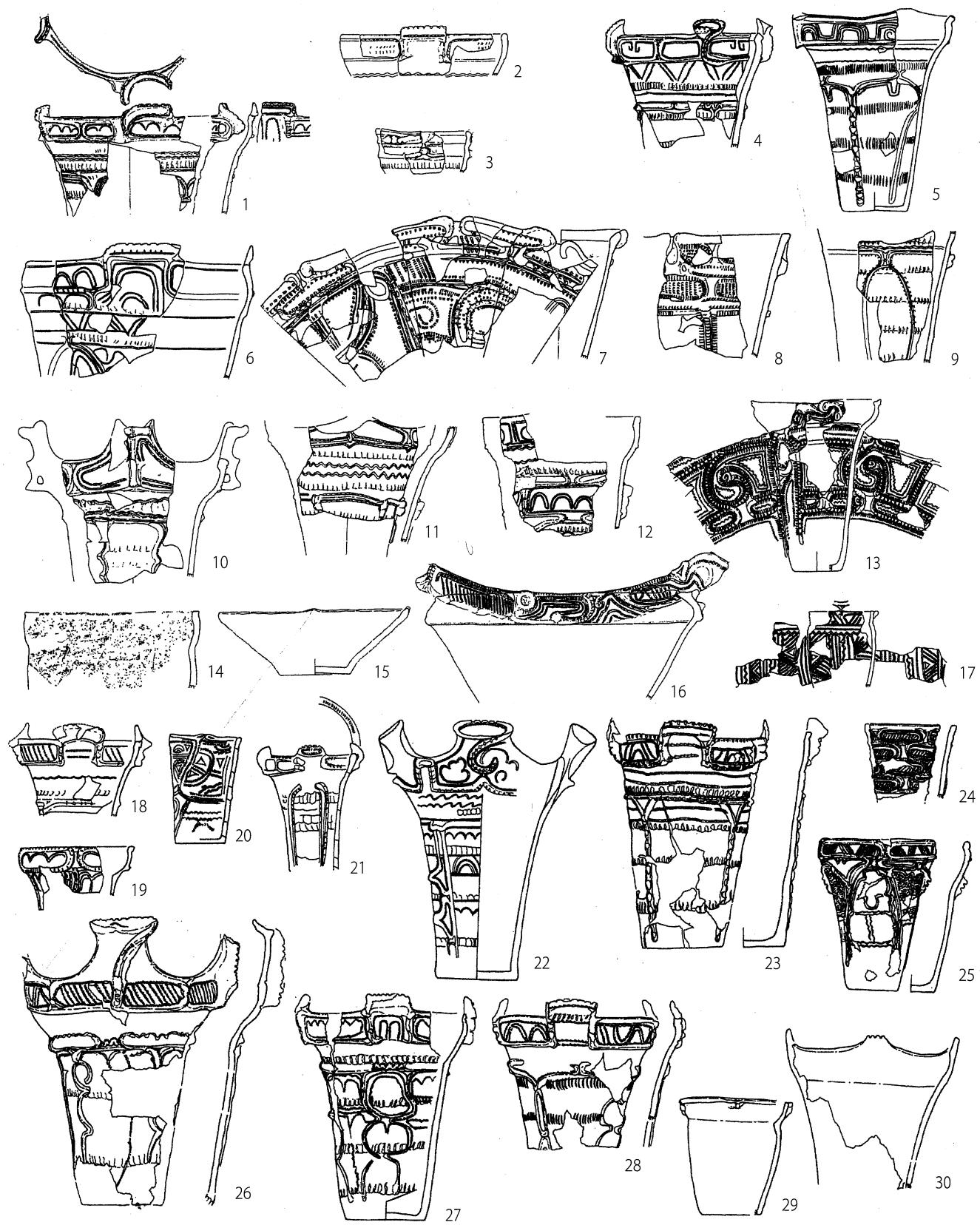
大松遺跡SI085・SK082出土土器、小山台遺跡SK136出土土器等（第5図15～22）をこの段階の一括遺物と考えるが、下総台地では好例が少ない。現利根川を挟んだ茨城県大谷津A遺跡第65号住居跡出土土器（第10図24～32）は本段階の良好な一括遺物である。なお、大松遺跡に条線地文の土器があった（第5図16）。条線地文も本段階の特徴であろう。四街道市南作遺跡には、この段階の土器が多い。126・167・168号土坑出土土器（第5図23～第6図3）等が本段階の一括遺物といえよう。

この時期、下総台地では、阿玉台III式土器が主体を占めたと考えられる。但し、小山台遺跡SK136出土土器（第5図17～22）には、異系統の土器が多数含まれている（第5図19～21）。

阿玉台IV式 隆帶に沿って沈線を沿わせる。ほとんどの土器が地文に縄文を施す。特に隆帶上の縄文施文が特徴的である。波状口縁の土器（第6図6・18）が大多数を占め、平縁で口縁部に区画文を配す土器はわずかとなる。前段階に出現した、口縁部に横S字文を取り入れた土器⁽⁸⁾は存続する（第7図1・4）。

聖人塚遺跡012・014住居跡出土土器、水砂遺跡034住居跡、子和清水貝塚56号住居跡（第6図4～第7図8）が下総台地の一括遺物である。下総台地では、阿玉台Ia式～III式までは、ほぼ阿玉台式土器で構成され、関東地方西部の勝坂式土器（おそらく在地で製作したものが多い）が少量あり、稀に関東地方北東部の大木式系土器が伴う程度であった。阿玉台IV式期になると、阿玉台IV式土器（第6図6・18、第7図1・4・7）が組成の中で占める割合は低くなる。阿玉台IV式期には中峠式系土器（第6図12・13、第7図8）が存在することは前述したが、むしろ在地の勝坂式土器（第6図9・17・19・20・23・24等）が多いようである。

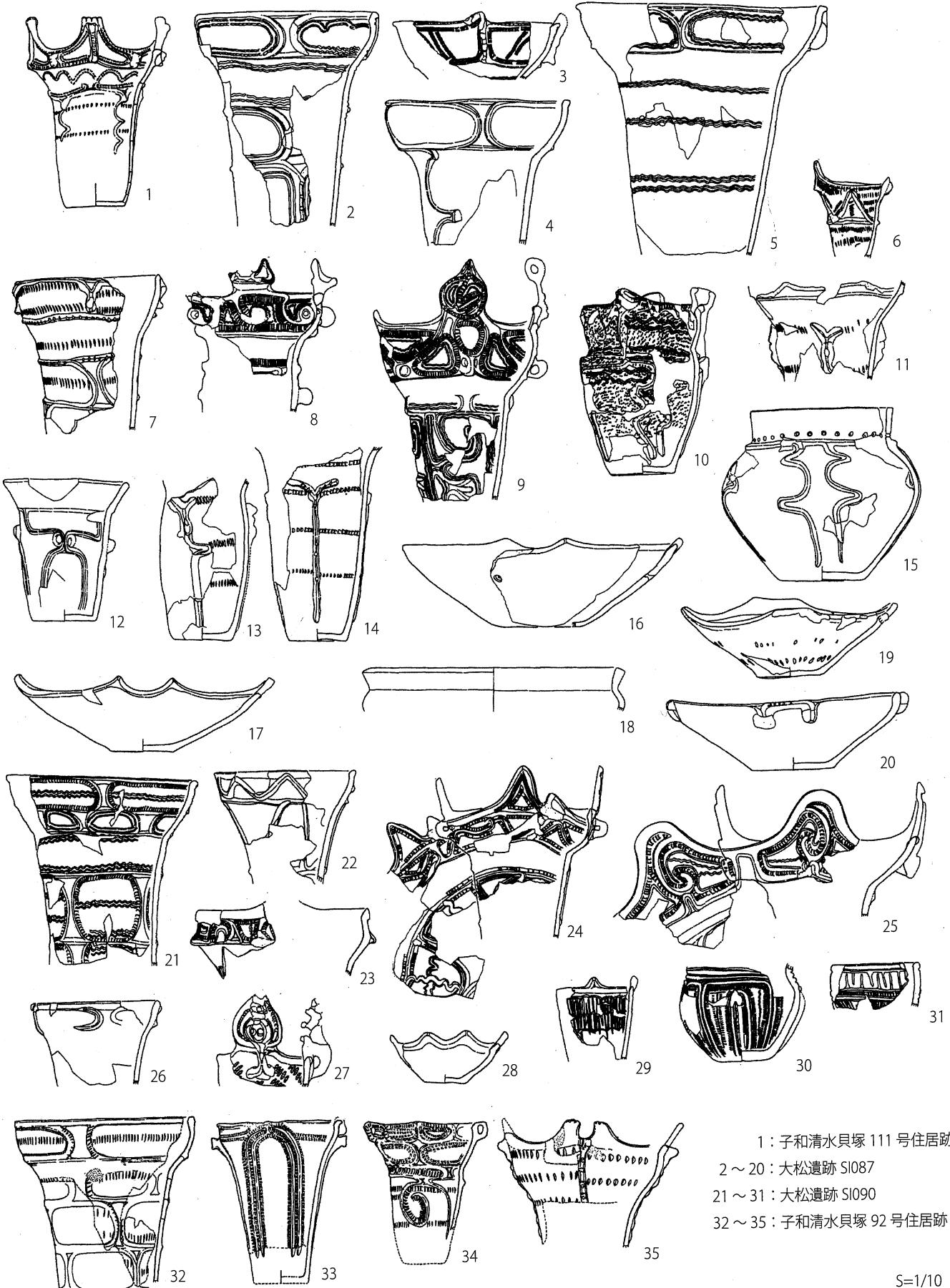
加曽利E I式古段階 かつて宮崎朝雄は、東関東地方の加曽利E I式古段階の土器として、口縁部文様帯にクランク文を配す土器、口縁部文様帯に細い隆帶で区画文と渦巻文を配す土器、口縁部文様帯に1本隆帶で曲線文を配す土器、口縁部文様帯内部に棒状沈線を充填する土器等が組成することを指摘した（宮崎1982）。前述したとおり、筆者は上の原遺跡JD12と西原遺跡第61号住居跡の出土土器（第13図）の分析から、鬼怒川・小貝川の中・下流域（茨城県の筑波山より南西の地域）では、加曽利E



S=1/10

1～3：中山新田Ⅰ遺跡 091 住居跡 4～9：水砂遺跡 028 住居跡
10～17：中山新田Ⅰ遺跡 096 住居跡
18・19：子和清水貝塚 252 号住居跡 20～22：高根木戸遺跡第 72 号住居跡
23～30：後貝塚四号竪穴

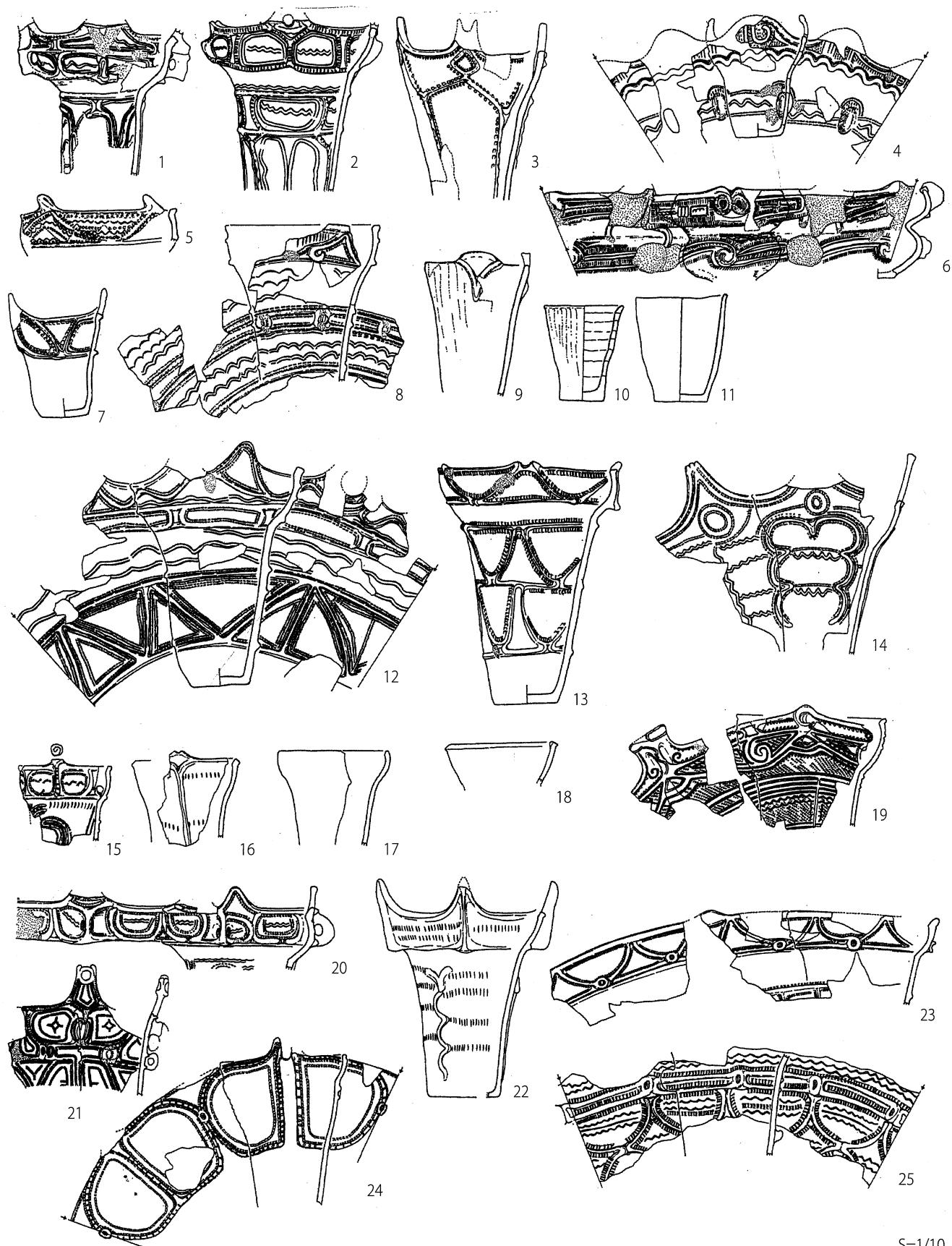
第2図 下総台地の阿玉台式期の土器（2）



1 : 子和清水貝塚 111号住居跡
2 ~ 20 : 大松遺跡 SI087
21 ~ 31 : 大松遺跡 SI090
32 ~ 35 : 子和清水貝塚 92号住居跡

S=1/10

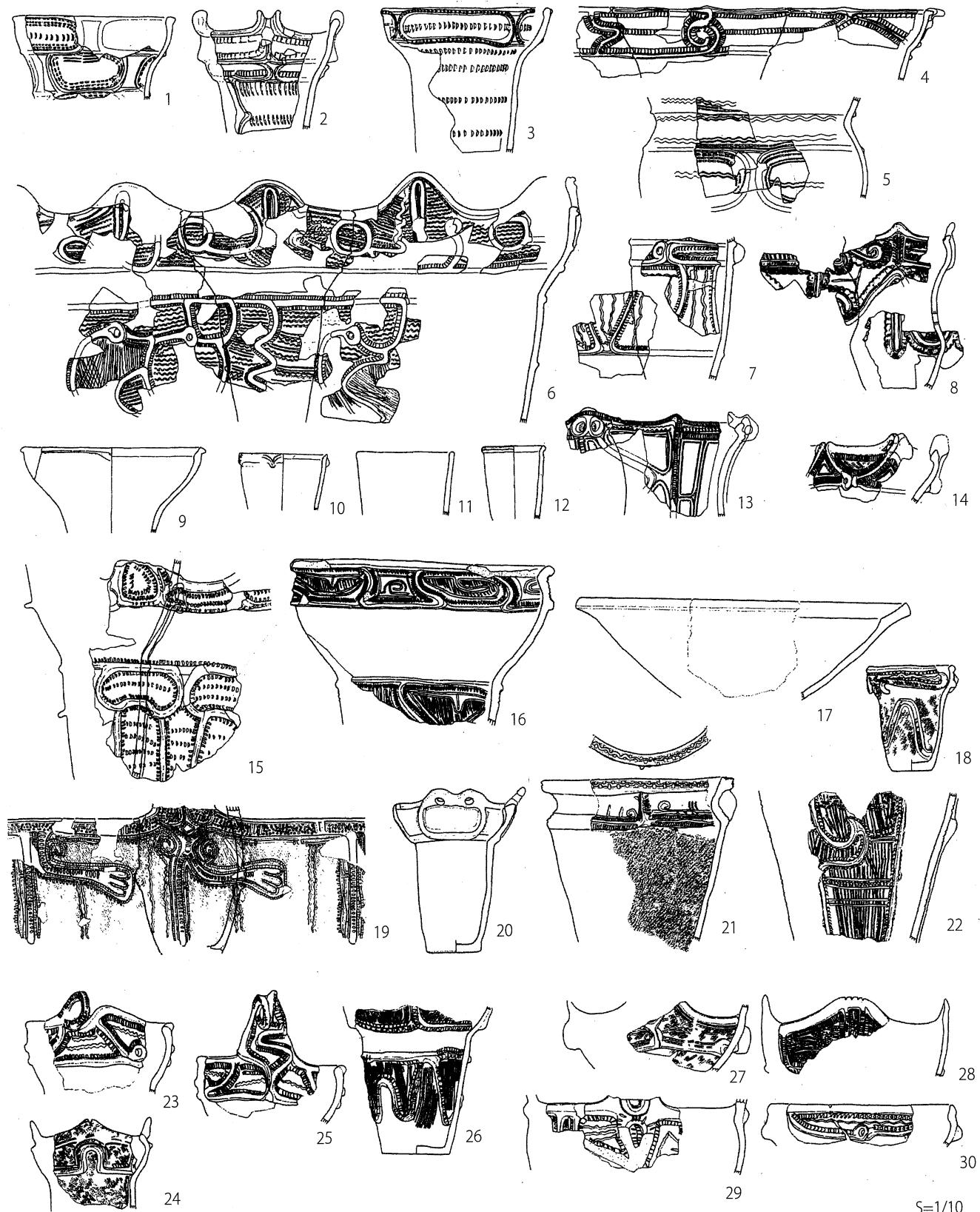
第3図 下総台地の阿玉台式期の土器 (3)



1～11：子和清水貝塚 106 号住居跡 12～19：子和清水貝塚 117 号住居跡
20～25：子和清水貝塚 149 号住居跡

S=1/10

第4図 下総台地の阿玉台式期の土器（4）



1～14：中山新田II遺跡055住居跡 15・16：大松遺跡SK082 17～22：小山台遺跡SK136

23～26：南作遺跡126号土坑 27～30：南作遺跡167号土坑

S=1/10

第5図 下総台地の阿玉台式期の土器（5）

I式古段階（武藏野台地の中山谷遺跡第10号住居跡・岩の上遺跡第23号住居跡に並行する段階）には、クランク文を配す下総台地型の加曽利E I式は組成の中で主体を占めず、むしろ中峠式土器が主流であるとの見通しを立てた（塚本1997）。

下総台地の加曽利E I式古段階の一括遺物として、大松遺跡SI091・101、SK053・077出土土器、子和清水貝塚第184号住居跡、第223・224・522号土坑出土土器（第7図9～第8図18）を考えてみた。大松遺跡を報告した西川博孝は、加曽利E I式古（加曽利E I式古）段階を、背割れ隆帯で円文・横蕨文・クランク文を配し、空隙に沈線を充填するもの（第7図22）、縄文地に1本の貼り付け隆帯で横蕨状文や波状文を描くもの（第7図24等）、朝顔形に開く器形で、肥厚した口端に交互刺突文、体部に加曽利E式の文様を持つもの、朝顔形の器形の頸部に突出した橢円形区画文を配すもの等が組成するとした（西川2011）。この見解が現時点で、最も的確にこの段階の下総台地の土器様相を把握したものと思われる。これらと、在地の勝坂式系土器（第7図16・17・20、第8図4）、中峠式土器（第7図9・23、第8図6）が伴うのが下総台地の加曽利E I式古段階の土器組成と考えられる⁽⁹⁾。

加曽利E I式中段階 この段階になると、隆帯の両脇に沈線を沿わせるようになる。代表的な土器として口縁部文様帶にクランク文を配し、縦位沈線を充填する下総台地型の加曽利E I式土器（第8図19・20・31）、縄文地文でクランク文を配す土器（第9図3・4・6・12・19・20）、口縁部文様帶に横S字状文を配し、S字が文様帶上下の区画に接するか、短い隆帯で連繋する土器（第9図13・14）、口縁部文様帶に波状隆帯を配す土器（第9図8）、前段階にみられた朝顔形の土器（第9図1・10）等がある。この段階に関東地方西南部では、頸部無文帯を持つ土器が多くなるが、関東地方東部では頸部無文帯を配さない土器もある。前段階にみられた勝坂式系の土器、中峠式系の土器（第9図5）はあまりみられなくなる。

この段階の一括遺物としては、大松遺跡SI036・088・093、SK099出土土器、子和清水貝塚第129・148・243号住居跡、第137・338・438号土坑出土土器等（第8図19～第9図20）がある。

加曽利E I式新段階 口縁部文様帶に渦巻文と区画文を交互に配す土器（第9図22・24・25・26）が主流となる。縄文地に波状隆帯を配す土器（第9図23）も引き続き存在する。関東地方南西部では頸部無文帯を持つ段階であるが、前段階同様持たない土器もある。

大松遺跡SK100出土土器、子和清水貝塚第188号住居跡、第185号土坑出土土器（第9図21～26）が本段階の良好な一括遺物である。

以上、下総台地（北部中心）における中期前・中葉の土器の変遷を第11・12図のようにとらえてみた。

5 栃木県北部の編年

関東地方東部の下総台地と対比するかたちで、那須地方を中心とする栃木県北部の土器編年案を示す。本来は、地域差を考慮しなくてすむ「那須野が原」程度の狭い範囲の土器を対象として編年的位置づけを行いたいところであるが、各細別型式の土器組成を示すほどの資料数に乏しい。そこで、旧那須郡域および西隣の旧塩谷郡域（主に矢板市域）を含めた地域を対象とする。⁽¹⁰⁾ 資料が不足した細別型式では、隣接地域で補うこととした。

阿玉台I a式 阿玉台I a式は、那須地方では古くから何耕地遺跡例（第14図7・8）が知られていたようである。那須地方に隣接する矢板市坊山遺跡に、頂部が尖った波状口縁の好例がある（第14図6）。波頂部左側縁に二つの抉りが見られる。波状口縁で、頂部が平坦になり、ここにキザミを加える例（第14図7～9）もある。平縁の土器には、口縁に狭い区画文を配す土器（第14図1）、口縁部直下に直接角押文でモチーフを描く土器（第14図4）がある。一括遺物には恵まれない。やや地域が離れるが日光市湯西川の仲内遺跡SK112・709出土土器（第14図1～5）、栃木県中部になるが宇都宮市大志白遺跡SI131出土土器（第29図1・2）が一括遺物の好例である。これらはほぼ阿玉台I a式土器のみで構成されており、この時期栃木県北部は阿玉台I a式土器が主体を占めたようである。筆者は、七郎内II群土器が、五領ヶ台式末の縄文地に有節沈線を施す土器（雷七類の一部、竹ノ下式土器）の系譜を引く土器と考えている。かつて、波頂部側縁の抉り等阿玉台I a式の特徴を持ち、地文に縄文を持つ滝田

内遺跡の土器（第31図8）を、阿玉台Ia式段階の七郎内II群土器⁽¹¹⁾として取り上げ、前述した七郎内II群土器の系統観の傍証とした（塚本1990）。この時期に、七郎内II群土器など、大木式系土器が少量伴うことが推定できる。

阿玉台Ib式古段階 矢板市石関遺跡第1号住居跡出土土器（第14図10～15）をあげることができる⁽¹²⁾。原体圧痕を施す大木7b式土器（第14図13）が1点出土しており、この段階も阿玉台式主流で、少量の大木式系土器が伴うと考えられる。矢板市山苗代A遺跡では、該期の土器を出土した土坑を複数調査した（進藤1996）。第2・22号土坑出土土器（第14図16～21）は、出土した点数は少ないが、この時期の一括遺物と考えられる。第2号土坑では、七郎内II群土器（第14図17）が共伴した。阿玉台Ib式土器（第14図16・18）は、角押文の筋が側線と直交し、区画内に角押文によるモチーフが乏しいため、古段階と判断した。狭い区画文間に円盤状の貼付文を配す例（第14図21）は、阿玉台Ia式～Ib式古段階に多くみられる。

阿玉台Ib式新段階 破片資料は多いが、良好な一括遺物は少なく、僅かに大田原市地蔵山遺跡出土土器（第14図22～35）がある。地蔵山遺跡例は、口縁部区画内に密に角押文を配した例（第14図23）があり、体部にヒダ状圧痕ではなくキザミ目列が多いことから、阿玉台Ib式新段階と判断した。栃木県中部には好例として芳賀町免の内台遺跡SI5出土土器（第29図10～13）がある。ともに図化・掲載された土器を見る限り、阿玉台Ib式土器が主流である。地蔵山例には地文縄文で、沈線でモチーフを描く土器と全面縄文施文の体部が存在し、大木式系土器が少量伴うことが分かる。

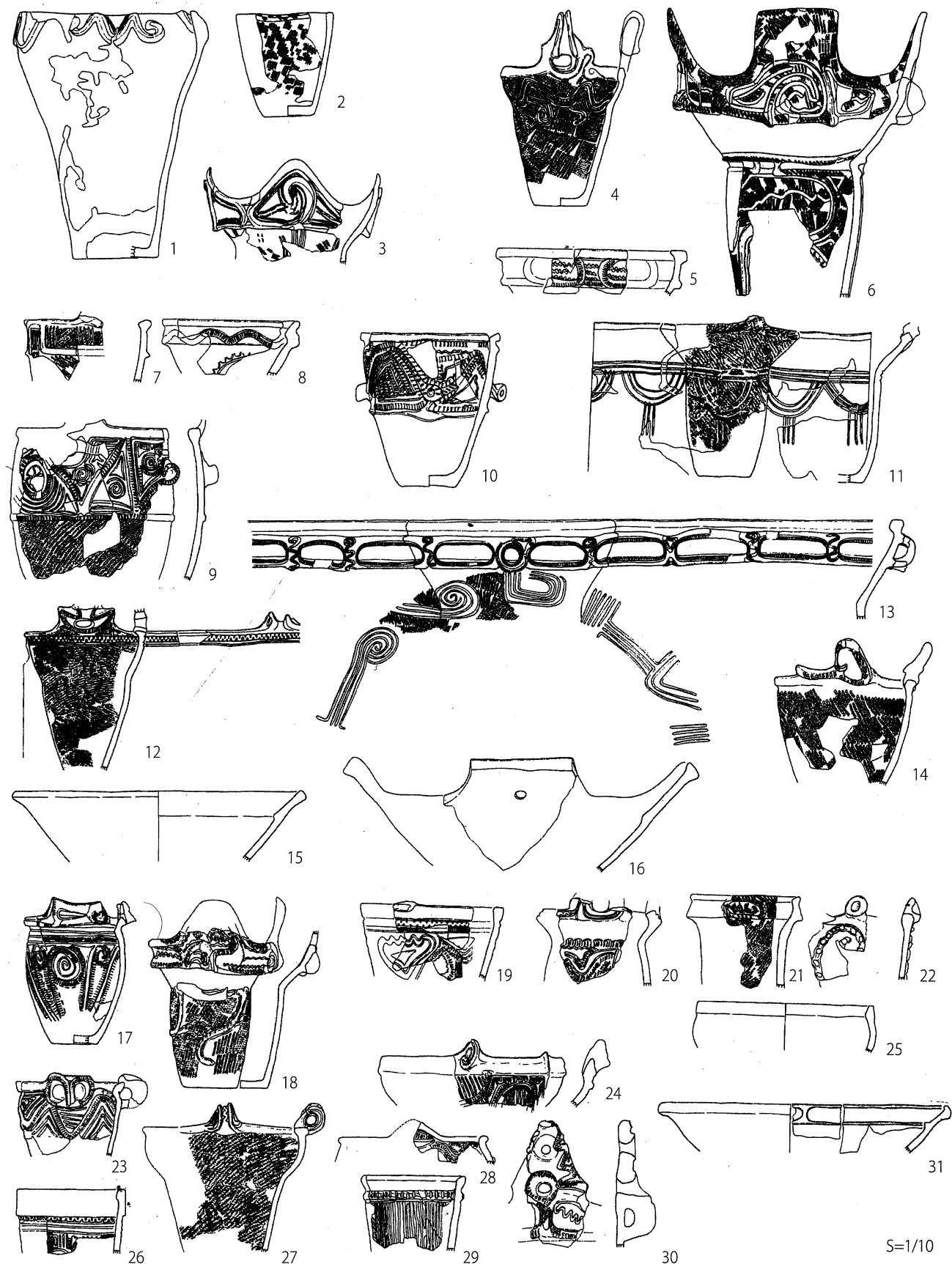
なお、隣接する茨城県北部の常陸大宮市滝ノ上遺跡SK178出土土器（第29図3～9）は、新古の別は不明であるが阿玉台Ib式の一括遺物である。器形復原可能な土器は、阿玉台式が5点、大木式系土器が2点（原体圧痕の土器1点、縄文地文で隆帯を貼付する土器1点）であり、土器の組み合わせは石関遺跡例と似た傾向にある。

阿玉台II式 三輪仲町遺跡SK136・545出土土器（第15図1～11）が良好な一括遺物である。SK136からは、器形復原可能な阿玉台式土器が5点（第15図1～4・7）、大木7b式土器が3点（第12図5・6・8；隆帯と沈線でモチーフを描く土器1点、原体圧痕の土器1点、沈線を施す体部1点）、破片として七郎内II群土器が出土した。SK545からは、器形復原可能な阿玉台II式土器3点が出土した。破片資料では阿玉台II式と七郎内II群土器が半々である。なお楓沢遺跡SK390出土土器は（第15図12・13）は、七郎内II群土器である。伴出した時期判別可能な阿玉台式土器4片がいずれも阿玉台II式土器で、他の破片は七郎内II群土器を主体とするため、この時期に位置づけた。

阿玉台II式期は、阿玉台式が6～7割以上で、大木7b式土器が3～4割のようである。大木7b式は原体圧痕の土器と隆帯や沈線を施す土器が主体のようである。阿玉台Ib式期よりも大木7b式の割合が増すかもしれない。また七郎内II群土器が破片として確実に伴っている。

栃木県中央部の例であるが、高根沢町石神遺跡I区2号住居跡およびII区遺物群1出土土器（第29図14～22）、上の原遺跡JT3出土土器（第29図23・24）がこの段階の良好な一括遺物である。ともに七郎内II群土器が伴っている。

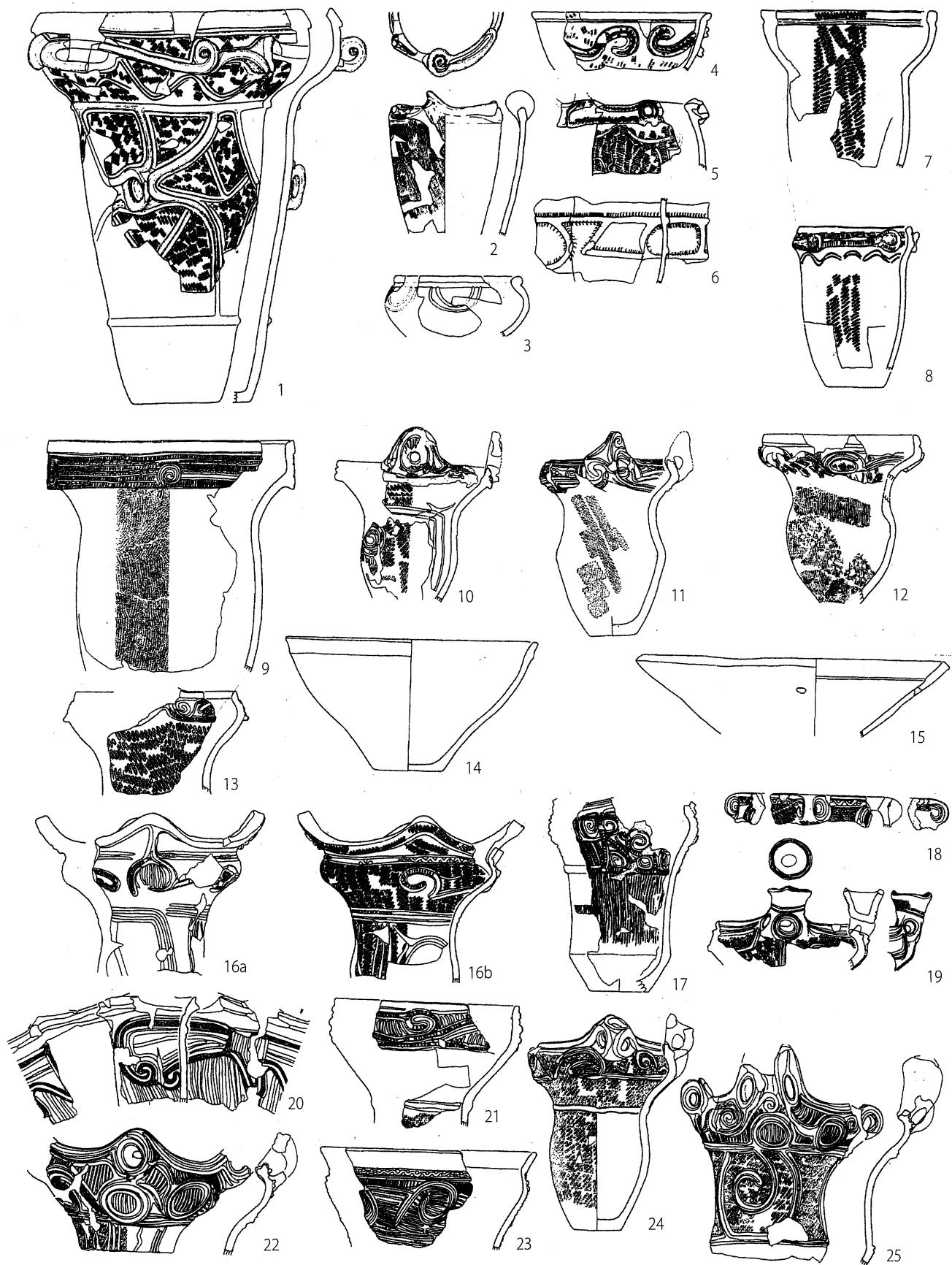
阿玉台III式古段階 阿玉台II式土器と縄文を施文しない阿玉台III式が共伴する段階である。阿玉台式土器は、平縁と波状縁の土器の両者が存在する。楓沢遺跡SK-392・393出土土器、三輪仲町遺跡JD-29出土土器、品川台遺跡第5号袋状土坑出土土器、小鍋前遺跡SK166出土土器（第15図14～第16図22）など良好な一括遺物に恵まれている。品川台遺跡A地点は、ほぼこの時期限定で営まれた集落と考えられる。栃木県北部に隣接する福島県白河市南堀切遺跡第5号住居跡出土土器（第30図1～15）が本段階の土器組成の標準と考えている。出土量が多い楓沢遺跡SK-393出土土器（第16図1～19）の観察から、これまで主流であった阿玉台式土器を大木式系土器が凌駕するようになったことが分かる。七郎内II群土器（第15図15・21・22、第16図4～10）が爆発的に増加し、土器組成の主体を占めるようになる。この時期、七郎内II群土器をはじめとする大木式系土器には、扁平な粘土板によるS字状の突起が付く（第15図15）。隆帯や沈線で簡素な文様を描く大木式系土器（第16図11）も共伴する。本地域では共伴例がないが、南堀切遺跡第5号住居跡（第30図12）や栃木県中央部の宇都宮市竹下遺跡SK110（第29図27）の共伴事例から、原体圧痕の土器も残るようである。次段階以降増加する、楓沢型⁽¹³⁾（第16図13）や湯坂型⁽¹⁴⁾（第15図18、第16図22）が伴う例もあり、この段階に出現していたと考えることができる。



1～3：南作遺跡 168号土坑 4～16：聖人塚遺跡 012住居跡 17～31：聖人塚遺跡 014住居跡

第6図 下総台地の阿玉台式期の土器（6）

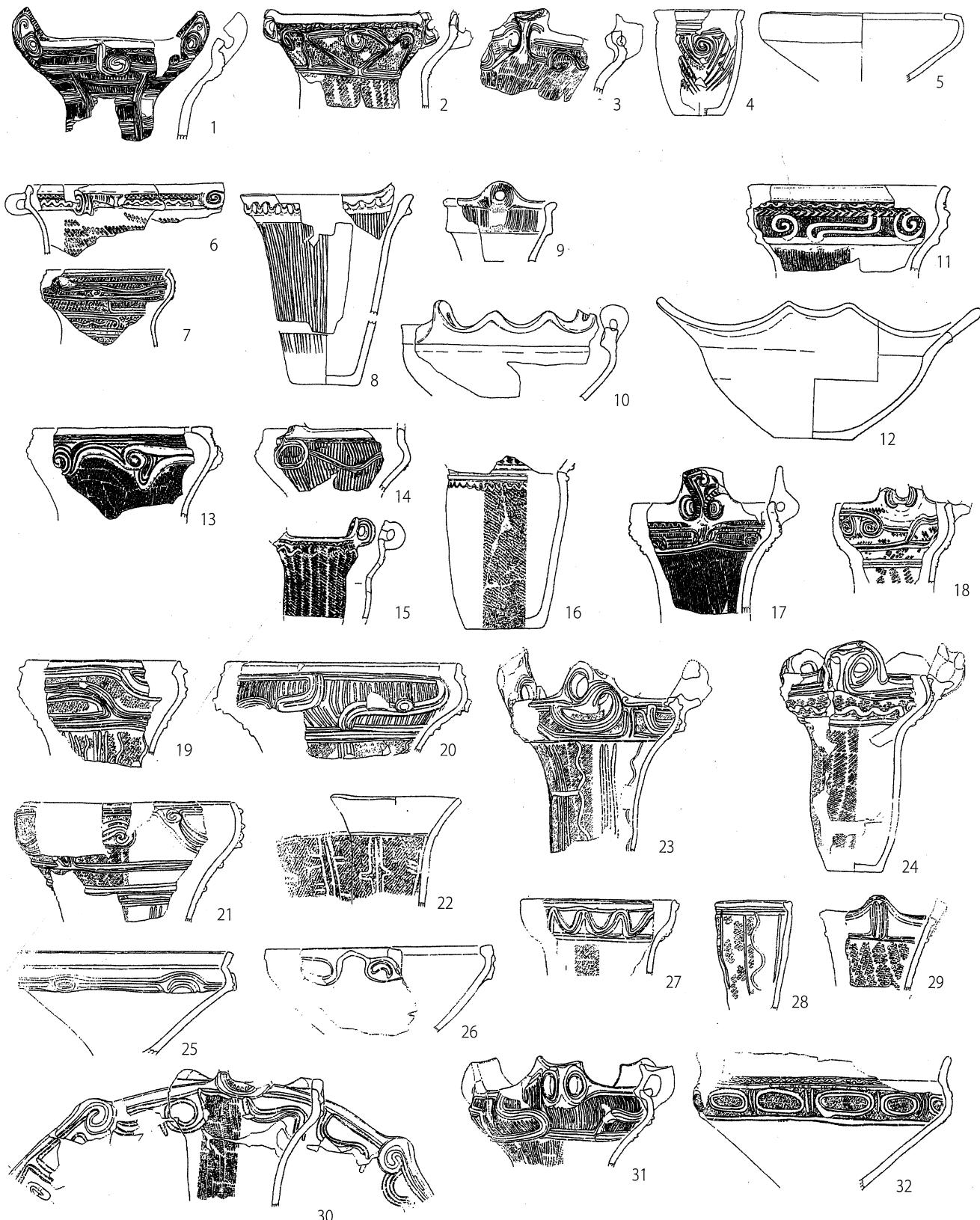
S=1/10



1～6：水砂遺 034 住居跡 7・8：子和清水貝塚 56 号住居跡 9～14：大松遺跡 SI091
15～19：大松遺跡 SI101 20～25：大松遺跡 SK053

S=1/10

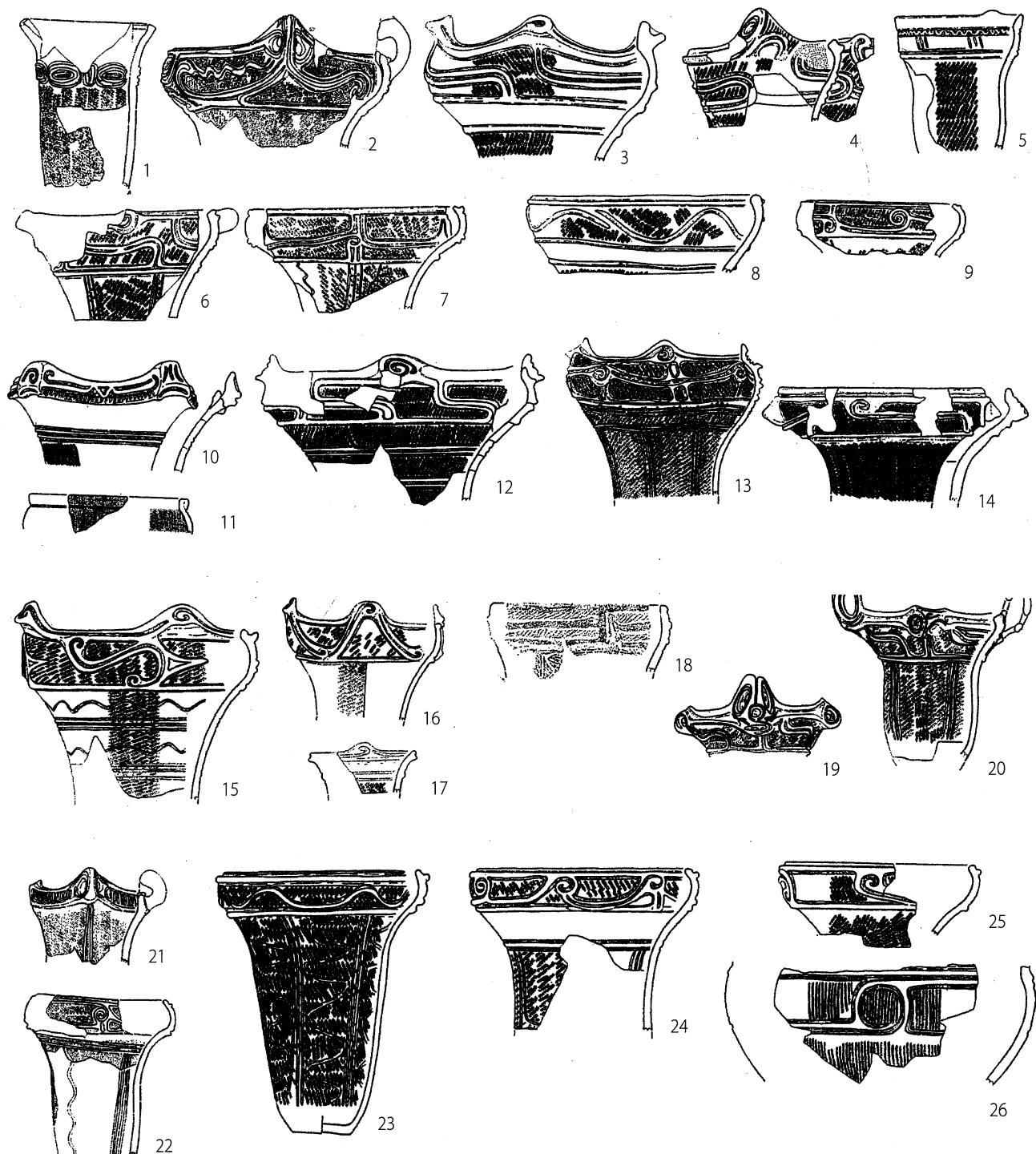
第7図 下総台地の阿玉台式期の土器（7）・加曾利E-I式期の土器（1）



S=1/10

- | | | |
|---------------------|---------------------|---------------------|
| 1～5：大松遺跡 SK077 | 6～10：子和清水貝塚 184号住居跡 | 11・12：子和清水貝塚 223号土坑 |
| 13～16：子和清水貝塚 224号土坑 | 17・18：子和清水貝塚 522号土坑 | 19・20：大松遺跡 SI036 |
| 21～29：大松遺跡 SI088 | 30～32：大松遺跡 SI093 | |

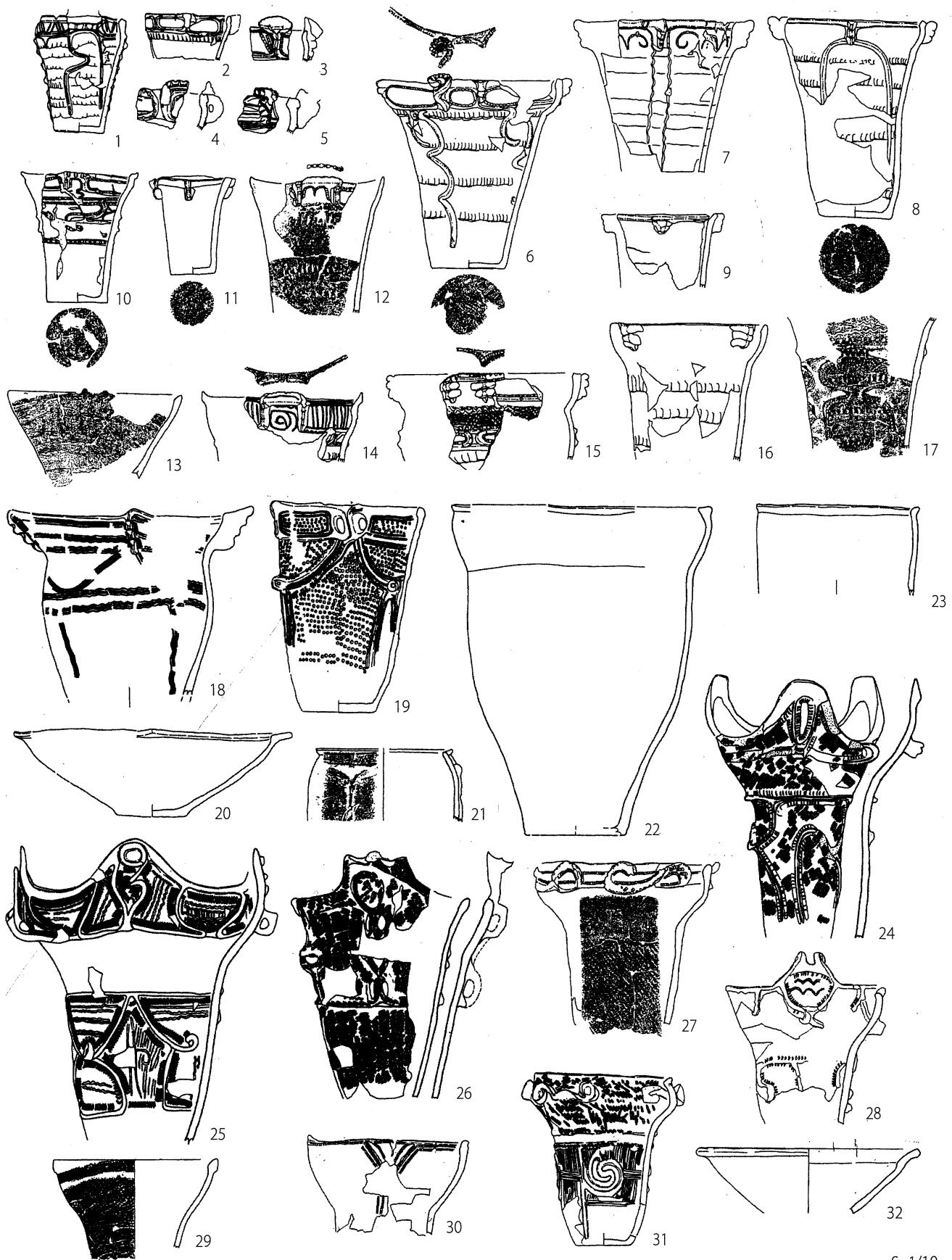
第8図 下総台地の加曾利E-I式期の土器（2）



S=1/10

- | | | |
|-----------------------|----------------------|----------------------|
| 1・2：大松遺跡 SK099 | 3～5：子和清水貝塚 129 号土坑 | 6～9：子和清水貝塚 148 号土坑 |
| 10～12：子和清水貝塚 243 号住居跡 | 13・14：子和清水貝塚 338 号土坑 | 15～18：子和清水貝塚 137 号土坑 |
| 19・20：子和清水貝塚 438 号土坑 | 21・22：大松遺跡 SK100 | 23・24：子和清水貝塚 185 号土坑 |
| 25・26：子和清水貝塚 188 号住居跡 | | |

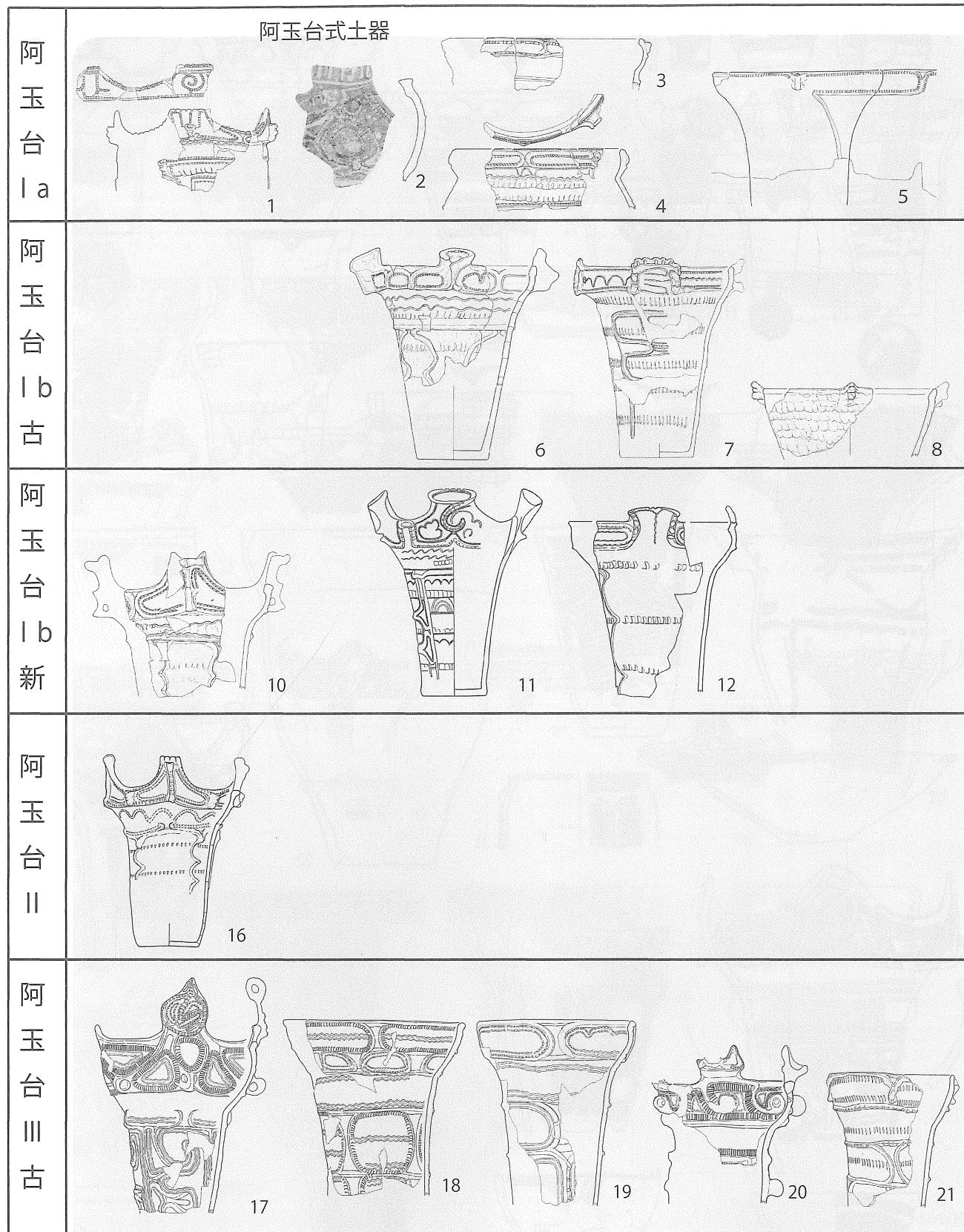
第9図 下総台地の加曽利 E I 式期の土器（3）



S=1/10

1～5：前田村遺跡第365号住居跡
6～17：東田中遺跡第29号竪穴建物跡
18～23：中台遺跡第27号土坑
24～32：大谷津A遺跡第65号住居跡

第10図 茨城県南部の阿玉台式土器



1・3・4：根之神台遺跡

6～8：中山新田 I 遺跡 081 住居跡

12：子和清水貝塚 33 号住居跡

17・19～21：大松遺跡 SI087

2：寒風台遺跡土坑 4

10：水砂遺跡 028 住居跡

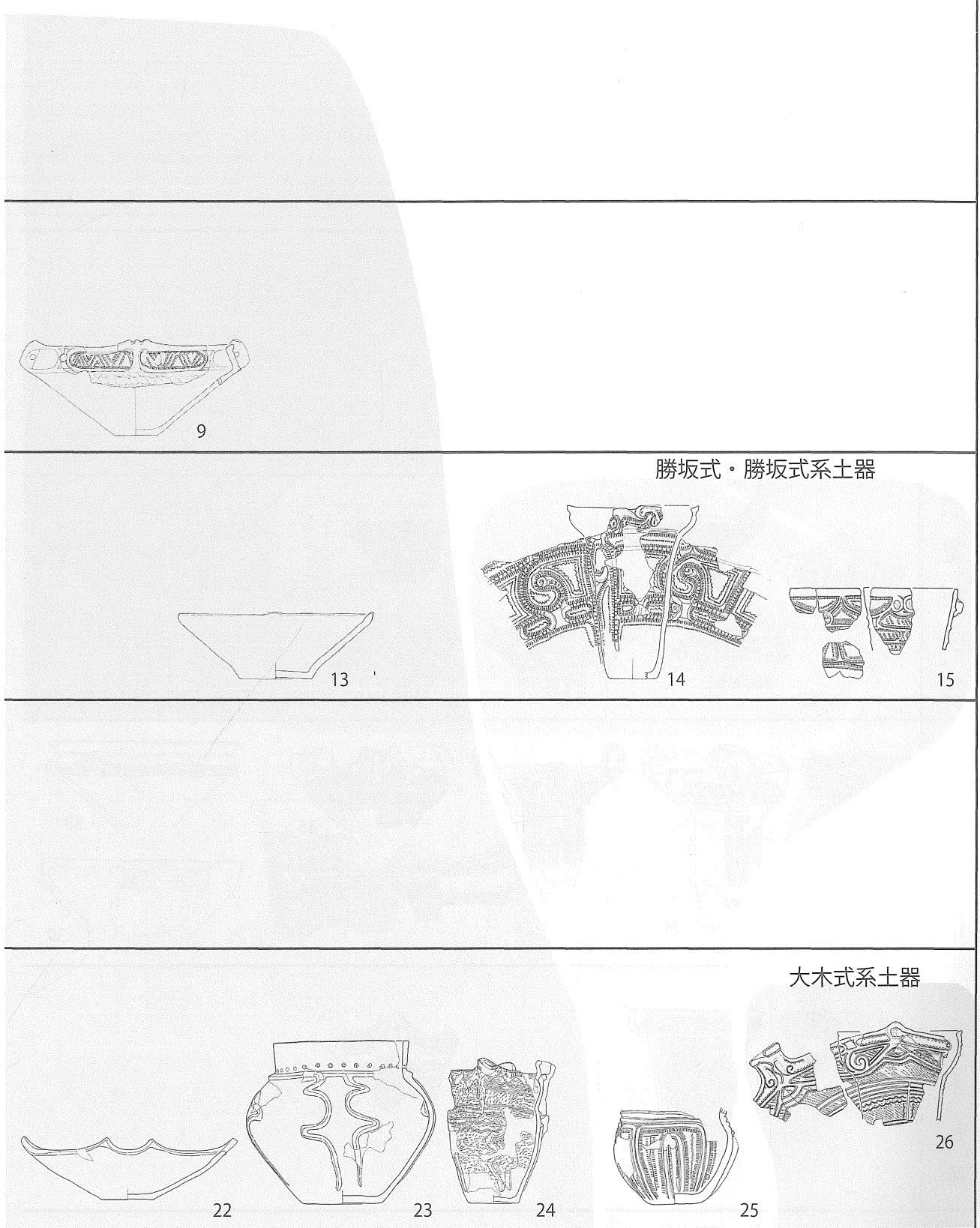
16：子和清水貝塚 111 号住居跡

18：大松遺跡 SI090

5：中山新田 I 遺跡 151 埋甕土坑

11：高根木戸遺跡第 72 号住居址

第 11 図 下総台地の縄文時代中期前・中葉の土器編年（1）



9：中山新田Ⅰ遺跡 081 住居跡

13・14：中山新田Ⅰ遺跡 096 住居跡

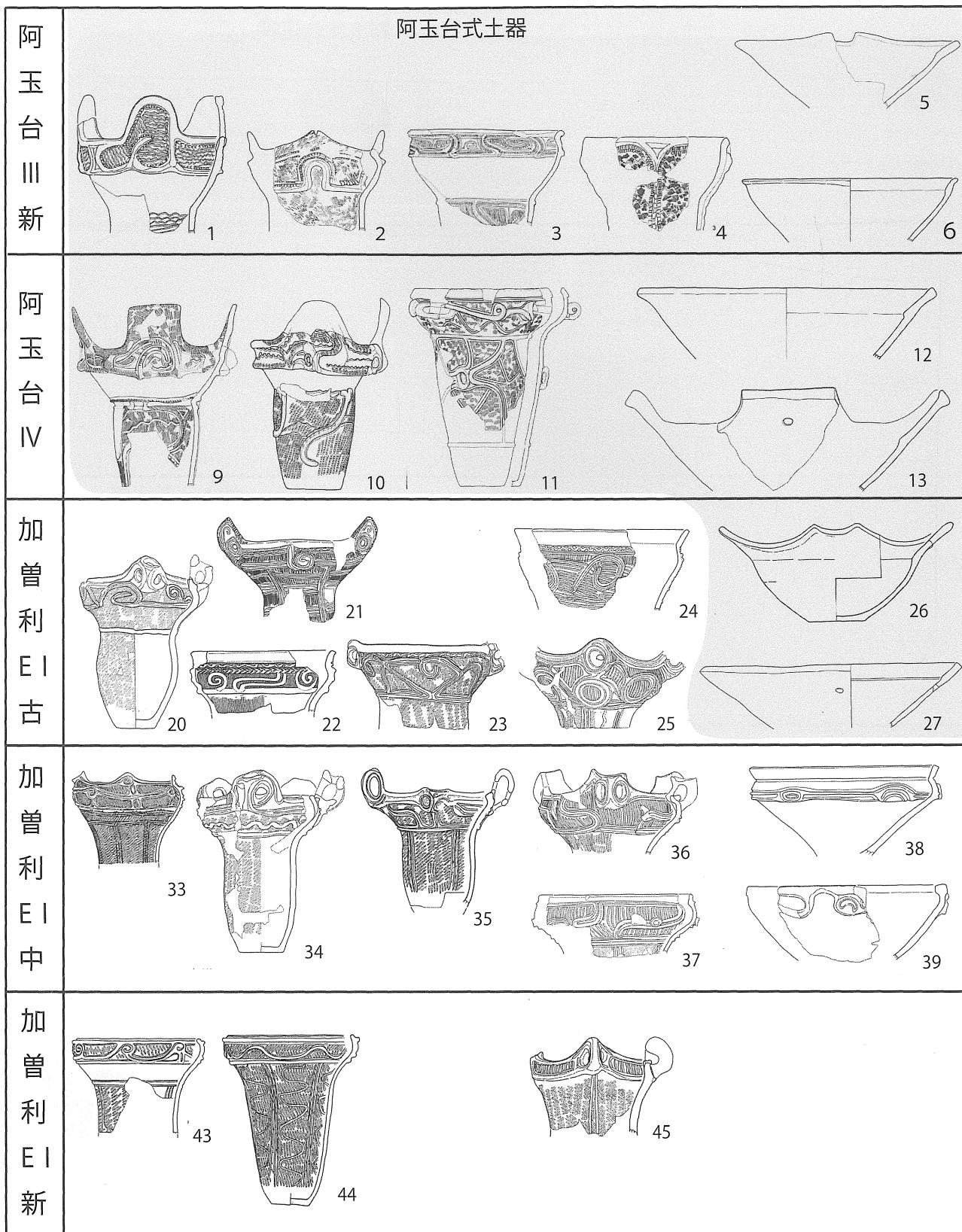
15：子和清水貝塚 333 号住居跡

22～24：大松遺跡 SI087

25：大松遺跡 SI090

26：子和清水貝塚 117 号住居跡

同 左



1・6 : 大松 SK085

2 : 南作 126 号土坑

3 : 大松 SK082

4 : 南作 77 号住居跡

5 : 南作 135 号土坑

9・12・13 : 聖人塚 012 住居跡

11 : 水砂 034 住居跡 20・24・25 : 大松 SK053

21・23 : 大松 SK077

22・26 : 子和清水 223 号土坑

27 : 大松 SI101

33 : 子和清水 338 号土坑

34・38・39 : 大松 SI088

35 : 子和清水 438 号土坑

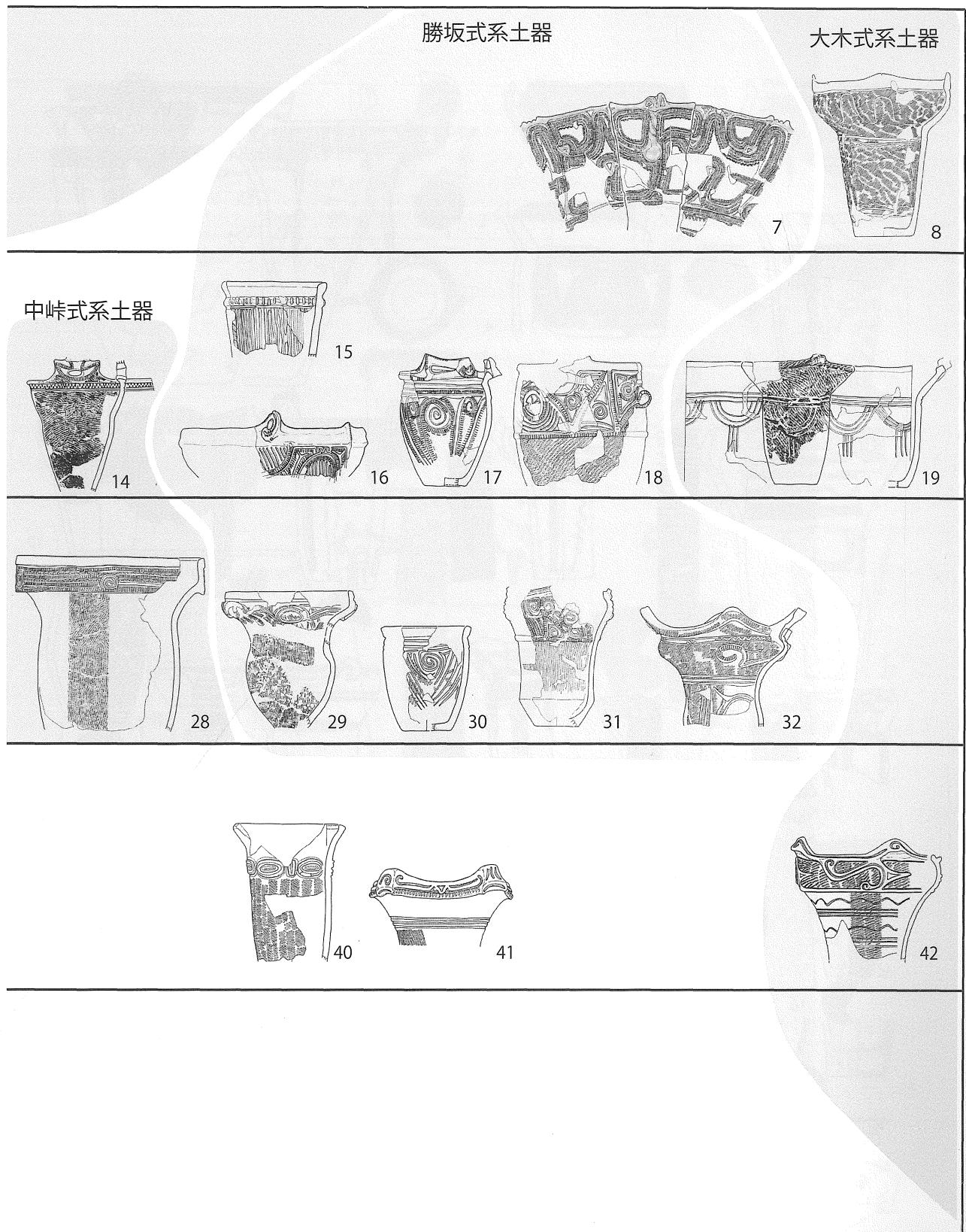
36 : 大松 SI093

37 : 大松 SI036

43・44 : 子和清水 185 号土坑

46 : 大松 SK100

第 12 図 下総台地の縄文時代中期前・中葉の土器編年（2）



7 : 大松 SI085

8 : 南作 92 号住居跡

14・18・19 : 聖人塚 012 号住居跡

15~17 : 聖人塚 014 住居跡

28・29 : 大松 SI091

30 : 大松 SI077

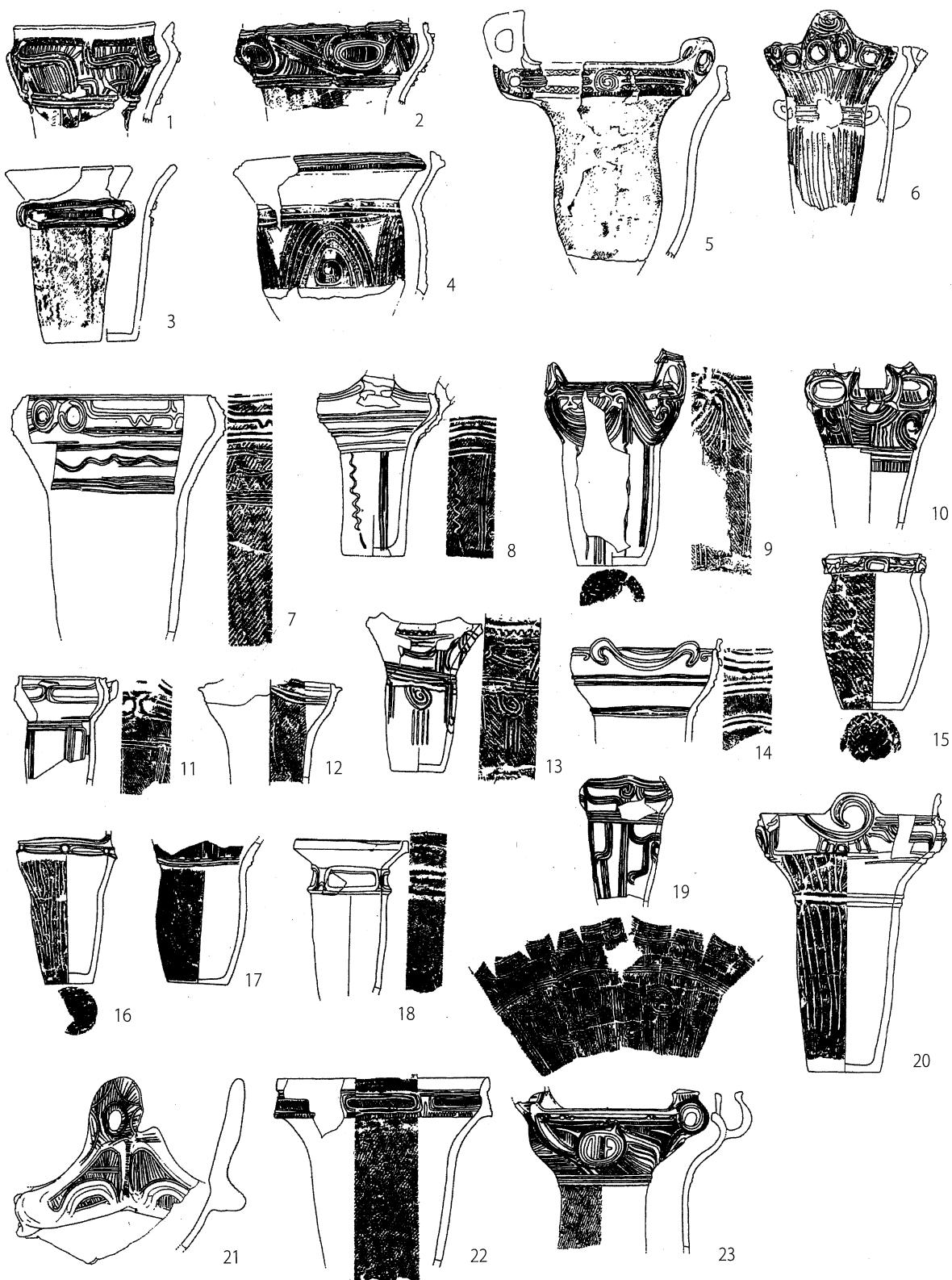
31・32 : 大松 SI101

40 : 大松 SK099

41 : 子和清水 243 号住居跡

42 : 子和清水 137 号土坑

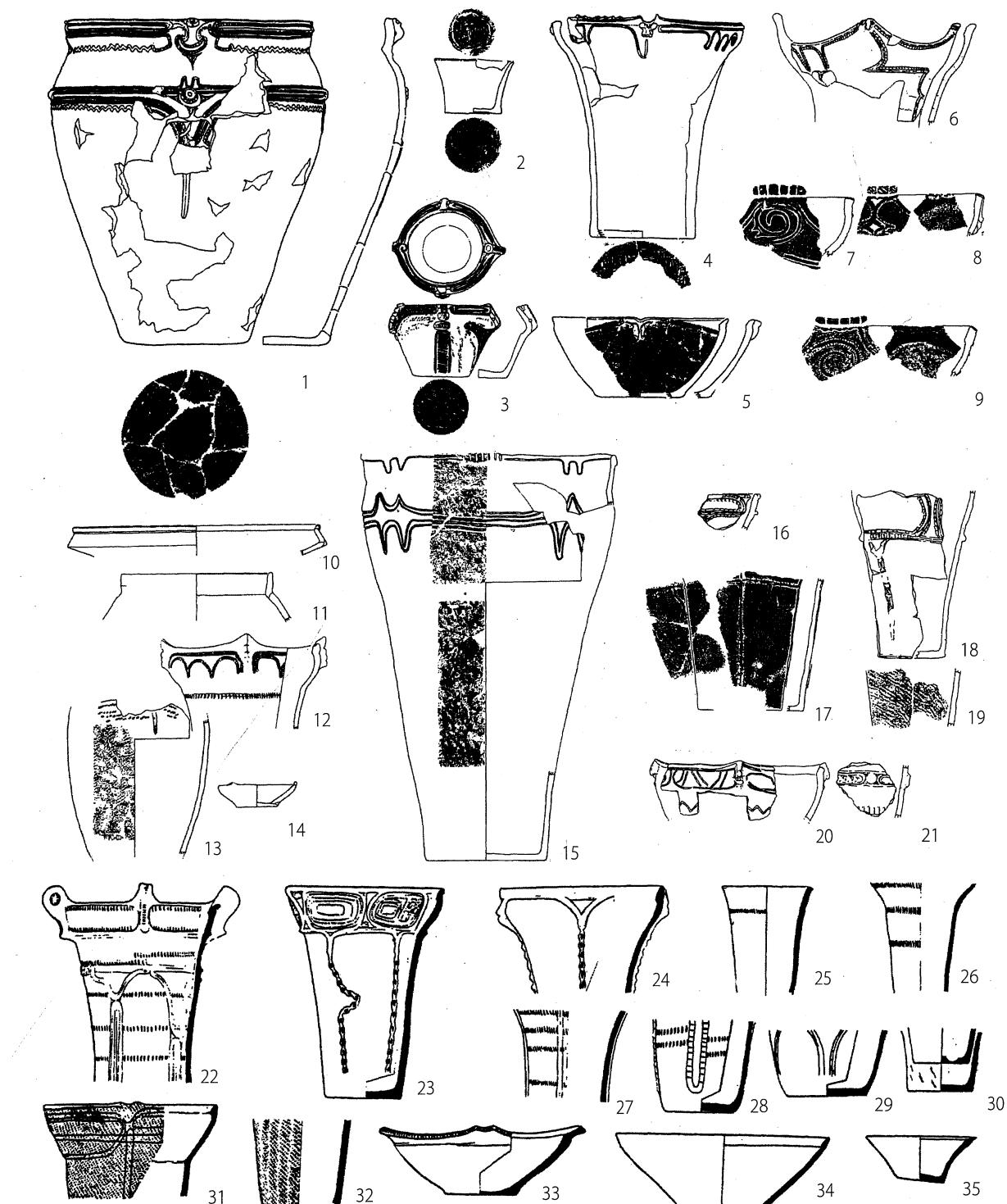
同 左



S=1/10

1～6：西原遺跡第61号住居跡 7～23：上の原遺跡 JD12

第13図 鬼怒川・小貝川流域の加曾利E-I式期の土器



S=1/10

1～3：仲内遺跡 SK112

7・8：何耕地遺跡

16～19：山苗代 A 遺跡第 2 号土坑 20・21：山苗代 A 遺跡第 22 号土坑

4・5：仲内遺跡 SK709

9：曲畠遺跡

6：坊山遺跡

10～15：石関遺跡第 1 号住居址

22～35：地蔵山遺跡

第 14 図 栃木県北部の阿玉台式期の土器（1）

阿玉台Ⅲ式新段階 湯坂遺跡 T1-V 区土壙出土土器（第 17 図）が本段階の代表例といえる。他に、三輪仲町遺跡 SK212・528a、JD77 出土土器、楓沢遺跡 SK74、P87 出土土器（第 16 図 23～39、第 18 図）が良好な一括遺物である。大木式系土器⁽¹⁵⁾では、楓沢型が増加する段階である。但し、湯坂遺跡 T1-V 区土壙出土土器では、七郎内 II 群土器（第 17 図 7～11・16・20）が主体を占め、楓沢遺跡 P87 出土土器では楓沢型（第 18 図 2・3）が主体を占めており、阿玉台Ⅲ式新段階内で、大木式系土器の主体が、七郎内 II 群土器から楓沢型へ移行した可能性もある。湯坂型（第 17 図 12・13・17～19）が安定して存在し、越後の火炎土器を模倣した火炎系土器（第 18 図 4～6）が出現する。大木式系土器の把手は、環状の粘土を組みあわせ、中空化が始まる（第 17 図 8、第 18 図 2・3）。S 字状突起も、粘土環が付加され、中空化する（第 16 図 31・34）。

大木式系土器が主流となったとはいえ、阿玉台Ⅲ式土器は安定して存在する（第 16 図 24～26・35・36、第 17 図 1～6、第 18 図 1・11～14・20）。下総台地と比較しても量的にもまとまっている。阿玉台Ⅱ式までの阿玉台式土器の中心地は、従来の指摘のとおり、霞ヶ浦沿岸から利根川下流域といえるが、阿玉台Ⅲ式（新段階）以降は、むしろ栃木・茨城両県域が中心であったと考えられる。阿玉台 I a 式、I b 式新段階、II 式では、波状口縁の土器と平縁の土器がほぼ同量であるが、阿玉台Ⅲ式新段階以降になると、平縁の量が減り、波状縁の土器が主体を占めるようになる。

阿玉台IV式段階 楓沢遺跡 14H-P2、17H 炉下 P 出土土器、小鍋前遺跡 SK93・125・162 a・257 出土土器（第 19 図 1～第 21 図 17）などが良好な一括遺物である。⁽¹⁶⁾ 前段階同様、大木式系土器が優勢であるが、阿玉台IV式土器も一定量、安定して存在する。ほとんどが波状口縁で、平縁は非常に少ない。大木式系土器では、楓沢型が主流を占める（第 19 図 8・9）。これに、口縁部に押捺隆帯を巡らせた、非装飾的な土器（第 19 図 26）が伴う。七郎内 II 群土器も残存し、一定量存在する（第 19 図 5～7）。他の大木式系土器と連動して、隆帯が太くなり、把手が中空化するなど、盛行期の阿玉台Ⅲ式古段階のものから変化が認められる。栃木県域に好例はないが、福島県や茨城県の状況から、中空化した把手に有節沈線を施す七郎内 II 群の特徴的な浅鉢が存在したと思われる（やや異なる楓沢遺跡例を編年表に提示；第 32 図 16）。火炎系土器も存続する（第 19 図 25）。突起は中空化が進み、より立体化する（第 19 図 9・11、第 20 図 24・30）。

加曾利 E I 式古段階 浄法寺遺跡第 16・18 号土坑出土土器、三輪仲町遺跡 SK050、楓沢遺跡 SK213 出土土器、長者が平遺跡 SK4 出土土器、浅香内 8H 遺跡 F. 6 出土土器、小鍋前 SK90 出土土器（第 21 図 18～第 24 図 13）等が良好な一括遺物である。この段階になると土器が大きく交替する。阿玉台式土器が終焉を迎える、大木式系土器も七郎内 II 群土器、湯坂型が消滅する。楓沢型も僅かな例を除き、ほぼ消滅する。火炎系土器は存続する（第 22 図 15）。以後に主流となるキャリバー形を呈し、口頸部に一帯の文様帶を配す土器（加曾利 E 式土器を含む）が出現する（第 22 図 6・20、第 23 図 18、第 24 図 1・8）。沈線を沿わせない貼り付け隆帯で、口縁部文様帶に渦巻文や波状文を配す土器（第 22 図 6・20、第 23 図 18）がこの段階の指標となる⁽¹⁷⁾。そしてこの時期、火炎系土器の要素（曲隆線による器面の充填）を取り入れた在地の土器、浄法寺類型⁽¹⁸⁾が組成の主体を占める（第 21 図 19、第 22 図 1～4、16～19、第 23 図 1～9・20）。口頸部に縦位短沈線を充填する、下総台地型の加曾利 E I 式土器の要素を取り入れたと思われる土器（第 22 図 5、第 23 図 12）、また下総台地型の加曾利 E I 式土器⁽¹⁹⁾そのものも少量存在するようである。前代まで主に楓沢型に付いていた中空の突起は、浄法寺類型や口頸部に一帯の文様帶を配すキャリバー形の土器に引き継がれる。立体化し、細い貼付隆帯で加飾するものも現れる。正面から見て左右均等の眼鏡状の円孔があり、裏面側に円孔を配すものが安定して存在する。日沖剛史・福田貴之・浅間陽等が明らかにしたことであるが、当地域でも阿玉台式系の浅鉢（第 22 図 8、第 24 図 7）がこの段階まで残る（日沖・福田・浅間 2014）。

加曾利 E I 式中段階 三輪仲町遺跡 SK086、JD3 出土土器、岩船台遺跡 SK1・16A 出土土器（第 24 図 14～第 26 図 12）が本段階の良好な一括遺物である。キャリバー形の土器では、口頸部文様帶に沈線が添う隆帯で文様が配される。横 S 字状文や弧状文がみられる。これらは、口頸部文様帶の上下に接するように配されるか、縦位の短い隆帯で上下の区画と連繋される（第 25 図 2・7・8、第 26 図 8・11）。関東地方東部に多いとされるクランク文の土器（第 25 図 3、第 26 図 6・7）もある。この時期、東北地方の大木 8b 式と共に出現する土器が出現する。キャリバー形で口頸部に一帯の文様帶を配し、横 S 字文に剣先文を付ける土器（第 25

図15、第26図10)、全体が大きな樽形の器形を呈す土器(第25図9・16)の両者が存在する。浄法寺類型と火炎系土器も存続する。中空の把手は大形化する。そして中空突起の円孔に沿って沈線を施すようになる。また前段階までの正面から見て円孔が左右に二つ眼鏡状に並ぶ把手の他に、正面に1孔を配し、左右及び裏側に3孔を配するもの、更には上面に1孔を配し計5孔となり、全体が立方体に近くなる箱状突起も現れる⁽²⁰⁾。

加曇利E I式新段階 楠沢遺跡SK147・154出土土器、三輪仲町遺跡SK073出土土器、不動院裏遺跡F.17出土土器(第26図13～第28図20)等がこの段階の良好な一括遺物である。キャリパー形の口頸部一帯型の土器は、口頸部文様帶に渦巻文と区画文を交互に配す文様となる(第26図14・15、第27図1～3・5・16・17、第28図1～12)。体部に懸垂文を配す加曇利E式土器そのものの土器(第26図15、第27図3・16、第28図8・11・12)と、体部に渦巻文等大木8b式の文様を配す土器(第26図14、第27図5・6、第28図2)とがある。そして中空突起を持つもの(第27図6)もある⁽²¹⁾。大木8b式土器も、剣先文を配すキャリパー形の土器と樽形の土器(第26図13・16・17・19、第27図7～12・15、第28図15・16・20)が存続する。火炎系土器は消滅するようである(本場中越でもこの段階には消滅している)。楠沢遺跡例でもわかるように浄法寺類型も見られなくなるようである⁽²²⁾。

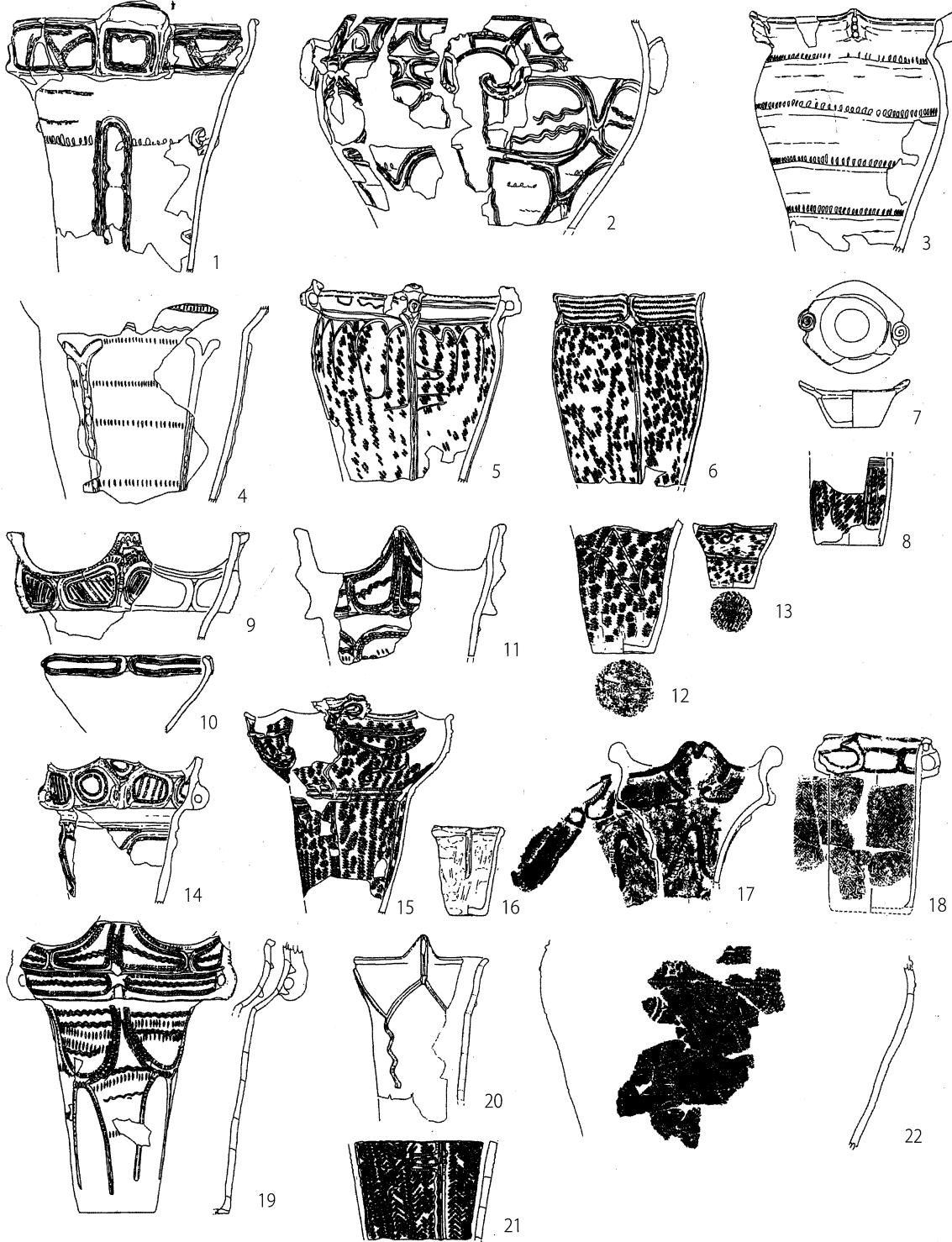
6 今後の課題

栃木県北部の阿玉台I a式期から加曇利E I式期までを、土器群の組合せの変化を中心にその変遷を捉えてみた。浄法寺報文以後の増加資料を用い、地域差を考慮しなくて済む狭い範囲での編年案を目指した。

編年の基軸とした阿玉台式土器と加曇利E式土器は、変遷の画期が捉えやすい。一方、大木式系土器は変遷が漸移的で画期が把握しにくい。そこで今回は、先行研究者の海老原郁雄に習い、土器群の組合せの変化に力点を置き、大木式系土器の位置づけを行った。筆者がこれまで追究してきたとおり、大木式系土器の各系統は、短期間で断絶せず、ある程度変化をとげながら継続する。この系統内での変化は今後も追い続ける必要がある。更に、各系統に共通する要素を見いだし、それが連動して変化する状況が把握できれば、より土器群の変化を正確に把握できる。筆者は、突起の変遷に注目しており、その一部を津南町のシンポジウムで発表し(塚本2018)、本稿でも各段階の突起の特徴に触れた。大木式系中空突起の変遷は、いくつかの変化のパターンが想定されるが、現時点では代表例を羅列したにすぎない。今後は突起の型式学的な変遷、大木式系土器の系統を越えて存在する要素の変化の把握に努めたい。これにより、阿玉台式土器や加曇利E式を伴出しない地域の土器編年ができるようになり、更には新潟県から東北地方南部および関東地方北東部の編年対比が可能になると思われる。

[註]

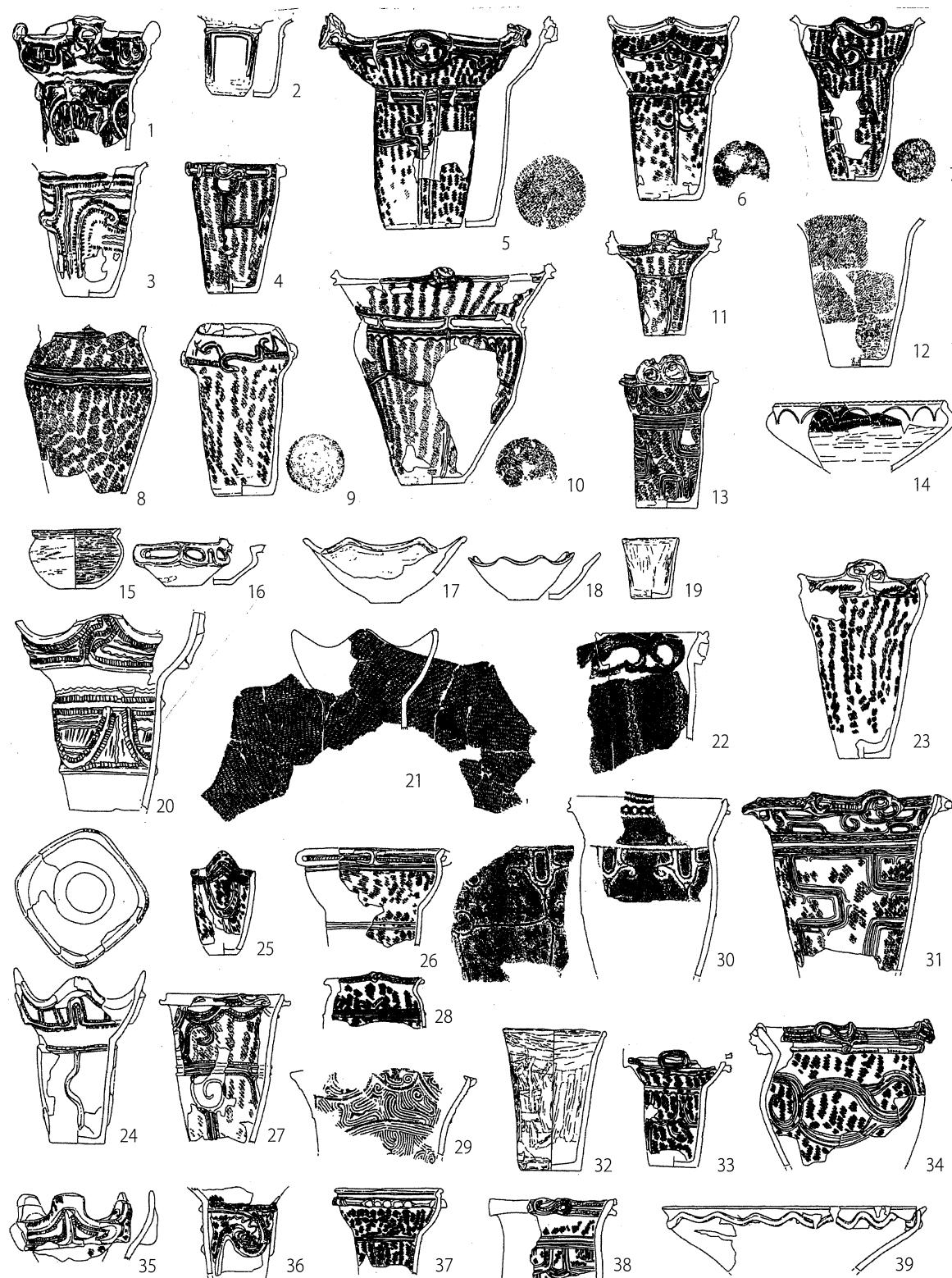
- 1) 後に、下総考古学研究会の後進の研究者が、各地で出土する「中峠式土器」を集めて、この考え方を支持する見解を発表した(下総考古学研究会1998)。
- 2) 近年、西川博孝が柏市大松遺跡の報文で、「加曇利E I式古」の内容を示している(西川2011)。後述するが、この見解が下総台地における該期の土器様相を最も的確に示したものと考えている。
- 3) 「下総台地型」とされる(谷井1987)、口頸部文様帶に縦位沈線を密に配し、クランク文等を配す土器で、隆帶に沈線を沿わせないものが代表的な例である(西原遺跡第61号住居跡例; 第13図1)。
- 4) 下総台地北部の土器だけでは不足する細別型式があるため、一部に旧印旛郡域の四街道市南作遺跡の土器、東京湾岸の船橋市高根木戸遺跡、千葉市後貝塚の土器を取り上げた。下総台地以外の土器は、参考として取り上げても、編年表(第11・12図)には掲載しないこととした。
- 5) 高根木戸遺跡72号住居跡の、平縁の阿玉台I b式は、古段階の特徴があり、学史上取り上げられることが多かったこの一括遺物は、純粹な一括遺物ではない可能性がある。後貝塚は報告者の寺内隆夫により、阿玉台式の器面のヒダ状圧痕とキザミ目の差により、年代差があり純粹な一括資料ではないことが指摘されている(寺内2009)。筆者は、ヒダ状圧痕とキザミ目は、量比の移り変わりとして捉えているため、これを一括遺物として扱うこととする。



S=1/10

1～8：三輪仲町遺跡 SK136 9～11：三輪仲町遺跡 SK454 12・13：楓沢遺跡 SK390
14～16：楓沢遺跡 SK392 17・18：三輪仲町遺跡 JD29 19～22：品川台遺跡第5号袋状土坑

第15図 栃木県北部の阿玉台式期の土器（2）



S=1/10

1～19：楓沢遺跡 SK393 20～22：小鍋内遺跡 SK166 23～32：三輪仲町遺跡 SK212

33～39：三輪仲町遺跡 SK528 a

第16図 栃木県北部の阿玉台式期の土器（3）



S=1/10

1～25：湯坂遺跡 T1-V 区土壤

第17図 栃木県北部の阿玉台式期の土器（4）



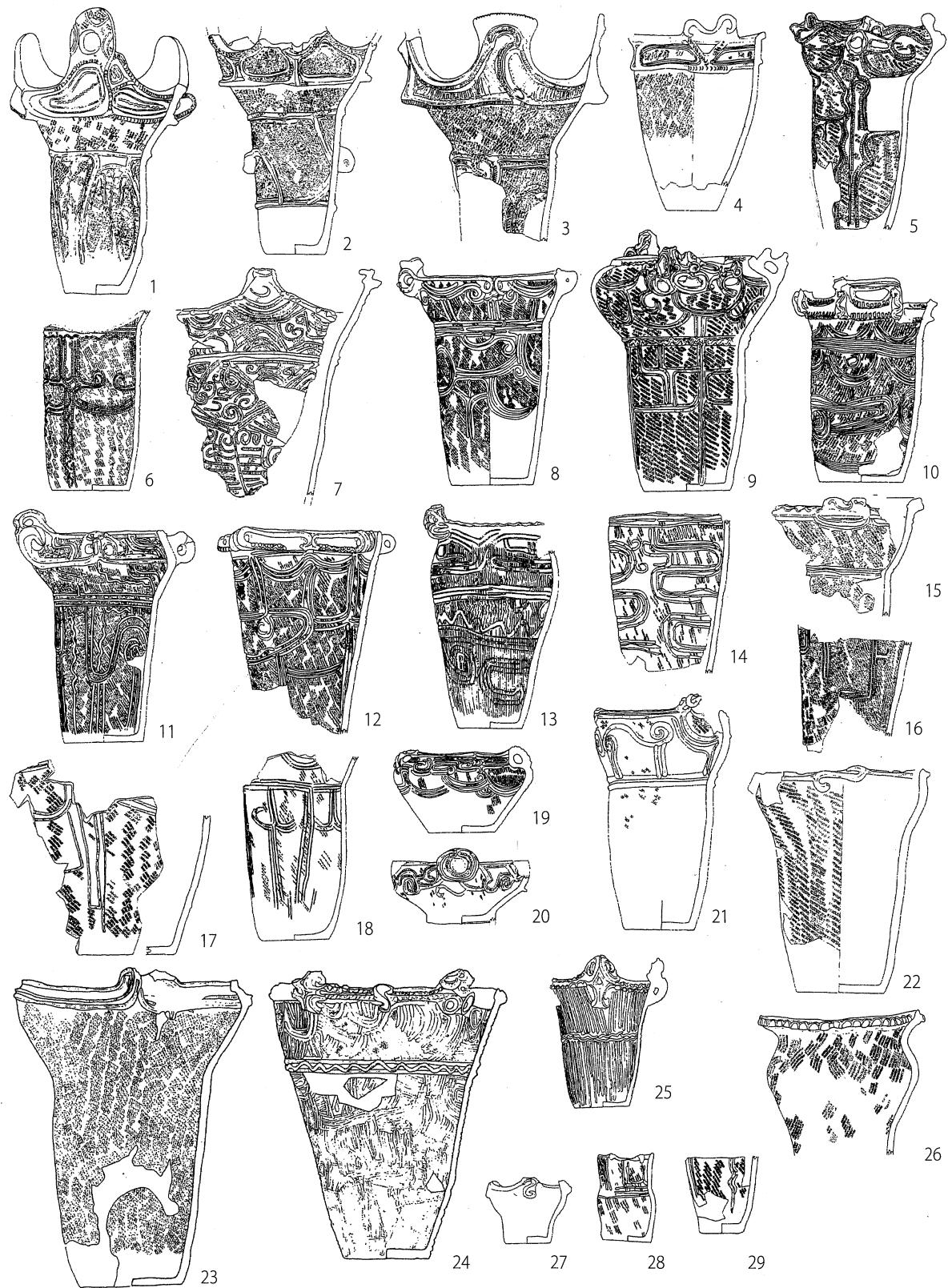
S=1/10

1～10：楳沢遺跡 P87

11～18：楳沢遺跡 SK74

19～21：三輪仲町遺跡 JD77

第18図 栃木県北部の阿玉台式期の土器（5）



S=1/10

1～29：楢沢遺跡 14H-P2

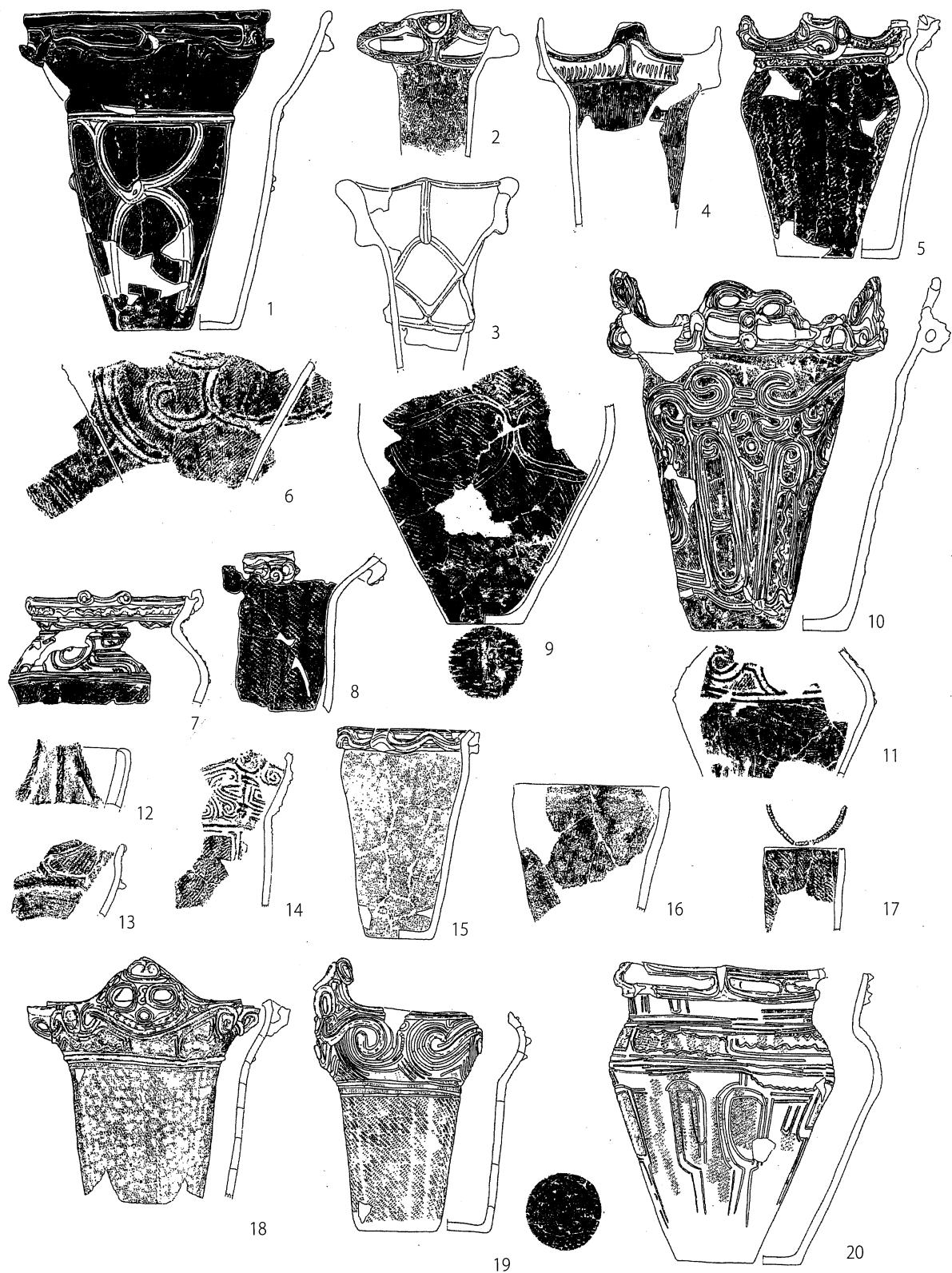
第19図 栃木県北部の阿玉台式期の土器（6）



S=1/10

1～21：楢沢遺跡 17H 炉下P 22～26：小鍋内遺跡 SK125 27～33：小鍋内遺跡 SK257

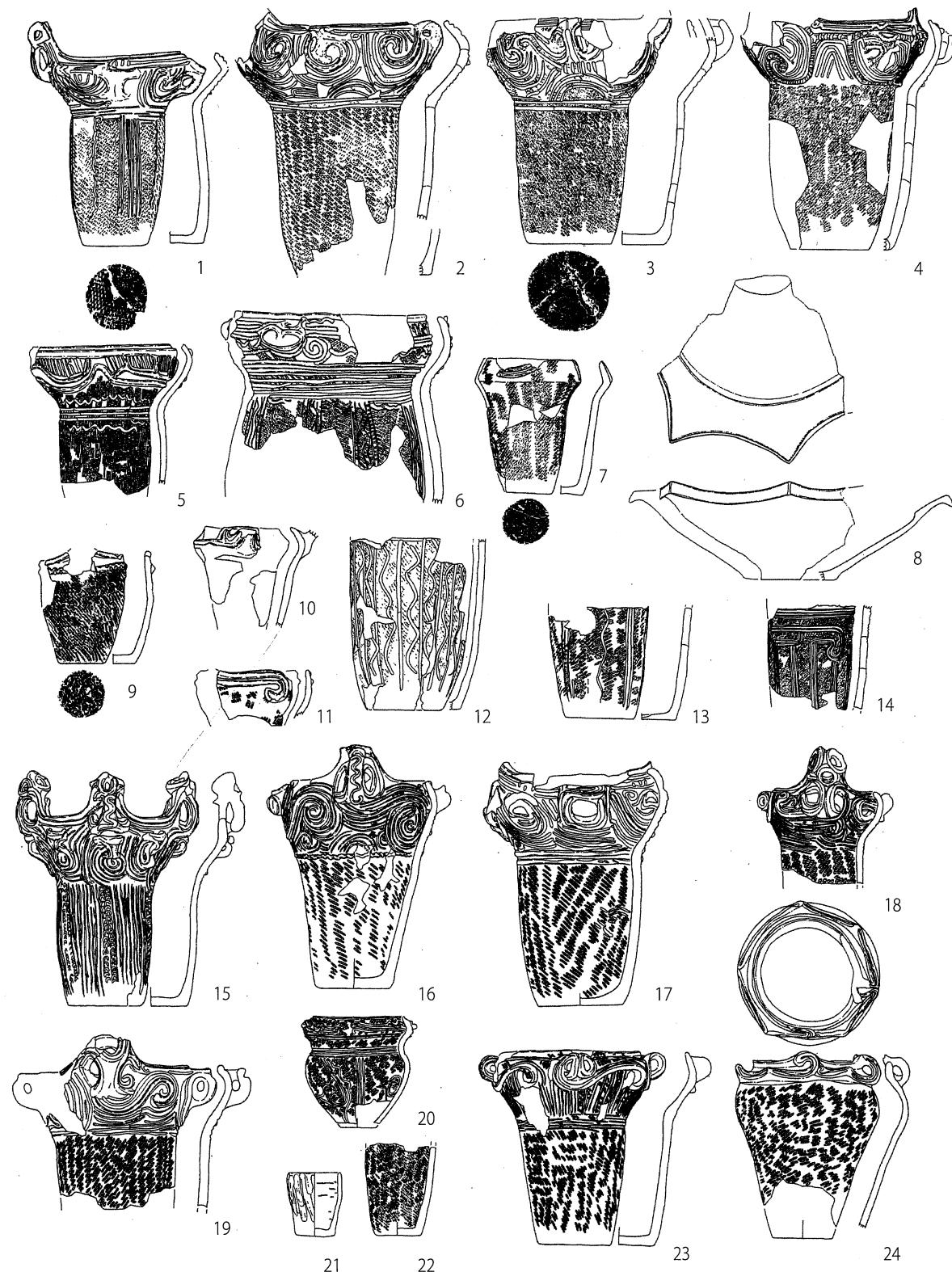
第20図 栃木県北部の阿玉台式期の土器（7）



S=1/10

1～11：小鍋内遺跡 SK93 12～17：小鍋内遺跡 SK162a 18～20：淨法寺遺跡第16号土坑

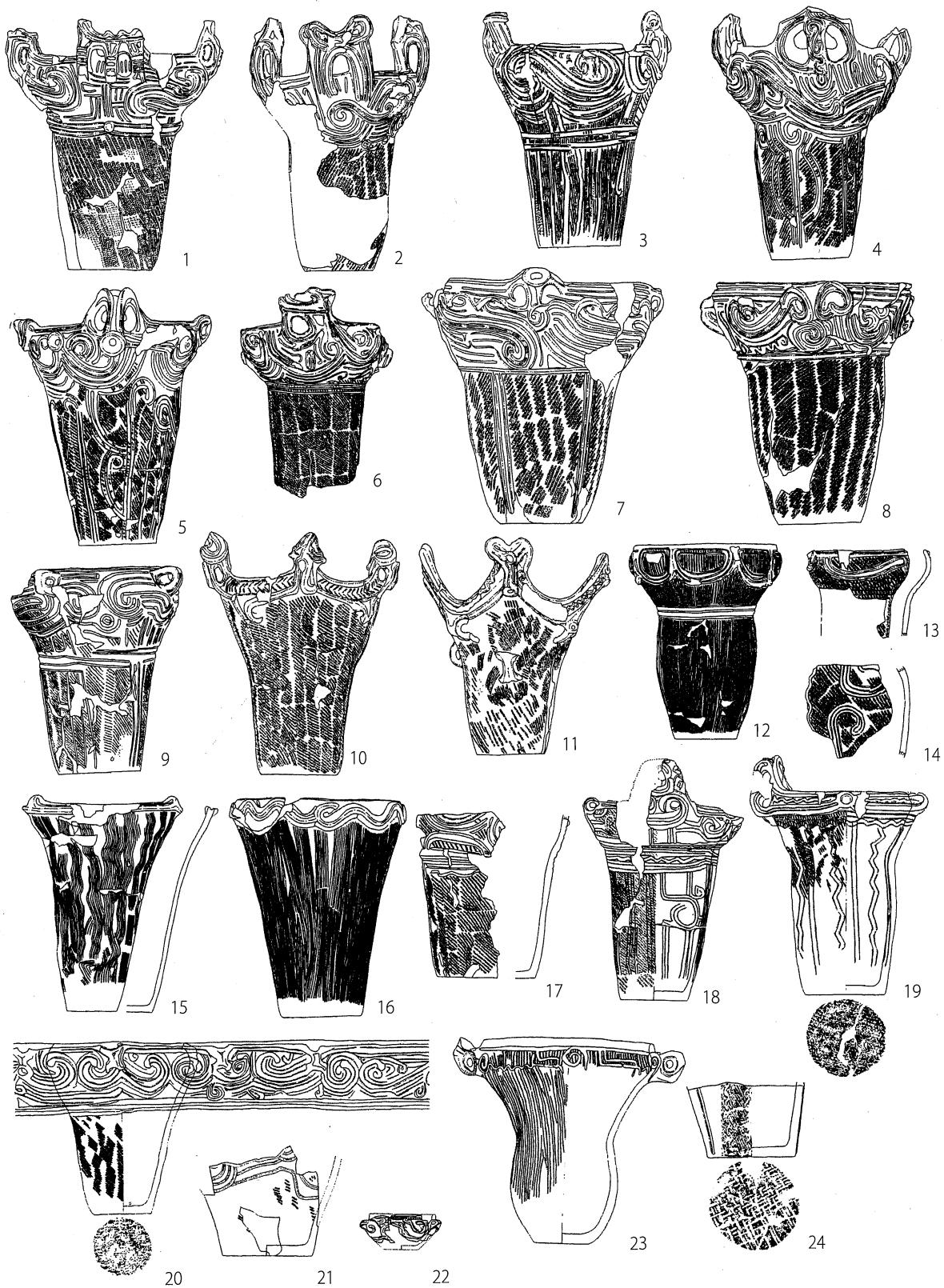
第21図 栃木県北部の阿玉台式期の土器（8）・加曾利E-I式期の土器（1）



S=1/10

1～14：浄法寺遺跡第18号土坑 15～24：三輪仲町遺跡 SK050

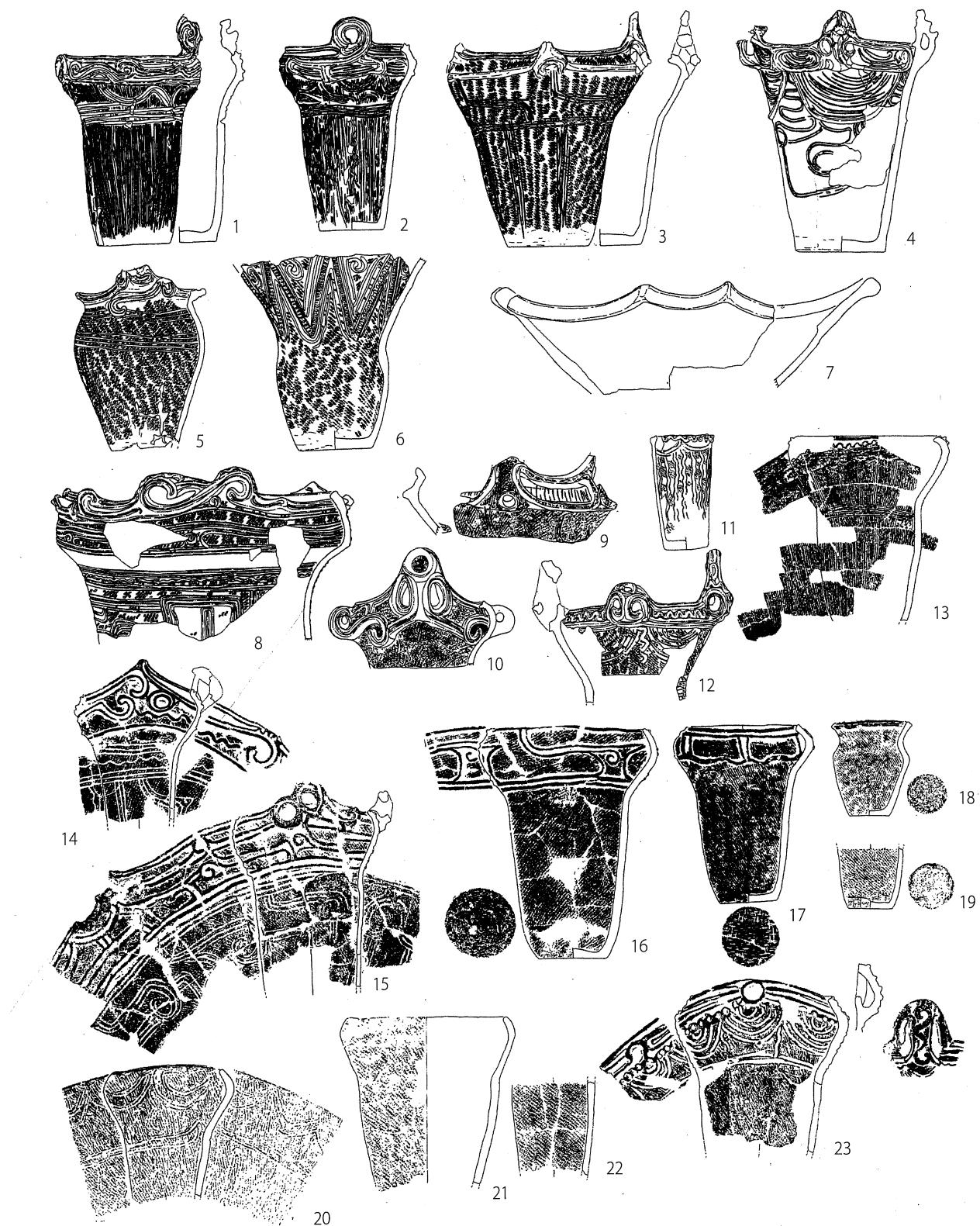
第22図 栃木県北部の加曽利EⅠ式期の土器（2）



S=1/10

1～14：長者ヶ平遺跡 SK4 15～24：浅香内 8H 遺跡 F.6

第23図 栃木県北部の加曽利E-I式期の土器（3）



S=1/10

1～7：槻沢遺跡 SK213 8～13：小鍋内遺跡 SK90 14～23：三輪仲町遺跡 JD3

第24図 栃木県北部の加曽利E-I式期の土器（4）



S=1/10

1～17：三輪仲町遺跡 SK086 18～26：岩舟台遺跡 SK1

第25図 栃木県北部の加曽利E I式期の土器（5）



S=1/10

1～12：岩舟台遺跡 SK16A 13～19：不動院裏遺跡 F.17

第26図 栃木県北部の加曽利EⅠ式期の土器（6）



S=1/10

1～15：楓沢遺跡 SK154 16～19：楓沢遺跡 SK147

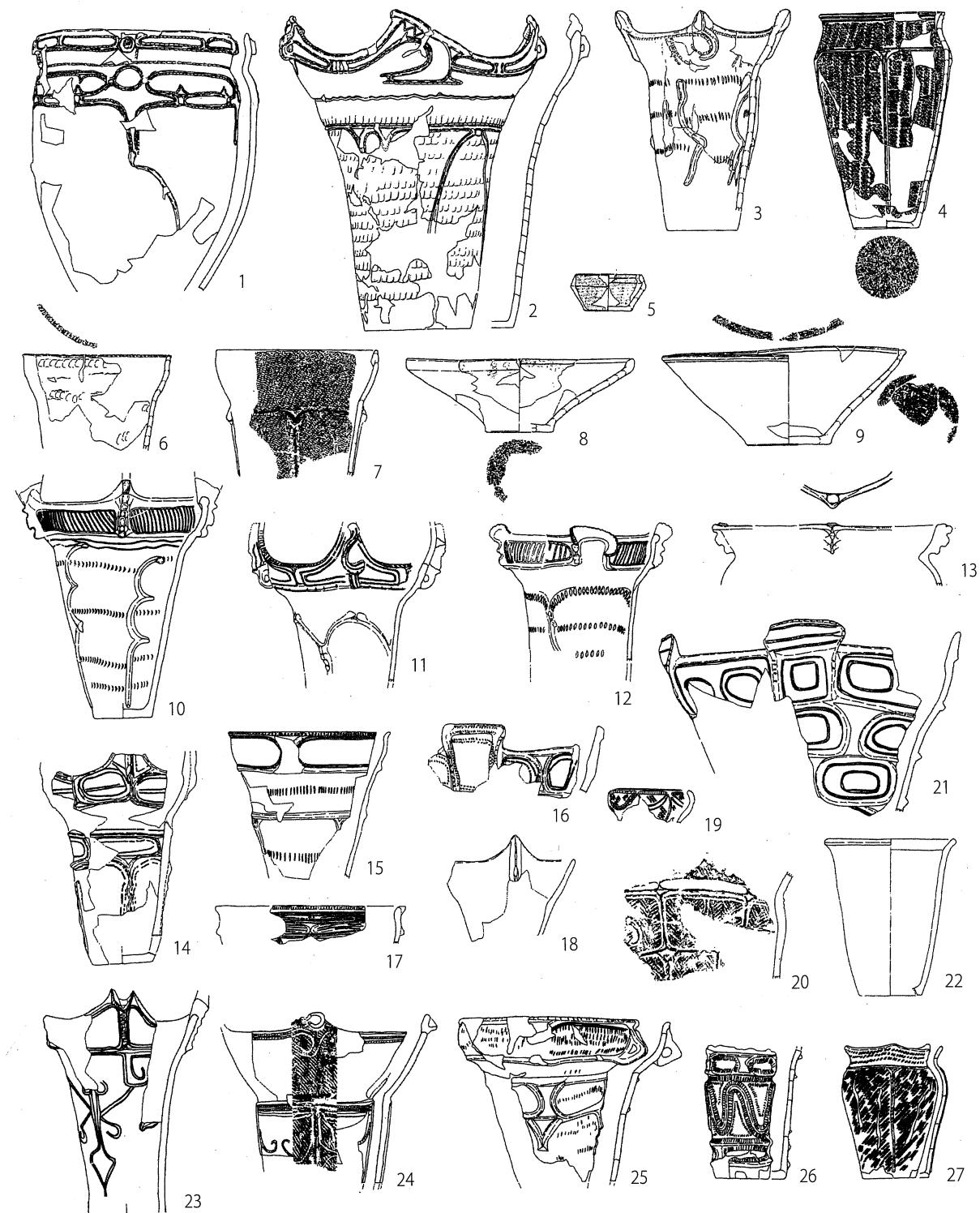
第27図 栃木県北部の加曽利E I式期の土器（7）



S=1/10

1～20：三輪仲町遺跡 SK073

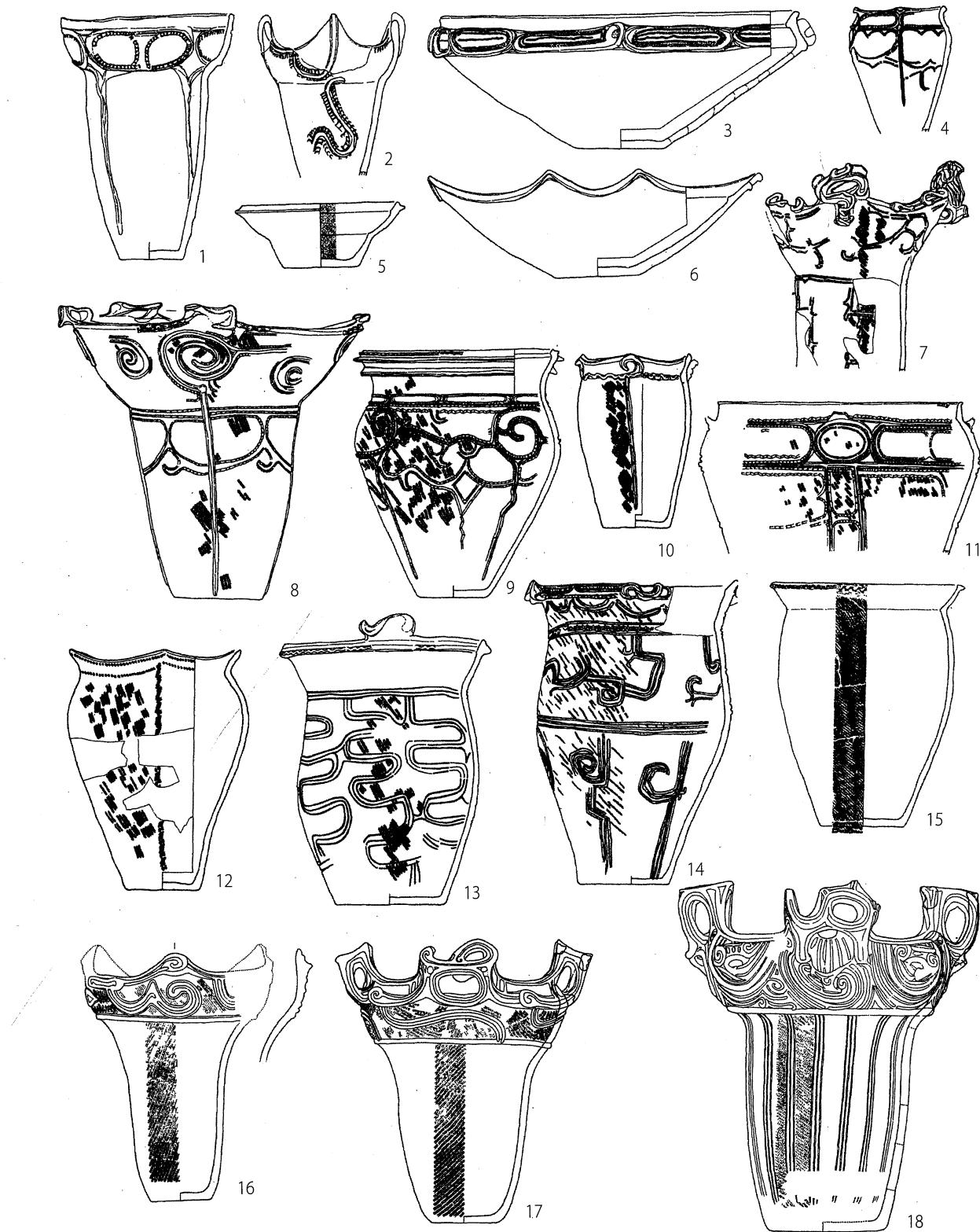
第28図 栃木県北部の加曽利EⅠ式期の土器（8）



- 1・2：大志白遺跡 SI31 3～9：滝ノ上遺跡 SK178 10～13：免の内台遺跡 SI5
 14～20：石神遺跡II区遺物群1 21・22：石神遺跡I区2号住居跡 23・24：上の原遺跡 JT3
 25～27：竹下遺跡 SK110

S=1/10

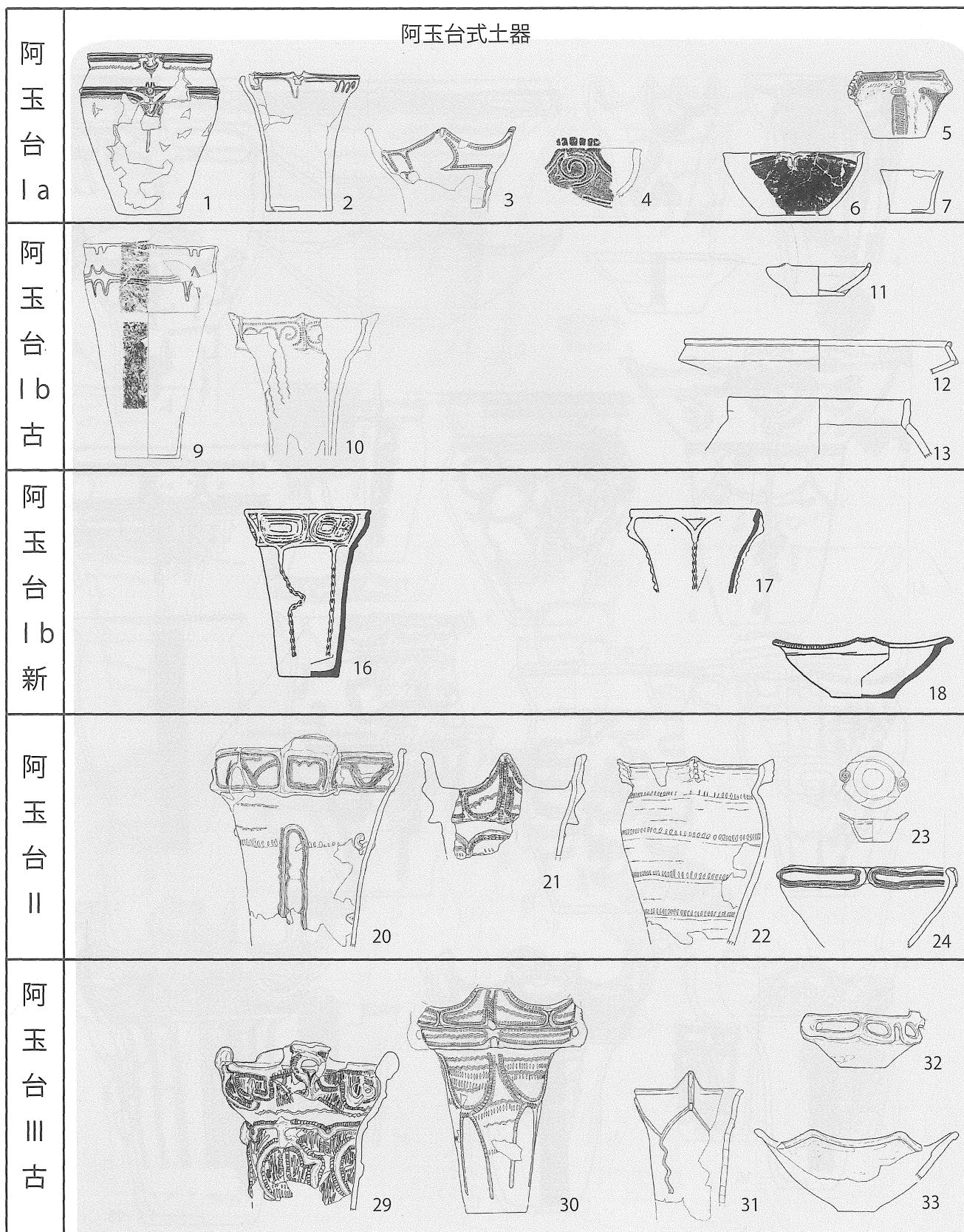
第29図 周辺地域の阿玉台式期の土器



S=1/10

1～15：南堀切遺跡 5号住居址 16～18：竹下遺跡土壤

第30図 周辺地域の阿玉台・加曾利E-I式期の土器



1・5・7：仲内遺跡 SK112

2・6：仲内遺跡 SK709

3：坊山遺跡 4：何耕地遺跡

10：山苗代 A 遺跡第 21 号土坑 9・11～13：石関遺跡第 1 号住居址 16～18：地蔵山遺跡

20・22・23：三輪仲町遺跡 SK136

21・24：三輪仲町遺跡 SK545

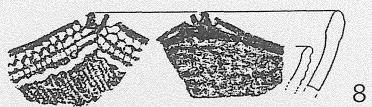
29・32・33：楳沢遺跡 SK393

30・31：品川台遺跡第 5 号袋状土坑

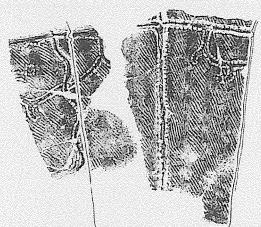
第31図 栃木県北部の縄文時代中期前・中葉の土器編年（1）

大木式系土器

(七郎内 II 群土器)

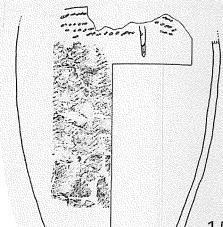


8



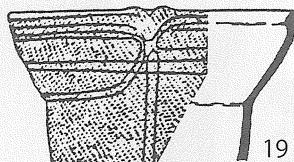
14

(原体圧痕の土器)

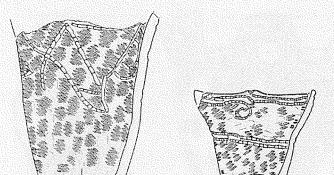


15

(隆帯・沈線の土器)

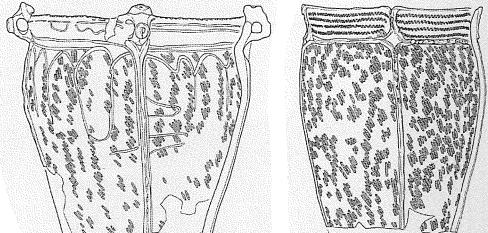


19



25

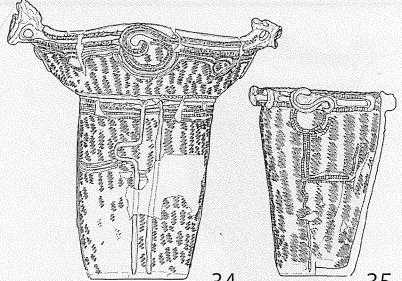
26



27

28

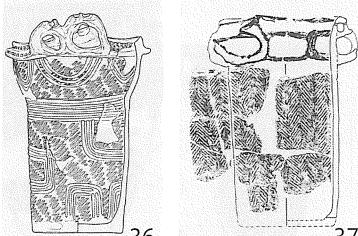
(楓沢型)



34

35

(湯坂型)



36

37

38

8：滝田内遺跡

14：山苗代 A 遺跡第 2 号土坑

15：石関遺跡第 1 号住居址

19：地蔵山遺跡

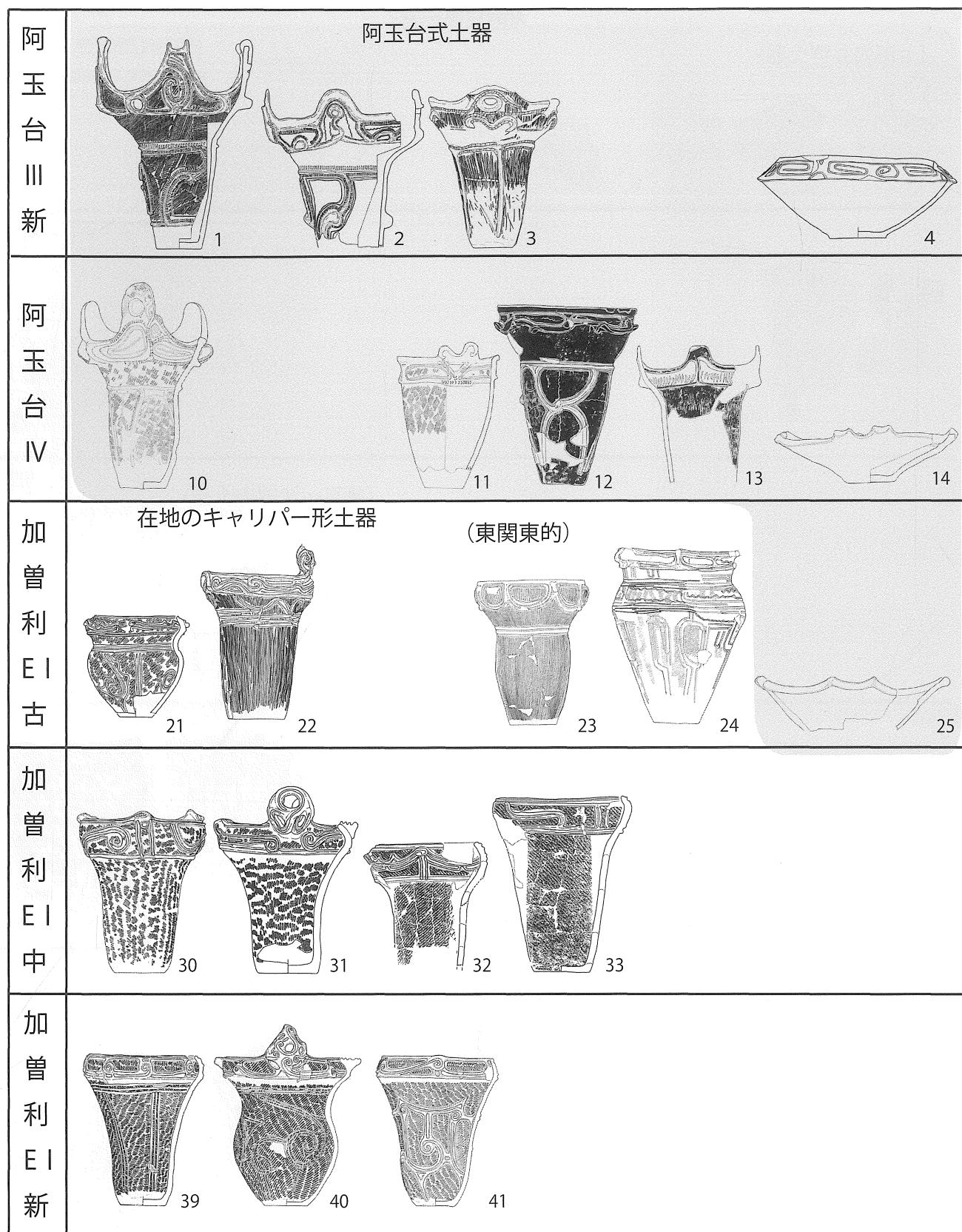
25・26：楓沢遺跡 SK390

27・28：三輪仲町遺跡 SK136

34～36・38：楓沢遺跡 SK393

37：三輪仲町遺跡 JD29

同 左



1・2 : 湯坂遺跡 T1-V 区土坑

3 : 楓沢遺跡 SK74

4 : 楓沢遺跡 P87

10・11 : 楓沢遺跡 14H-P2

12・13 : 小鍋内遺跡 SK93

14 : 三輪仲町遺跡 JD72

21 : 三輪仲町遺跡 SK050

22 : 楓沢 SK213

23 : 長者ヶ平遺跡 SK4

24 : 浄法寺遺跡第 16 号土坑

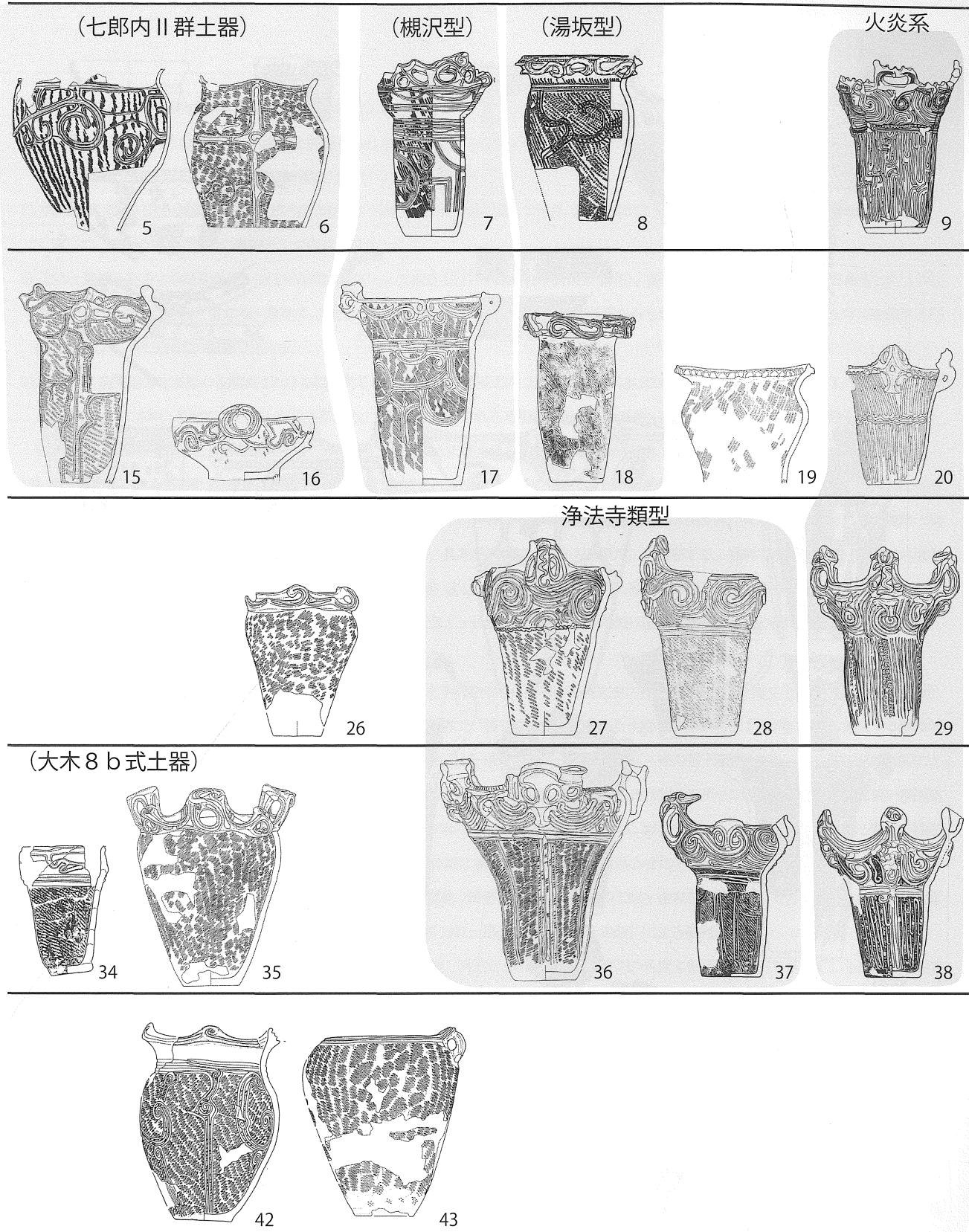
25 : 浄法寺遺跡第 18 号土坑

30・31 : 三輪仲町遺跡 SK086

32・33 : 岩舟台遺跡 SK16A

39~41 : 楓沢遺跡 SK154

第32図 栃木県北部の縄文時代中期前・中葉の土器編年（2）



5・8：湯坂遺跡 T1-V 区土坑

6：楓沢遺跡 SK74

7・9：楓沢遺跡 P87

15~17・19・20：楓沢遺跡 14H-P2

18：小鍋内遺跡 SK125

26・27・29：三輪仲町遺跡 SK050

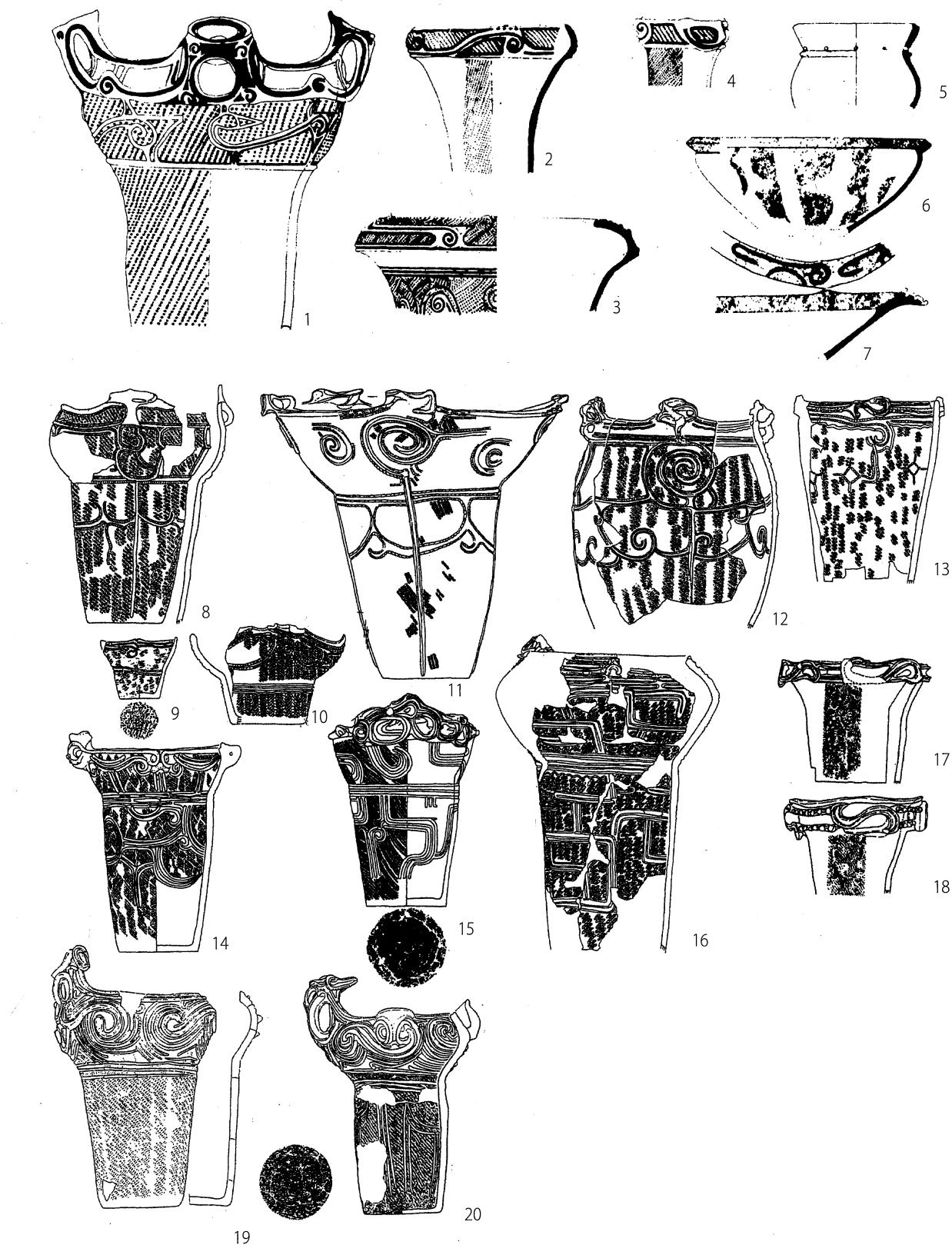
28：淨法寺遺跡第 16 号土坑

34・37・38：岩舟台遺跡 SK16A

35・36：三輪仲町遺跡 SK086

42・43：楓沢遺跡 SK154

同 左



S=1/10

1～7：金井台遺跡 G295F
 8・12：七郎内C遺跡（福島県）
 10：滝ノ上遺跡（茨城県）
 11：南堀切遺跡（福島県）
 13・16：宮後遺跡（茨城県）
 17・18：湯坂遺跡
 19：淨法寺遺跡
 20：岩舟台遺跡

第33図 周辺地域の加曾利E-I式期の土器・各系統の標準的な土器

- 6) 図示しなかったが、茨城県境松遺跡第53号住居跡出土土器は、報告書に掲載された破片資料のうち、押引文が施されたものは、ほぼ全て複列の角押文であり、阿玉台II式の一括遺物と判断される。阿玉台II式土器を純粹に出土する一括遺物は少ないが、阿玉台III式土器を混じえずに、純粹に阿玉台II式土器のみで構成される時期が存在すると考えている。
- 7) 大松遺跡SI090出土土器には、1点だけ縄文施文する阿玉台III式土器（第3図27）が含まれている。他の阿玉台III式土器が本段階の特徴をよく示しているため、一括遺物の事例として取り上げた。
- 8) この土器は下総考古学研究会がかつて中峠式の標準として取り上げ（下総考古学研究会1976）、後に「中峠5次2住型深鉢」と命名した（下総考古学研究会1998）土器と重なる。筆者は、阿玉台式の器形、口縁部断面形、文様表出技法がみられ、阿玉台式の口頸部に横S字文を取り入れたものとして、阿玉台式の範疇で捉える。
- 9) 筆者は、関東地方北東部の各地域における加曽利E I式古段階の土器を取り上げてきた（塚本2006・2016）。筆者の加曽利E I式古段階は、同一系統のものに古相・新相がみられ、年代幅がある。将来的に細分される可能性がある。大半が、山内清男が加曽利E式の「最も古い部分」とした陸平貝塚出土土器よりも古い様相のものである。研究史との整合性も含めて今後の課題としたい。
- 10) 栃木県北部にある那須野が原は、那珂川と支流の篠川に挟まれた紡錘状を呈する約400km²の比較的平坦な土地である。那須岳の南東部に広がり、「那須野が原扇状地」とも呼ばれ、湧水点が限られており、その付近に中期の大規模集落遺跡が点在する。今回取り上げる、楓沢遺跡（那須塩原市）、湯坂遺跡、岩舟台遺跡、地蔵山遺跡、品川台遺跡、長者が平遺跡（以上大田原市）が存在する。那珂川を越えた北・東側の八溝山地にある何耕地遺跡（那須町）、浅香内8H遺跡、不動院裏遺跡（以上大田原市）、篠川の西・南側の喜連川丘陵にある石闘遺跡、坊山遺跡（以上矢板市）、小鍋内遺跡（那須烏山市）を含める。また、阿玉台I a式期の例として、距離的に遠い栃木県北西端の仲内遺跡（日光市湯西川）を対象とする。
- 11) 阿玉台式期に並行する時期に、福島県南半から栃木・茨城県北半部を中心に分布する縄文地に有節沈線で文様を描く土器を「七郎内II群土器」と呼称する（第33図8～13）。福島県石川郡石川町七郎内C遺跡で「第II群土器」とされた土器を中心とする（松本1982）。直立する胴部から、強く屈折して頸部が外反する器形もしくは強く内彎するキャリバー形の器形を呈し、胴部に4条の垂下降帯を配し、この間に有節沈線による弧状のモチーフ等を配す。頸部の広い施文域には、有節沈線を沿わせた隆帯等による弧状、渦巻状のモチーフを配す。口縁部には狭い梢円形区画文を配すか、押捺を加えた隆帯を巡らし、突起を付けるものが多い。平縁が主流であるが、波状口縁のものもある。体部が張る壺形の器形の土器もある。この種の器形の土器は、頸部の文様を省略し、体部に渦巻文と垂下降帯を合体させたモチーフを配すものが目立つ。縄文は圧倒的に2段LRの綱位施文による単節斜縄文が多い。なお、海老澤稔（海老澤1984）や筆者の五領ヶ台末から系統を引くとの考え方に対し、江原英、石坂茂、建石徹、井出浩正、合田恵美子（石坂1991、江原1991、建石・井出・合田2009）による批判がある。
- 12) 単列の角押文を施す大形の深鉢と無文の浅鉢が複数伴う。1例、阿玉台II式と思われる複列の角押文を施す土器があり必ずしも良好な一括遺物とは言えない。大形深鉢は、器面整形や角押文が古相を呈し、阿玉台I b式古段階と思われる。以前同遺構出土の破片資料を実見したが、阿玉台I a式土器及び阿玉台I b式古段階の土器が主体を占めていたように記憶する。
- 13) 楓沢14H-P2、楓沢遺跡P87からまとまって出土した大式系土器を「楓沢型」と命名した（塚本2017）。直立する胴部から強く屈折して頸部が外反し、頸部に広い施文域を配し、口縁部には押捺やキザミを加えた隆帯を巡らし、それと連繋して中空の突起を配す。頸部と体部の施文域には、クランク文、弧線文や渦巻文などのモチーフを、主に2～3条の沈線で描く（第33図14～16）。隆帯で表現するものもある。七郎内II群土器が、体部に垂下降帯を配し、その間にモチーフが閉じ込められていたのに対し、楓沢型は垂下降帯を取り除き、文様が横方向に展開する。主に栃木県北部から福島県域にかけて分布する。栃木県北部では、阿玉台III式古段階に出現し、阿玉台III・IV式並行期に盛行し、加曽利E I式期にはほとんど存在しなくなるが、福島県域では加曽利E I式期以降にも存続するようである。なお、茨城県北部にも楓沢型は分布するが、むしろ同じ文様構成で頸部のモチーフを欠く「坪井上型」（第20図24）が主流を占めるようである。
- 14) 湯坂遺跡T1-V区土壙出土土器のなかに特徴的にみられた土器を「湯坂型」と命名した（塚本2007）。器形は底部から口縁部まで直線的に立ち上がることが多いが、頸部で緩く括れ、体部が僅かに張る器形もある。口縁部に2条の背の高い隆帯が巡らし、それを橋渡しするように横位のS字状の突起を配す。体部は地文のみとする例が多い（第33図17・18）が、文様を描くものもある（第17図13）。主に栃木県北部に分布する。

阿玉台III式古段階に出現し、阿玉台III・IV式並行期に盛行するようである。

- 15) この段階は多くの研究者が唱える「大木8a式古段階」に相当する。筆者は、関東地方北東部から福島県南半部の土器を呼称する際、極力「大木7b式」「大木8a式」を用いないこととしている。いくつか理由はある。山内清男が制定した「大木7b式」は阿玉台式に並行し、「大木8a式」は加曽利E式の前半に並行する。阿玉台式の後半に並行する湯坂遺跡T1-V区土壙や楓沢遺跡14H-P2から出土した土器を「大木8a式」と呼ぶのは学史的に不適切と考えた（塚本1997）。なお、山内が大木7b式や8a式を制定した当時、阿玉台式土器は、八木英三郎・下村三四吉（八木・下村1894）による阿玉台貝塚の報告や大山史前学研究所が調査した宮平貝塚、竹来根田貝塚の報告（大山柏ほか、1937・1940）による土器を標準としており、現在の阿玉台Ib～II式を指していたと思われる。なお、近年公表された山内清男の大木7b式と大木8a式の標準資料（早瀬・菅野・須藤2006）を見ると、大木7b式土器は阿玉台Ia～Ib式古段階並行、大木8a式は加曽利E I式の古い部分に時期の違う土器が混在したものと思われる。西川博孝は、筆者の浄法寺遺跡報文を紹介したうえで、阿玉台III・IV式に並行する大木式系土器を「大木8a直前型式」と呼ぶことを提唱している（西川2017）。そもそも、関東地方北東部から福島県南半部の土器、例えば七郎内II群土器、楓沢型、湯坂型や浄法寺類型の土器は、大木7b式や大木8a式が制定された仙台湾周辺には存在しない土器である。「中期大木式土器様式」に含むことはできても、「大木7b式」や「大木8a式」の名を冠するには違和感を覚える。一方、学史的な問題を抜きにして、大木7式と大木8式の区別を考える際、丹羽茂が重要な指摘を行っている（丹羽1989）。大木7式を「区画内に隆・沈線による文様を充填する土器群（区画内文様充填土器群）」とし、大木8式を「地文の上に隆・沈線による文様を描く土器群（線描文様土器群）」とした。この基準は、栃木県北部にも通用する。七郎内II群土器が大木7b式、楓沢型が大木8a式となる。しかし、阿玉台III・IV式期では、大木7b式と大木8a式が共伴することとなる。土器個体を指す名称としては使えるが、細別型式の名称とはなりにくい。
- 16) この段階は、多くの研究者が唱える「大木8a式中段階」に相当する。一括遺物が乏しかった頃は、湯坂遺跡T1-V区土壙出土土器が「大木8a式古段階」、楓沢遺跡14H-P2出土土器が「大木8a式中段階」の標準とされ、両者的大木式系土器が異なっており（前者が七郎内II群土器と湯坂型、後者が楓沢型）、妥当な細別と考えられた。しかし資料が増加した現在では、各土器群は両方の段階に亘って存続したことが明らかとなった。現時点では、阿玉台式の伴出なくしては、両段階の区別は困難といえよう。
- 17) 多くの研究者が「大木8a式新段階」と唱える。この段階は山内清男が制定した「大木8a式」にほぼ並行すると思われる。
- 18) 海老原郁雄が「浄法寺タイプ」と命名したものにほぼ相当する（海老原1979）。器形は、口頸部が強く内彎するキャリパー形深鉢が主流である。ほとんどの個体に4単位の中空突起が付く。突起は4個同大のもの、1個のみ大形のもの、1個の大形突起と対の位置が中形で、他2個が小形のもの等の変異がある。口頸部は幅広い一帯の施文域に、基隆帶で、渦巻文、対向渦巻文、横S字文等を配し、これとほぼ同方向に半肉彫り的な沈線を施して、器面を充填する。僅かに残った空白部には小渦巻文や三叉文を配すものもある。体部は全面縄文のみとするか、縄文地に縦方向の懸垂文を配すものがあり、曲線的なモチーフを施すものは少ない。以上が標準的な土器（第33図19・20）である。中期中葉に栃木県北部を中心に、福島県会津地方・中通り地方南半部に分布する。近年発見例が報告されているが、茨城県ではあまり出土しない。栃木県北部や福島県会津地方・中通り地方南半部には、新潟県中越地方の火炎土器に類似する「火炎系土器」が分布するが、その文様を取り入れて在地化した土器といえる。近年、在地の縄文施文と火炎系土器の要素を取り入れた、別種の土器も発見されている（第23図10・11）。これらを含めて、「浄法寺類型」は再度捉え直す必要がある。
- 19) 小鍋内遺跡から、在地の文様である頸部括れ部の多条の沈線を施す下締台地型の加曽利E I式土器が出土した。これは在地で作られたものと判断される。
- 20) 筆者はこれまで、一貫して箱状突起を加曽利E I式新段階の特徴として捉えてきた（塚本1997・2018等）。竹下遺跡土壙（第30図16～18）と何耕地遺跡土壙の一括遺物を加曽利E式新段階と判断したからである。今回この一括遺物を見直したところ、これらは加曽利E I式中段階とすべきと考え、箱状突起が加曽利E I式中段階から出現したと考え方を改める。なお、海老原郁雄は、箱状突起は筆者の加曽利E I式中段階に位置づけており、加曽利E I式新段階はほぼ加曽利E式系土器のみで占めると捉えていた（海老原1980b）。
- 21) 栃木県中央部の例であるが、本段階に比定される芳賀町金井台遺跡G.295F出土土器（第33図1～7）に、大形の箱状突起が付く例がある（第33図1）。

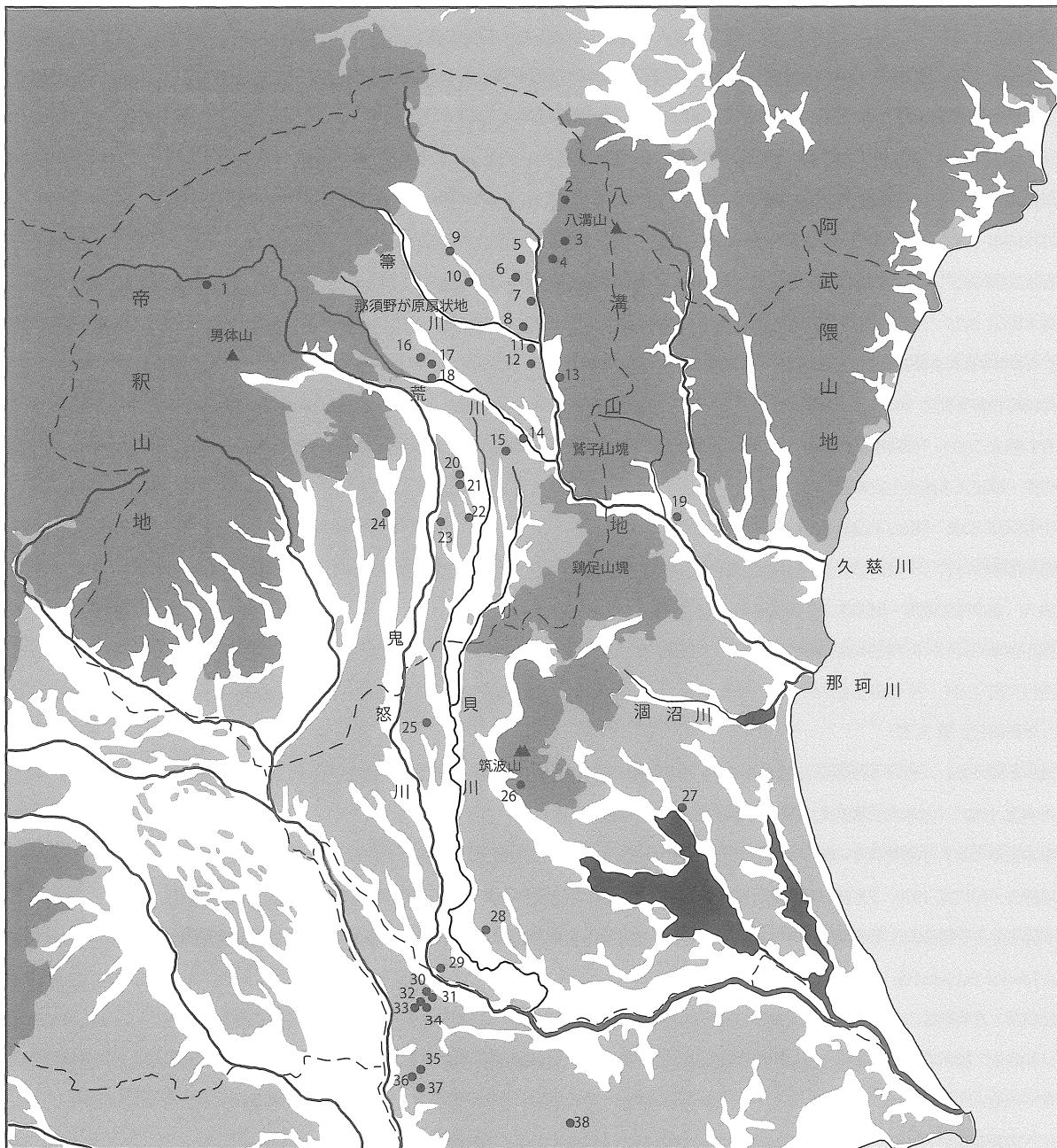
22)前述したとおり、竹下遺跡土壙出土土器（第30図16～18）を加曇利E I式中段階としたことにより、現段階で浄法寺類型が加曇利E I式新段階の土器と共に伴して事例を指摘することができなくなった。この段階の出土土器点数が多い槻沢遺跡SK154・173に浄法寺類型が1点も含まれていないことから考えると、この段階には浄法寺類型が消滅していた可能性がある。編年表（第32図）には、この段階の浄法寺類型の掲示を控えた。この点も從来（塚本1997・2018等）と考え方を変えた点である。この段階まで浄法寺類型が残るかどうか、今後の課題としたい。

【参考文献】

- 青木義脩 1964 「栃木県大田原市平林西遺跡の中期縄文土器」『考古学手帖』21
- 青木健二 1981 『芳賀高根沢工業団地地内 上の原遺跡発掘調査報告書』栃木県企業局
- 赤石澤亮・神野安伸 1989 『宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第27集 竹下遺跡II—竹下自治公民館建設に伴う発掘調査報告一』宇都宮市教育委員会
- 浅間陽 2014 『茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第19集 滝ノ上遺跡I』常陸大宮市教育委員会
- 安孫子昭二 1978 「加曇利E I式の範型と動坂遺跡の型式」『文京区動坂遺跡』動坂貝塚調査会
- 新井聰・黒澤秀雄・吉川明宏 1995 『茨城県教育財団調査報告第102集 (仮称) 北条住宅団地建設工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書 中台遺跡』財団法人 茨城県教育財団
- 石坂茂 1991 「1990年の縄文時代学会動向 土器型式編年論 中期」『縄文時代』第2号 縄文時代文化研究会
- 上野修一 1984 『第7回企画展 はなひらく縄文文化』栃木県立博物館
- 宇都宮大学考古学研究会 1977 『宇都宮大学保管の縄文式土器』『峰考古—宇都宮大学考古学研究会会誌一』第1号
- 江原英 2006 「36. 旧石器・縄文時代」『考古回覧—特集 1990年栃木県の動向一』第13号
- 海老澤稔 1984 「茨城県内における縄文中期前半の土器様相 (2) 一誠式土器について」『婆良岐考古』6 婆良岐考古同人会
- 海老澤稔ほか 2016 『茨城県教育財団調査報告第407集 東田中遺跡 中津川遺跡2 一般国道6号千代田石岡バイパス(かすみがうら市市川～石岡市東大橋)事業地内埋文化財調査報告書8』公益財団法人茨城県教育財団
- 海老原郁雄 1979 『湯坂遺跡』大田原市教育委員会
- 海老原郁雄ほか 1979 『栃木県埋蔵文化財調査報告第25集 石関(彦左エ門山)遺跡 東北新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書 その3』栃木県教育委員会
- 海老原郁雄 1980a 『栃木県埋蔵文化財調査報告第34集 槻沢(つきのきざわ)遺跡—栃木県那須郡西那須野町一』栃木県教育委員会
- 海老原郁雄 1980b 「加曇利E I式の変遷について(栃木県)」『奈和』第18号 奈和同人会
- 海老原郁雄 1981a 「第二章 縄文時代 三 縄文土器 4 中期の土器」『栃木県史』通史編1・原始古代1 栃木県
- 海老原郁雄 1981b 「北関東の大木式土器」『縄文文化の研究4』雄山閣
- 海老原郁雄 2002 『長者ヶ平遺跡発掘調査報告書 エヌ・ティ・ティ携帯電話基地局の建設に伴う記録保存』大田原市教育委員会
- 大山柏・大給尹・池上啓介 1937 『茨城県稻敷郡舟島村竹来根田貝塚群調査報告』『史前学雑誌』9巻4号 史前学会
- 大山柏・大給尹 1940 『茨城県稻敷郡宮平貝塚群調査報告』『史前学雑誌』12巻4・5・6号 史前学会
- 岡崎文喜ほか 1971 『高根木戸一縄文時代中期集落址調査報告書一』船橋市教育委員会・高根木戸遺跡調査団
- 小川町教育委員会 1997 『小川町埋蔵文化財調査報告第11冊 栃木県小川町三輪仲町遺跡』
- 神奈川考古同人会 1980 『シンポジウム 縄文時代・中期後半の諸問題—とくに加曇利E式と曾利式土器との関係について—』
- 片根義幸 1996 『栃木県埋蔵文化財調査報告第296集 仲内遺跡 国土交通省による湯西川ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査』栃木県教育委員会
- 上三川勝ほか 2000 『河内町埋蔵文化財調査報告書第3集 大志白遺跡群発掘調査報告書 アンビックス緑が丘ニュータウン造成に伴う発掘調査(縄文時代編)』栃木県河内町教育委員会

- 上守秀明ほか 1990 『千葉県文化財センター調査報告第174集 松戸市 野見塚遺跡・前原I遺跡・根之神台遺跡・中内遺跡・中峠遺跡・新橋台I遺跡・串崎新田東里所在野馬土手一北総開発鉄道埋蔵文化財調査報告書III-』財団法人千葉県文化財センター
- 川原由典・初山孝行 1982 『栃木県埋蔵文化財調査報告第49集 石神遺跡 繩文時代中期集落跡発掘記録』栃木県教育委員会
- 久野俊度 1987 『茨城県教育財団調査報告第41集 主要地方道取手筑波線改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書 境松遺跡』財団法人 茨城県教育財団
- 後藤信祐ほか 1992 『栃木県芳賀町文化財報告第15集 栃木県芳賀町 免の内台遺跡一芳賀西部台地土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査一』栃木県芳賀町教育委員会
- 後藤信祐 1996 『栃木県埋蔵文化財調査報告第171集 槇沢遺跡III 県営圃場整備事業「井口・槇沢地区」に伴う埋蔵文化財発掘調査』栃木県教育委員会
- 財団法人印旛郡市文化財センター 2007 『財団法人印旛郡市文化財センター調査報告書第241集 千葉県四街道市 南作遺跡 四街道市成台中土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(V)』
- 佐藤達夫 1974 「繩紋式土器 二 土器型式の実態—五領ヶ台式と勝坂式の間—」『日本考古学の現状と課題』吉川弘文館
- 下総考古学研究会 1971 「〈特集〉中峠式土器の研究」『下総考古学』6
- 下総考古学研究会 1998 「〈特集〉中峠式土器の再検討」『下総考古学』15
- 進藤敏雄 1996 『栃木県埋蔵文化財調査報告第177集 小丸山古墳群 山苗代A・C遺跡 矢板市矢板南地区工業用地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査』栃木県教育委員会
- 鈴木美治ほか 1985 『茨城県教育財団調査報告第28集 水海道都市計画事業・小網土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書3 大谷津A遺跡』財団法人 茨城県教育財団
- 高山茂明 1997 「阿玉台式土器における文様要素の変異」『笠間市西田遺跡の研究』笠間市西田遺跡調査団
- 建石徹・井出浩正・合田恵美子 2009 「所謂『七郎内II群土器』研究における現状と課題—研究史の整理と分類思案の提示-」『下総考古学』21 下総考古学研究会
- 谷井彪 1987 「加曽利E式土器における口縁部文様の形態と系譜」『柳田敏司先生還暦記念論文集 埼玉の考古学』柳田敏司先生還暦記念論文集刊行委員会
- 田代寛ほか 1975 『黒羽高校社会部研究報告第4集 浅香内8H遺跡—栃木県那須郡黒羽町浅香内8H遺跡発掘調査報告一』栃木県立黒羽高等学校社会部
- 田中豪ほか 1982 『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書I—館林、水砂、花前II-1-』財団法人 千葉県文化財センター
- 田中豪ほか 1984 『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書II—花前I、中山新田II、中山新田III-』財団法人 千葉県文化財センター
- 塙原孝一 1994 『栃木県埋蔵文化財調査報告第143集 三輪仲町遺跡 一般国道293号の道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査』栃木県教育委員会
- 塙原孝一 2008 『栃木県埋蔵文化財調査報告第313集 小鍋前遺跡 経営体育成基盤整備事業荒川南部地区に係わる埋蔵文化財発掘調査』栃木県教育委員会
- 塙本師也 1990 「北関東・南東北における中期前半の土器様相—縄文地に有節沈線を施す土器群についてー」『古代』第89号 早稲田大学考古学会
- 塙本師也 1992 『栃木県埋蔵文化財調査報告第128集 品川台遺跡 品川代行業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査』栃木県教育委員会
- 塙本師也 1997 「第VI章 考察 第2節 中期縄文土器について」『栃木県埋蔵文化財調査報告第196集 淨法寺遺跡 県営圃場整備事業小川西部地区に係わる埋蔵文化財発掘調査』栃木県教育委員会
- 塙本師也 2000 「茨城県における縄文時代中期中葉の土器について一つくば市中台遺跡谷和原村前田村遺跡の調査成果からー」『常総台地』15 常総台地研究会

- 塙本師也 2004 「栃木県南部域の土器と焼町土器 分布圏外の焼町土器」『国立歴史民俗博物館研究報告』第120集 国立歴史民俗博物館
- 塙本師也 2008 「阿玉台式土器」『総覧 縄文土器』『総覧 縄文土器』刊行委員会
- 塙本師也 2010 「鬼怒川・小貝川流域の加曇利E I式期の土器—旧関城町西原遺跡第61号住居跡出土土器の位置付けー」『茨城県考古学協会誌』第22号 茨城県考古学協会
- 塙本師也 2013a 「第8回 阿玉台式土器の細分(2)」『アルカ通信』NO.118 考古学研究所(株)アルカ
- 塙本師也 2013b 「第9回 阿玉台式土器の細分(3)」『アルカ通信』NO.120 考古学研究所(株)アルカ
- 塙本師也 2013c 「第10回 阿玉台式土器の細分(4)」『アルカ通信』NO.122 考古学研究所(株)アルカ
- 塙本師也 2017 「茨城県常陸大宮市滝ノ上遺跡群の中期中葉の土器様相」『茨城県考古学協会誌』第29号 茨城県考古学協会
- 塙本師也 2018 「関東地方北東部から見た会津・越後の大木式系土器」『<津南シンポジウムXIV> 馬高式土器の成立・展開・終焉—予稿集一』津南町教育委員会
- 津南町教育委員会 2018 『<津南シンポジウムXIV> 馬高式土器の成立・展開・終焉—予稿集一』
- 寺内隆夫 2009 「戦時中に行われた後貝塚の発掘調査—日本大学文理学部所蔵千葉県船橋市後貝塚出土資料について（中間報告）一」『竹石健二先生・澤田大多郎先生古希記念論文集』
- 中村信博 2006 『桧の木遺跡II』桧の木遺跡調査団
- 西川博孝 2011 『千葉県教育振興財団第666集 柏北部東地区 埋蔵文化財発掘調査報告書4 一柏市大松遺跡—縄文時代以降編1』独立行政法人 都市再生機構・財団法人 千葉県教育振興財団
- 西川博孝 2017 「3 柏市小山台遺跡に見る阿玉台III式期の東北的土器様相」『研究連絡誌』第78号 公益財団法人 千葉県教育振興財団
- 西村正衛 1969 「千葉県小見川町木之内明神貝塚（第一次調査）—東部関東における縄文中・後期文化の研究— その一」『早稲田大学教育学部 学術研究』第18号
- 西村正衛 1984 「19. 阿玉台式土器の編年」『石器時代における利根川下流域の研究—貝塚を中心として—』早稲田大学出版部
- 丹羽茂 1989 「大木式土器様式」『縄文土器大観』1 小学館
- 根本信孝 1984 『南堀切IV—高山・南堀切地区発掘調査報告VI—』白河市教育委員会
- 塙静夫・田代寛 1970 『芳賀町の文化財第4集 金井台 栃木県芳賀町金井台遺跡発掘調査報告』芳賀町教育委員会
- 早瀬亮介・菅野智則・須藤峯 2006 「東北大学文学研究科考古学陳列館所蔵大木田貝塚出土基準資料—山内清男編年基準資料—」『Bulletin of the Tohoku University Museum』No. 5
- 細田勝・宮崎朝雄ほか 1982 「縄文中期土器群の再編」『研究紀要 1982』 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 日沖剛史・福田貴之・浅間陽 2014 「北関東における中期浅鉢形土器の様相」『第27回 縄文セミナー 縄文中期浅鉢形土器の諸様相』縄文セミナーの会
- 松戸市教育委員会 1978 『松戸市文化財調査報告第8集 子和清水貝塚 遺物図版編1』
- 松戸市教育委員会 1985 『松戸市文化財調査報告第11集 子和清水貝塚 遺物図版編2』
- 松本茂 1982 『福島県文化財調査報告第108集 国営総合農地開発事業 母畠地区遺跡発掘調査報告X 七郎内C遺跡 七郎内D遺跡』福島県教育委員会
- 八木樊三郎・下村三四吉 1894 「下總國香取郡阿玉臺貝塚探求報告」『東京人類学会雑誌』9卷97号 東京人類学会
- 山内清男, 1940, 『日本先史土器図譜・第九輯—加曇利E式』



- | | | | | | |
|-------------|------------|----------------|---------------|---------------|-------------|
| 1 : 仲内遺跡 | 2 : 何耕地遺跡 | 3 : 不動院裏遺跡 | 4 : 浅香内 8H 遺跡 | 5 : 長者ヶ平遺跡 | 6 : 湯坂遺跡 |
| 7 : 岩舟台遺跡 | 8 : 品川台遺跡 | 9 : 楠沢遺跡 | 10 : 地蔵山遺跡 | 11 : 净法寺遺跡 | 12 : 三輪仲町遺跡 |
| 13 : 滝田内遺跡 | 14 : 小鍋内遺跡 | 15 : 曲畠遺跡 | 16 : 山苗代 A 遺跡 | 17 : 石関遺跡 | 18 : 坊山遺跡 |
| 19 : 滝ノ上遺跡 | 20 : 上の原遺跡 | 21 : 金井台遺跡 | 22 : 免の内台遺跡 | 23 : 竹下遺跡 | 24 : 大志白遺跡 |
| 25 : 西原遺跡 | 26 : 中台遺跡 | 27 : 東田中遺跡 | 28 : 前田村遺跡 | 29 : 大谷津 A 遺跡 | 30 : 大松遺跡 |
| 31 : 小山台遺跡 | 32 : 水砂遺跡 | 33 : 中山新田 I 遺跡 | 34 : 聖人塚遺跡 | 35 : 子和清水貝塚 | 36 : 寒風台遺跡 |
| 37 : 根之神台遺跡 | 38 : 南作遺跡 | | | | |

第34図 遺跡位置図

栃木県域の経塚について(覚書)

いけ だ とし ひろ
池 田 敏 宏

- 1. はじめに
- 2. 経塚研究抄史－栃木県域を中心－
- 3. 栃木県域の経塚ならびに出土遺物
- 4. まとめ－栃木県域における経塚の特徴－

1・2章では、執筆の動機、ならびに栃木県域を中心とした経塚研究抄史を記した。3章では、古代～近世に至る埋經(書写經典埋納)の歴史を概観したうえで、本県域の経塚(埋經)、ならびに出土遺物の傾向を記した。そして4章では、栃木県域における経塚の特徴を要約すると共に、今後の課題と展望を記した。

1.はじめに

筆者は、大学生時代、仏教学徒として仏教(教理)学・仏教史等を学んでいた。そうしたこともあるて、一時期、弥勒信仰と経塚(埋經)の関係－ひいては弥勒下生信仰、ならびに弘法大師入定留身信仰・高野山奥之院経塚の形成⁽¹⁾に興味を持ち、経塚等について調べたことがあった(卒業論文テーマとすべく)。しかし、悲しい哉。このテーマは、学部生が太刀打ちできるしろものではなかった。そして時は流れ…

2016年2月、不思議と御縁が重なることで、発掘調査中の会橋久保経塚(栃木県高根沢町)に見学、コメントする機会を得た。さらに、幸いにして、本経塚の整理作業・報告書作成に関わることが出来た。また、発掘調査報告書中に「第4章 総括 第3節 『法華經』に関する基礎知識－会橋久保経塚を解釈する一助として－」を著す機会を得た(ただし、内容が煩雑になることを危惧し、経塚については、埋經信仰と『法華經』の関係性整理で筆を止めた)。

本稿は、学生時代に太刀打ちできなかった事象(埋經信仰)の一端、ならびに、前稿(池田 2019)では詳論できなかった事々(本県域の経塚・出土遺物の傾向)を書き記してみたい。まずは、栃木県域を中心とした経塚(埋經遺跡)ならびに出土遺物の研究抄史を記す。

2.経塚研究抄史－栃木県域を中心－

2－ [1] 江戸期～戦前

[全般的傾向]

経塚の発見は偶然であることが多く、その奇異性から関心を集めやすい。それゆえ、経塚ならびに出土遺物に関する記録は江戸期から存在する〔例えば、松平定信[1759～1829]が編纂した『集古十種』(寛政12[1800]刊行)に治承2年[1178]銘經筒が記録されたり、各地『名所図会』等にも経塚出土遺物が紹介されている〕⁽²⁾。その傾向は明治～昭和初期に至るまで続くものの、考古学的視点による経塚研究もなされだす(和田 1901～1912など)。なかでも、石田茂作氏の論著は、考古学講座の一書として経塚ならびに埋納施設・出土遺物を集成・論述しており経塚研究の基本文献として名高い(石田 1929)。加えて、蔵田 蔵氏の論考(蔵田 1936)、矢島恭介氏の論考(矢島 1937)、田沢金吾氏の著書(田沢 1933 文献)、帝室博物館編 1927・1937 文献等も研究史上重要な位置をしめている。

〔本県域の動向〕

本県域における経塚研究は植田猛縉氏[1757～1843]が著した『日光山志』から始まる⁽³⁾。植田氏は刊本版『日光山史』巻之一にて日光滝尾神社で出土した経筒2点について絵図付きの詳細記録を残している。

次いで1901年、考古學會は彙報として「那須郡烏山町」の泉渓寺から発見された石庫・一字一石経を紹介している(考古學會 1901)。1924年は経塚の当たり年で、「上都賀郡北大飼村大字深津」の経筒、「下都賀郡小野寺村京呂戸發見」の経筒二個、日光二荒山(男体山)頂上「發見の経塚関係遺品」が相次いで中央学界の研究誌(『考古學雜誌』)に報告される(古谷・丸山 1924, 丸山 1924a～c)。

一方、当地の研究誌(『下野史談』)でも佐藤行哉氏が6箇所の芳賀郡内経塚を示したのち、「下野國經筒年表」ならびに「經筒銘文」集成を掲載する(佐藤 1927)。同じ頃、内務省・栃木縣により、男体山(二荒山)頂上発見の経塚遺物、小野寺(京呂戸)経塚から出土した経筒が調査・報告される。なお同書には「縣下所在經塚及ビ經石出所一覽」として12箇所の経塚、7箇所の一字一石経出土地の一覧表が付されている(栃木縣 1927)。

2 - [2] 戦後～現在

〔全般的傾向〕

経塚の概説ならびに発刊時点での研究現状・動向等を記したものとしては、矢島恭介氏の論考(矢島 1956)、蔵田 蔵氏の論考(蔵田 1961)、奥村秀雄氏の論考(奥村 1971)、三宅敏之氏の論著(三宅 1977・1983)、保坂三郎氏の論考(保坂 1977)、関 秀夫氏の論著(関 1984～1990)、杉山 洋氏の著書(杉山 1994)などがある。経塚に関する代表的研究としては石田茂作氏の著書(石田 1977)、保坂三郎氏の論著(保坂 1971)、村木二郎氏の論文(村木 1998・2003)などをあげてみたい。経塚資料を集成した書籍としては、稻垣晋也ほか編 1977 文献、関 秀夫編 1985 文献、難波田 徹ほか編 1986 文献、白井克也ほか編 2017・2018 文献等がある。また、国立歴史民俗博物館は2001年度～2003年度事業として「考古学資料の情報収集—経塚資料の集成的研究ー」を実施、全国経塚データベース作成を行っている。

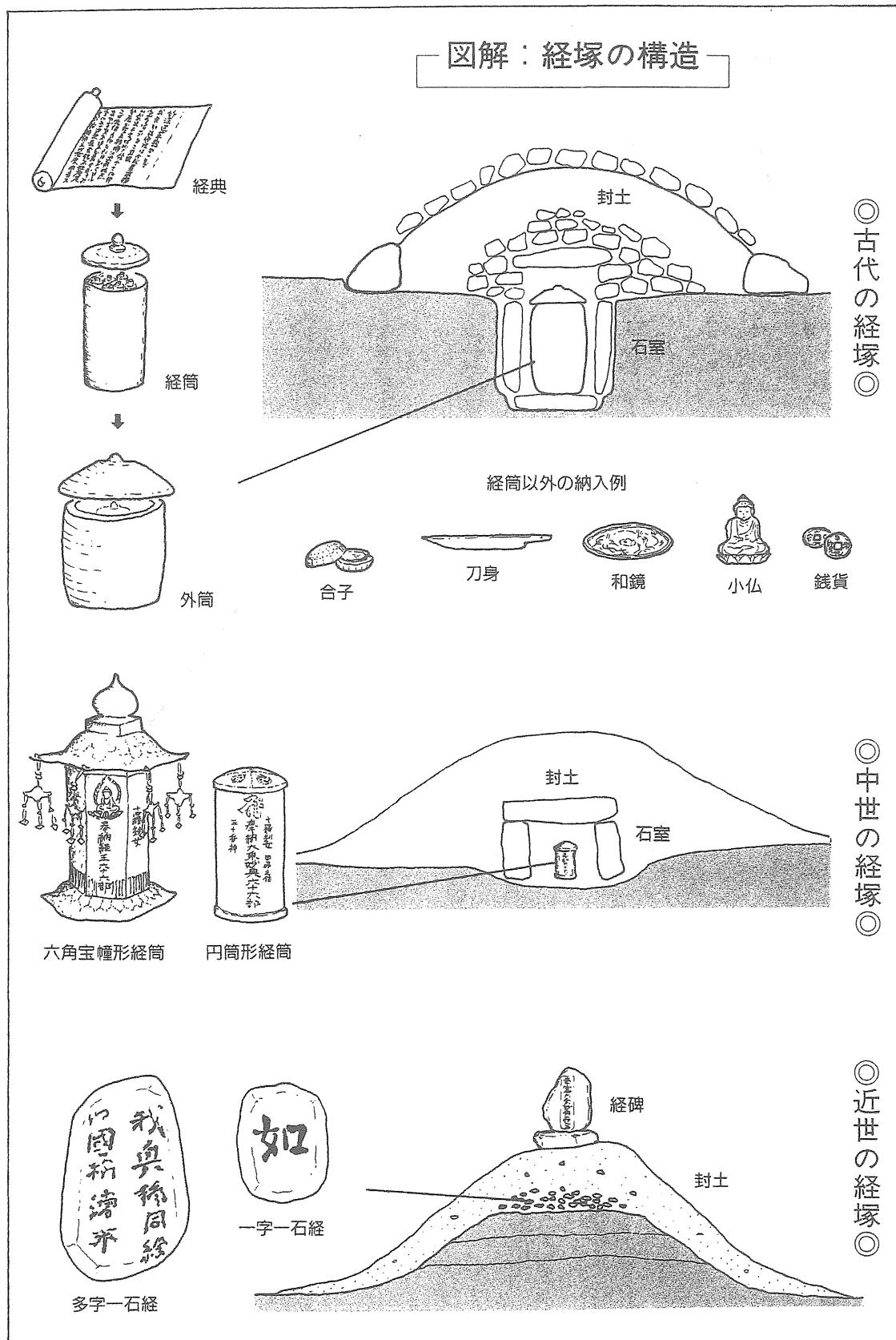
なお、管見にふれた、ここ20年ほどの興味深い発掘調査として、福島県・松野千光寺経塚、静岡県・堂ヶ谷経塚、茨城県・浅間台一字一石経塚などを挙げたい⁽⁴⁾。また、精力的、かつ興味深い博物館展示としては、奈良国立博物館「弥勒如来にささげるーお経のタイムカプセルー」、岩手県立博物館「岩手の経塚」、立正大学博物館「経塚の諸相」などがある⁽⁵⁾。

〔本県域の動向〕

本県域の経塚・経塚遺物は、他県と比べて少ない傾向にある(このためか研究も、盛んとは言えない)。とは言うものの、学術的な経塚調査が、まだまだ少なかった状況下、男体山頂遺跡発掘調査にて経塚遺物が出土し、注目を集めたこともある(なお、調査検討内容は斎藤・佐野・永峰編 1963 文献として刊行されている)。

一方、偶然の発見や、開発工事に伴う事前調査により、日光市山内・二荒山神社境内経塚、日光市(旧.今市市)・堀端経塚、上三川町・上蒲生経塚、宇都宮市・聖山公園遺跡経塚、真岡市・八木岡Ⅰ遺跡調査区内の百胴塚などが発掘調査され、経塚内部構造等を明らかにしている〔大和久・浅沼 1967. 大和久・大金 1969. 大和久 1972. 梁木編 1983・1993. 吉田 1998〕。

経塚関連論文としては、栃木県域の経塚研究略史および岩舟町小野寺出土「長治元年」銘経筒を紹介した三宅敏之氏の論考(三宅 1979)や、同「長治元年」銘経筒を初めて図化し再考察を加えた斎藤 弘氏の論考(斎藤 2009)がある。また、下野国内の経塚金石文資料や関連史料(六十六部聖史料)を収集、古代・中世の経塚の特徴



第1図 経塚の変遷（田代・出月 1993）

を考察した皆川義孝氏の論考(皆川 2001)がある。

3. 栃木県域の経塚ならびに出土遺物

ここでは、埋経(書写經典埋納)の歴史を概観したうえで、本県域の経塚(埋経)、ならびに出土遺物の傾向を記してみよう。

2 - [1] 古代的な経塚

中国仏教圏では、釈迦牟尼仏(Sākyamuni)の入滅後、正法(仏の教え、教えを実践する人、証りを開く人のある時期)、像法(仏の教え、教えを実践する人のみで、証りを開く人が出現しない時期)を経て、末法(仏の教えのみあって悪事が横行する時期)に至るという考え方(末法思想)が存在する。そして日本では、末法の始まりが、永承7年[1052]と考えられていた⁽⁶⁾。事実この頃、災害や戦乱、僧侶どうしの抗争が続出していた。このため、「末法の世」到来意識は急速に昂まっていた。

一方、大乗佛教のなかには未来仏(釈迦入滅56億7千万年後の弥勒菩薩の出現。のち、悟りを得て如来)を信奉する流れも存在している。そこで、人々は、弥勒如来が現れ再び仏教が盛んになる時に備えて、經典を地中に埋納して残そうとした。なお埋経は、写經・持經等の功德を説く『法華經』が最多である⁽⁷⁾。次いで、弥勒菩薩の所依經典である『弥勒上生經』『弥勒下生經』や、淨土往生を説く『阿弥陀經』等が見られる。さらに、即身成仏を説く『大日經』『金剛頂經』『理趣經』などの埋経も見受けられる。

なお、古代の経塚(埋経)は、11～12世紀にかけて、ほぼ全国で造立されたのち、13世紀以降、急激に減少・消滅していく。塚に納められた經典は紙本經が多いが、ほかに瓦経、銅板経、石経などがある。また、これらを納めた外容器(金属製・石製・陶磁器製などの經筒や經箱)、副納品(鏡・小刀・錢貨・仏像・仏具など)がある(第1図上段)。ちなみに、関秀夫氏によれば、経塚の築造は、

①土壙に埋納したもの、②土壙に石室を構築して埋納したもの、③自然の地形を利用したものに大別できるという(関 1985, 28頁)。

次に本県の事例と照らし合わせてみよう。栃木市岩舟町小野寺では、鋳銅製の經筒(器高25.0cm, 径15.5cm, 厚さ0.27cm前後)・蓋(器高6.1cm, 径21.5cm, 厚さ0.06cm前後)と經卷残片(軸頭・軸木、經紙残片、発装、銅板片)が採集されている(第2図)。この經筒が発見された經緯・時期は不詳であり⁽⁸⁾、外容器・副納品の有無、経塚の築造分類も不明である。しかし、幸いにして、本經筒の体部外面には、

釈迦牟尼佛滅後末法之初天台比丘

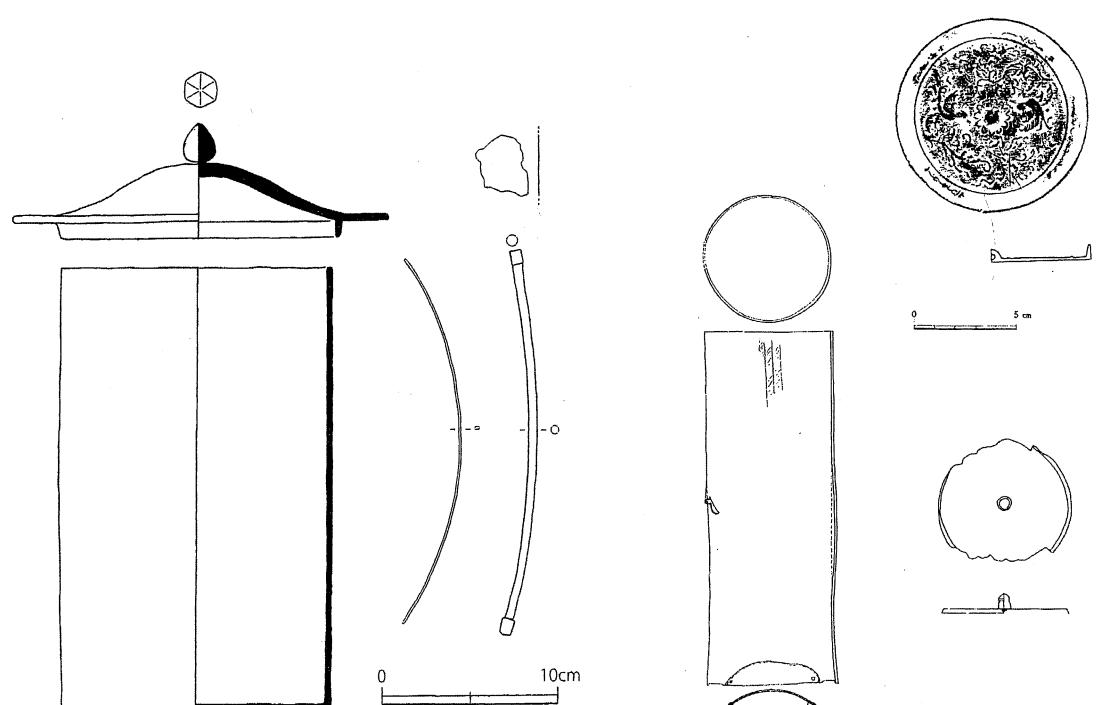
成算寛澄等如法奉書寫妙蓮華經

也

長治元年甲申六月八日己酉

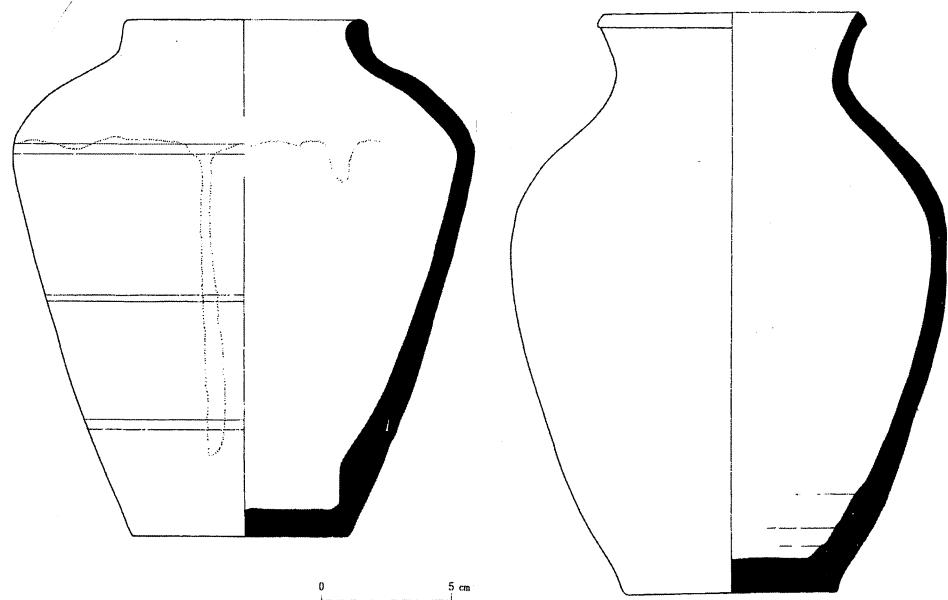
の銘文が記されている(斎藤 2009, 329～330頁)。この紀年銘(長治元年[1108])は全国的にみても早い事例で、経塚の伝播過程を考察していくうえで貴重な資料である。

太郎山頂遺跡では、日光市史編さん事業に伴う表面調査で渥美窯産陶器壺[12世紀代]の中から双鳳円鏡1面(径9.72cm, 平安末～鎌倉初期)、銅板製經筒蓋1点(径7cm)が発見されている(第2図)。加えて、同時採集された常滑窯産陶器三筋壺[生産は12世紀後半を主体]の中からも鋳銅製經筒1点(高さ19.5cm, 径7cm, 厚さ0.14cm)が発見されている(第2図)。「発掘調査が行われていないので具体的な状況は不明であるが、遺物は火山灰に埋蔵されているものと、崖下に投棄されたものの二様になる」とある(大和久 1986, 28頁)。



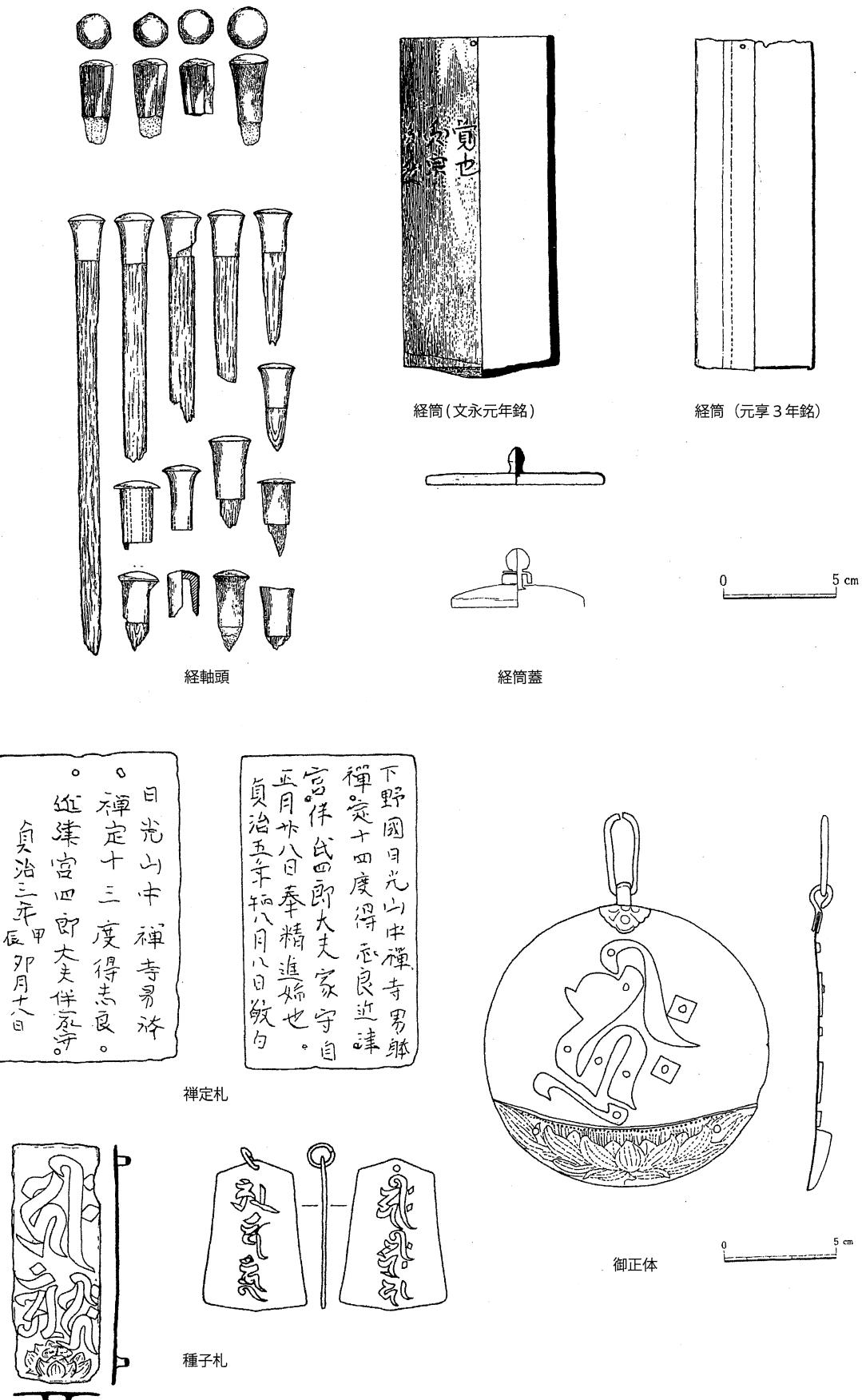
小野寺出土経筒・発装・経軸

太郎山頂遺跡経筒・鏡



太郎山頂遺跡経容器（左：常滑窯産三筋壺、右：渥美窯産壺）

第2図 小野寺経塚・太郎山頂遺跡出土遺物（齋藤 2009、大和久 1986）



第3図 男体山頂遺跡出土遺物 (大和久 1986)

一方、男体山頂遺跡では、経筒 11 点、経軸頭 18 点が発掘調査により出土した（第3図上段）【このうち 6 点の経筒体部外面には銘文が記されている⁽⁹⁾。ただし、いずれの経筒も「他の諸遺物と混在しており、かつその破損もいちじるしく、いわゆる経塚のように経巻を収めた経筒を主体とした遺構はなかった」（斎藤・佐野・永峰編 1963, 194 頁）。関 1985 文献でいう自然の地形を利用した（埋経）タイプに比定できよう。

2 – [2] 中世の経塚

古代末～中世期、人々がおこなえる作善（仏縁を結ぶための善い行い）として經典（紙本經、柿經、貝殻經など）を寺院や神社に奉納することが流行した〔寺社への写經奉納は、『法華經』のほか、『大般若經』『般若心經』、淨土三部經＝『阿弥陀經』・『無量壽經』・『觀無量壽經』などが見られる〕。これと六十六部聖の回国巡礼とが結びつき中世的納經・埋経が展開する。ちなみに六十六部聖（略称：六部、別称：回国聖）とは、原則的には、『法華經』を六十六部書写し、全国六十六州の靈場に巡礼・奉納する聖のことである〔書写した經典自体を六十六部とも称した〕。しかし、14～15 世紀頃の六十六部聖が関与した遺物としては寺社に奉納した納札が残るていどで、経塚遺物は少ない。

他方、16 世紀になると、六十六部聖は規格化された小型経筒（銅板製、円筒形または六角柱形で高さ 10 cm 前後）を用いだす。そして寺社境内に埋納するタイプの経塚が全国的に盛行する（第1図中段）⁽¹⁰⁾（経筒に「大乗妙典」「如法經」等の銘文が見られる。『法華經』を意味するケースが多い）。

次に、本県域の事例と照らし合わせてみよう。

a) 納経塔の事例

日光山輪王寺には鉄製納経塔 1 点が伝わっている。宝篋印塔に近い形をしているが（高さ 91.1 cm. 相輪部、笠部、塔身部、台座を別鋲、各々を組み立てる）、塔身部が著しく高い（第4図左側）。「塔身の銘文によって、元徳三年[1331]十二月十五日付けで書写した法華經を納めた塔であることが知られる。本来この塔は、勝道上人の墓所といわれる中禪寺湖内の上野島（南北約 12 メートル、東西約 14 メートル）に置かれていたものを、近年移転して輪王寺宝物館内に保管」されている⁽¹¹⁾。なお、銘文は、以下の通りである（千田 2000, 212～213 頁。ただし銘文〔 〕内は池田補足）。

一字三札 如法書寫 一乘妙典全部奉納

元徳三年辛未[1331]十二月十五日

本願上人 良覚

大工沙弥 行西

b) 寺社境内の埋納

日光市山内滝尾神社では、文政 6 年[1823]に、別所の西方に所在する影向石付近で経筒 2 点が出土したと『日光山志』は記す。1 点の経筒（第4図上段右）は上端が欠損しており外面には、

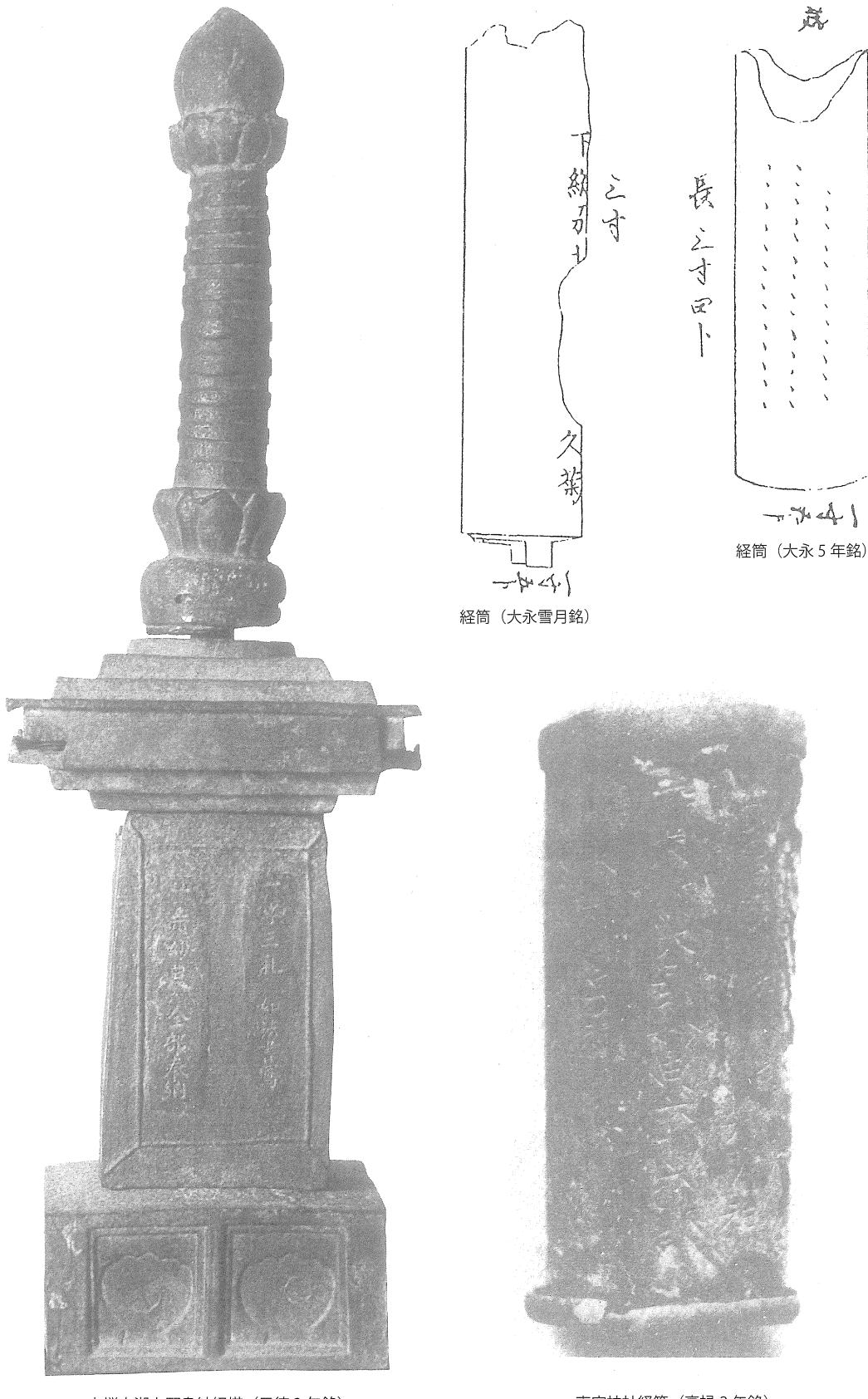
下野國宇都宮住覺源

羅刹女 旦那叡毫法印

奉納大乘妙典六十六部聖

三十番神 法政禪門

大永五年[1525]今月吉日



第 4 図 上野島納経塔・滝尾神社経筒・東宮神社経筒（千田 2000、植田 1996、田熊 1982）

の銘文が記されている。また、別の1点(第4図上段左)は経筒上面と体部の一部に欠損があるものの、

下總州北口□□□久菊

羅刹女 旦那下總國沓懸社

松本民部少輔宗膳

奉納大乘妙典六十六部聖

三十番神 大永雪月吉日

と記されている(植田 1996, 143~145 頁。ただし両銘文とも[]内は池田補記)。

日光市山内・二荒山神社では、北側境内地を整地中、経塚が発見された。急遽、発掘調査を実施した結果、大きな掘込み(上部径 1.8m、底径 1.2m、深さ 0.9m)の中に石経が埋納されていたと言う(平たい河原石に經典を墨書きしたもので、一字一石ではなく、すべて長い經文が書かれている)。「埋納の時期は、経塚の上に植えられていた杉の大木の樹齢と見合わせて、室町時代を下限とするものと考え」られている(大和久 1970, 198 頁。大和久 1972, 423 ~424 頁)。

栃木市皆川・東宮神社は、「昭和四年二月六日郷社東宮神社拝殿新築二付社前擴張ノ為メ地下ヶ工事中地下約四尺位ノ下ヨリ」発掘した銅板製の円形経筒 1 点(第4図下段右)、ならびに当時の発見記録を現在に伝えている。経筒外面には、

十羅刹女皆川庄 東宮大明神

(梵字バク) 奉納大乘妙典六十六部

卅番神 享禄二天[1529]八月吉日

冷木与曰郎勝家

が刻字されている(田熊 1981, 22~24 頁。ただし銘文[]内は池田補記)。

芳賀町「大字祖母井字赤坂道上」では、「番七稻荷社の境内」より経筒が「發掘」された⁽¹²⁾。「経筒は青銅板にて製作せられて鍍金が施されてゐる、(略)筒中には經文が入つてゐたのであらう、黒い灰のようなものになって約五分程填充されていると云ふ」。なお、経筒外面には、

十羅刹女 宇都宮住春清

(梵字觀音[サ]) 奉納大乘妙典六十六部聖

三十番神 天文十四年[1545]今月日

が刻字されている(佐藤 1927, 14 頁。ただし銘文[]内は池田補記)。

このほか、男体山頂遺跡では、天文 2 年[1533]銘経筒(銅板製で高さ 9.5 cm、口径 4.3 cm、厚さ 0.04 cm。蓋・底は欠損)が出土。筒身は鍍金を施し、

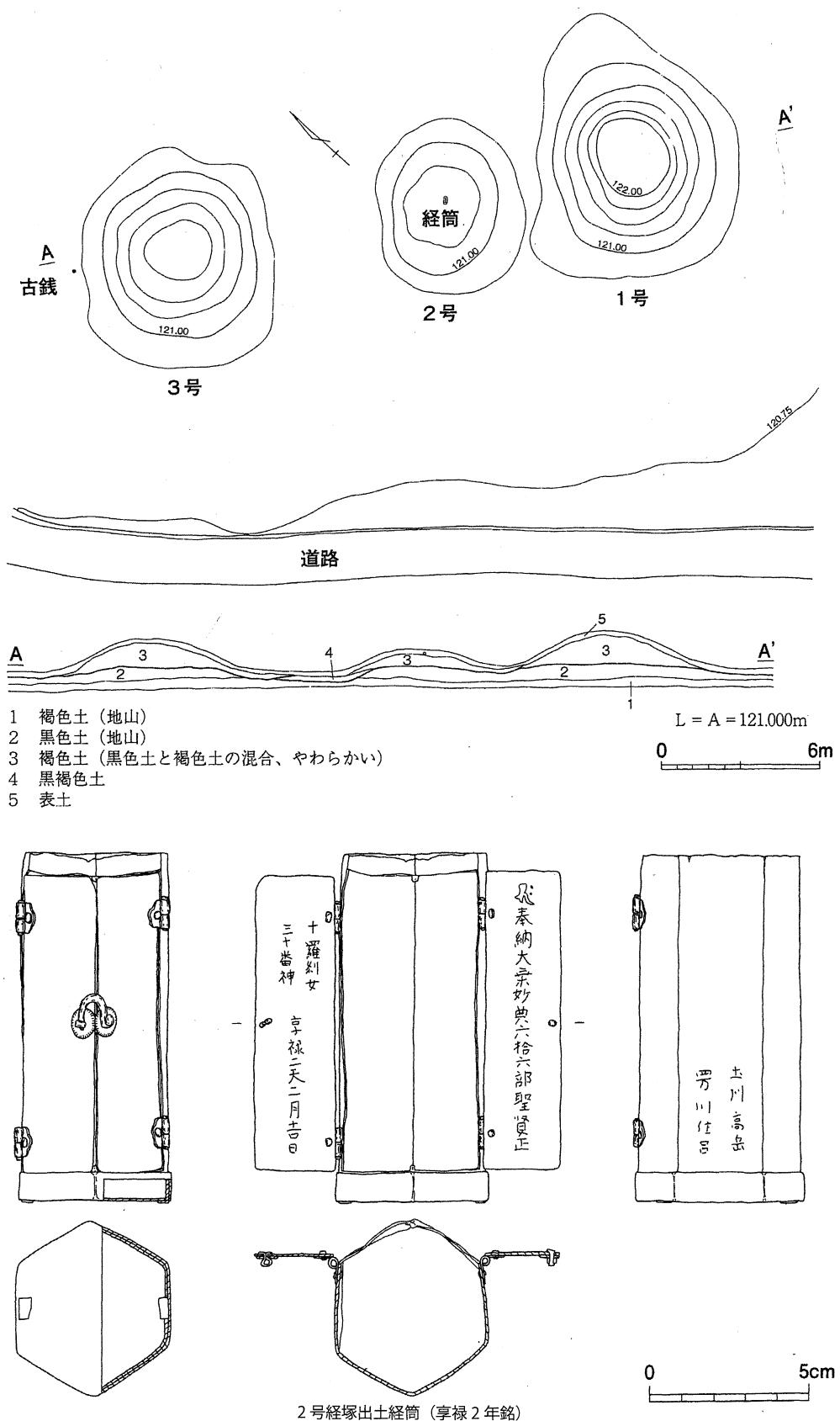
(鹿)池故賀志吉原七良左(衛)門

梵字バク 奉納十羅刹女三十番神

南(峰)天文二季癸巳[1533]七月吉日

と刻字されている(斎藤・佐野・永峰編 1963, 194~198 頁。ただし銘文[]内は池田補記)。

また、芳賀郡益子町鹿島神社境内と同郡中村八幡神社境内から鎌倉時代の和鏡が発見された。このことから、「他ノ發見ニ就テハ不明ナレドモ、恐ラク經塚ナラム」と推定されている(佐藤 1924, 13 頁。栃木縣 1927, 133 ~134 頁)。これと同様に、「那須郡那須村[現・那須町]大字高久」でも「古鏡發見地又恐ラク經塚ナリシナラント」と記されている(栃木縣 1927, 133~134 頁)。



第5図 聖山公園経塚（梁木編 1993）

c) 塚への埋納

宇都宮市・聖山公園遺跡には1～3号塚が並んで築造されていた⁽¹³⁾。靈園造成に先立つ発掘調査により2号塚の中心部・盛土表面-約20cmの深さから銅板製の六角宝幢經筒(厚さ0.01cm.筒部完存.蓋は欠失)が出土した(埋納遺構・經筒外容器・副納品は検出されなかった)(第5図)。經筒の扉内面および外部裏面には、

(梵字パク)奉納大乘妙典六十六部聖賢正

十羅刹女

享禄二天[1529]二月吉日

三十番神

土州 高岳

四万 川住呂

が刻字されている(梁木編1983, 47頁. 梁木編1993, 247頁. ただし銘文[]内は池田補記)。

栃木市岩舟町小野寺(字京呂戸)では、山麓に所在する「小丘4個」のうち、「二個の塚を塚の樹根を發掘せし際、各塚より一個づゝ經筒を發見せり」と云う。うち1点は「小石櫛の中にありし爲め、發掘の折岩石に押しつぶされ、蓋は歪み筒は扁平に」なってしまったらしい。ただし、經筒外面の銘文は判読可能で、

十羅刹女 大永六年[1526]八月

奉納大乘妙典六十六部

三十番神 昌膳上人

とある(丸山1924b, 43~44頁)。また、別の1点は完形で經筒一面に、次の銘文を刻んでいる⁽¹⁴⁾。

開 合

奉書阿彌陀經六卷四十八願文

十二光佛發願文實號百返

爲善光寺四十八度參詣供養大乘妙典百部奉讀誦醪

此等功德合力助成旦那等頭證佛果無疑者也

本願道祐 敬白

天文五丙申[1536]潤十月十五日

栃木市家中(字橋本)では、「念佛原といふ原野の一部を地均しの爲、其處にあった小塚[鎧塚をさす.池田補記]を發掘した折に」經筒と紙本經が出土したと云う。なお紙本經は、その後、所在不明になってしまったようであるが、經筒は「長さ約一尺、上下約二寸同覆に」下記の銘文があると云う(出井1924, 42~43頁)⁽¹⁵⁾。

下野國 壬生住僧

[十] [羅] 刹女

梵字 奉納大乘妙典六十六部

靜遍

三十番神

享禄[二年?] [1529?]當月日

なお、佐藤氏の「經筒銘文」集成によれば、宇都宮市「雀宮牛塚南方經塚」で、

十羅刹 女天文七戊戌[1538]十月十三日

(梵字) 奉納大乘妙典六十六部聖

三十番 神大隅國會於郡住倡宗遍

と刻字された経筒が出土したことがうかがい知れる(ただし、本人が注記しているように、「下野史談會見學旅行ノ際手記」をもとにしているため経筒銘文以外の情報は不詳である。佐藤 1927, 16 頁)。(16)。

その他では、鹿沼市深津において、小丘を掘削した折、経筒が発見された。経筒は欠損してしまったものの「妙典六十」「部聖」「享禄3年[1530]」などの銘文が判読できると言う(丸山 1924 a, 43 頁。栃木県 1927, 134 頁)。なお、芳賀郡益子町「上大羽字經塚ニ於テ、先年古鏡ヲ發見セリト云フ」との記載もみられる(佐藤 1924, 13 頁。栃木県 1927, 133 頁)。

2 - [3] 近世的一字一石経塚の展開

5 cm前後の平たい河原石(礫石)に一字~複数数字の経文を墨書きや朱書きした石経を埋納した経塚が16世紀頃から造営される。これに伴い、小型経筒(高さ10 cm前後)を用いた経塚造営は終焉。代わりに礫石経塚が17~19世紀に隆盛した。

礫石経塚は、北は北海道、南は沖縄に至る日本全土に分布する。塚を築いて石経(数千~数万点が出土)を埋納する事例が主体をなす(第1図下段)。(17)。だが、なかには、「建造物の地鎮に用いられる例、骨蔵器と共に埋納された例、経石を散布した例」などもある(三宅[慶]・池田[奈]2016, 13 頁)。また、経塚の標識として経碑を建てるケースもある(18)。なお経碑をみると、『法華經』書写の事例が多い。だが、礫石経のほとんどは、一字もしくは数字の写経のため、「經典を復原することは不可能であり、数行にわたって書写した礫石経でも正確を期すことは困難」であると先学は指摘する(坂詰編 2003, 107 頁)。

次に、本県域の事例と照らし合わせてみよう。

a) 寺社における石経出土事例

栃木県 1927 文献によれば、「那須郡烏山町[現. 那須烏山市]妙光寺境内」で「一石一字ノ墨書きアルモノヲ発掘」したという。しかも「内長サ約九寸幅廣キトコロ四寸五分アル扁平ナル石ノ表面ニ願文記シ、裏面ニ寶永六年[1709]己丑八月」の紀年銘があるという。

また、下都賀郡「富山村[現. 栃木市大平町]大中寺門前並木ノ杉ノ根本ヨリ一石一字ノ墨書きアルモノヲ発見」したという。「寺伝ニヨレバ、(略)慶長七年[1602]ニ此杉並木ヲ植ユト云フ」。ゆえ「其時根元ニ此經石ヲ埋メシモノカ」と推定している。さらに、「下都賀郡寺尾村出流山[現. 栃木市出流町・出流山満願寺]観音堂岩屋道」と「足利市緑町八雲神社舊地」でも「一石一字ノ墨書きアルモノヲ発掘」したと云う。

なお、興味深い事例としては「安蘇郡葛生町[現. 佐野市鉢木町]願成寺境内觀音堂床下」では「一石一字ノ墨書きアルモノ敷並ベ」ていたと云う。また、大谷寺(坂東三十三觀音札所)にほど近い「河内郡城山村[現. 宇都宮市城山]大字荒針ニ於テ一石一字ノ朱書きアルモノヲ發掘」したと云う(以上、すべて栃木県 1927, 134~135 頁。ただし[]内は池田補記)。

b) 経碑を伴う埋経事例

「那須郡伊王野村大字伊王野[現. 那須町伊王野]字花園地内」の備中廓の崖下には、

法菴如水

奉書寫大乘妙典一石一字供養塔

並書敬白

願以此功德普及於一切
我等与衆生皆共成仏道
自他平等

師親眷属七世父母三界萬靈
即身成仏

旨寶永六己丑天[1709]七月吉日

と刻まれた経碑(一字一石供養塔)と「經石を出つる塚」の存在が知られる〔ただし「先年來より大方取出され今は散乱して少數となりたる如し、然れども附近より堀出され居る經石を發見し得る現況なり」(柿園 1924, 9~10 頁)〕。

一方、宇都宮市新里町萱野では、石櫃・銅製経箱が構造改造事業の工事中に発見された(第6図)。経箱は厚い銅板を組み合わせた蓋付き長方形の箱で、大谷石で作った石櫃に納められ、これと関係する供養塔の北側地下から発見された。銅製の箱の寸法は、身の長辺が 29.5 cm、短辺が 20.5 cm、高さが 6.05 cmで蓋は長辺が 9.9 cm、短辺が 21.1 cm、高さは 2.4 cmである。

銅製経箱の蓋上面には、

願文書付事

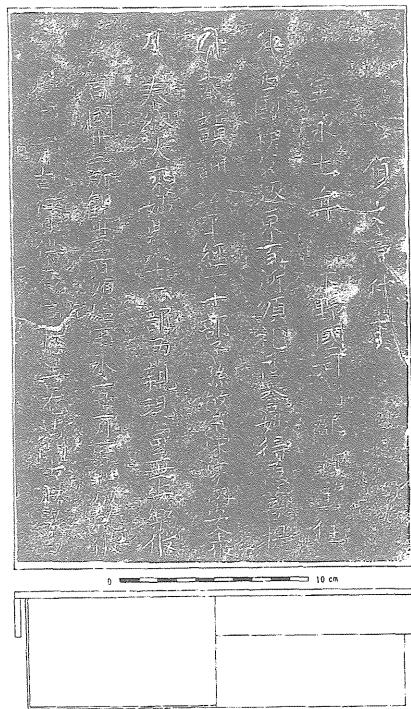
宝永七年[1710] 下野國河内郡新里住
梵字ヲ 西国秩父坂東百ヶ寺巡礼忍善妙得爲菩提
梵字キリク 奉讀誦法華經一千部子孫繁榮家内安全攸
梵字ヰ 奉納大乘妙典六十六部両親現当二世安樂攸
当國卅三所觀世音順始宝永六己二月取願成就攸
庚寅三月吉祥日供養高橋善左衛門吉勝敬日

の願文が刻まれている。ただし発見時点では經典らしいものは見つかっていない。なお、経碑(大乗妙典一千部供養塔)にも、

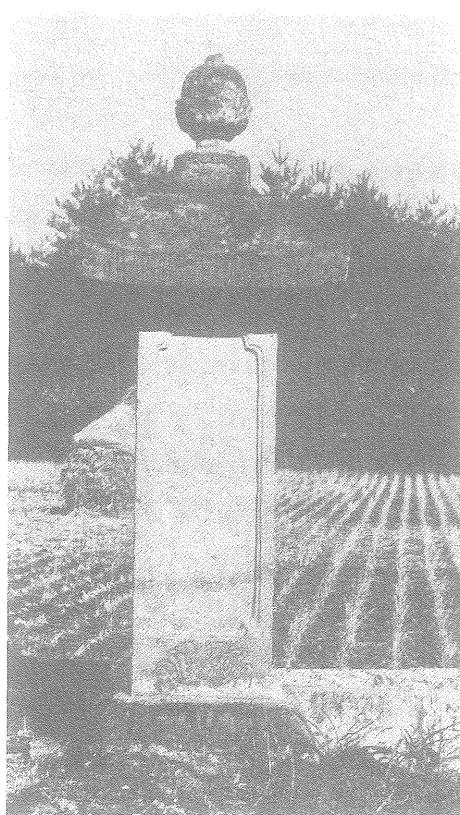
宝永七庚寅 [1710] 三月廿七日
梵字ヲ 奉真讀法華妙典一千部襍供養導師乘口
學口法寬周
梵字キリク 奉納大乘妙典日本六十六部 本誓口口子孫
梵字ヰ 奉寄納法華妙典坂東卅三部 安全取願成攸
当村住高橋氏善左衛門吉勝
敬白

の願文が刻字されている。つまり、石櫃・銅製経箱・経碑が、セットとして検出できた好例である(大和久 1969, 55 ~62 頁。ただし銘文[]内は池田補記)。

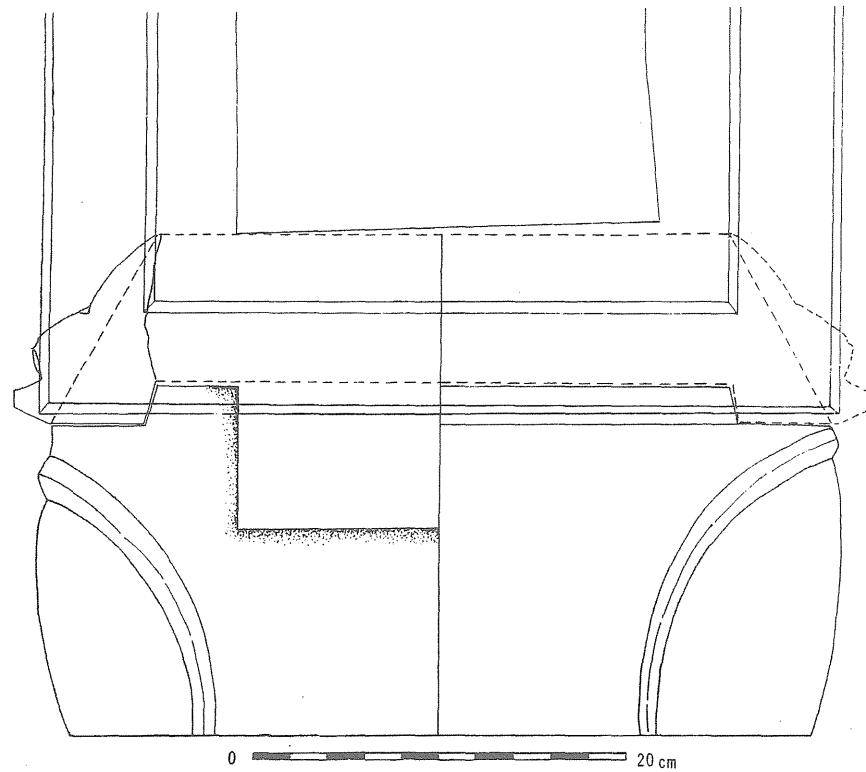
また、日光市(旧.今市市)倉ヶ崎・堀端経塚では、農作業中に数個の多字一石經が数個発見された。また、今市市教育委員会(当時)は、これとは別に同地の発掘調査指導を栃木県教育委員会文化財保護課(当時)に要請していた。そしてトレーンチ発掘調査を実施したところ、石經を埋納していた方形ピット(一辺 0.62m前後、深さ 0.40m。この土坑にじかに石經を納めた)、2組の小堂宇礎石跡(2棟とも 3間×3間程度の大きさ。堂の東側に石經を埋納したことは確実)が検出できた(第7図)。出土遺物は、964 個の多字一石經(5 cm程度の平たい河原石に經文を墨書き)のみで、大部分が『法華經』『方便品第二』のようである。このほかに真言(漢音訳。ただし釈読不能)や、祖先供養を意味する石經(「迦牟尼仏/(片仮名)サ 供養釈」「口印導/靈魂口/代々先祖/諸聖靈/[梵字]ア 普岳道觀」)



青銅製経箱（宝永7年銘）

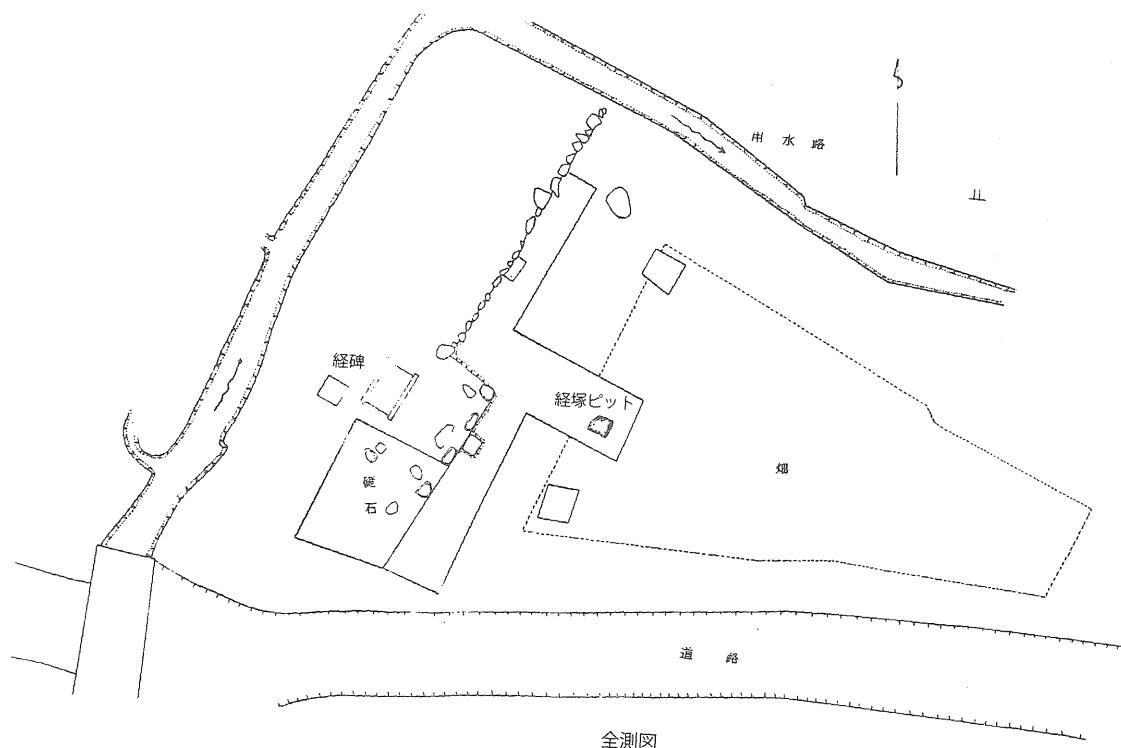


経碑（宝永7年銘）

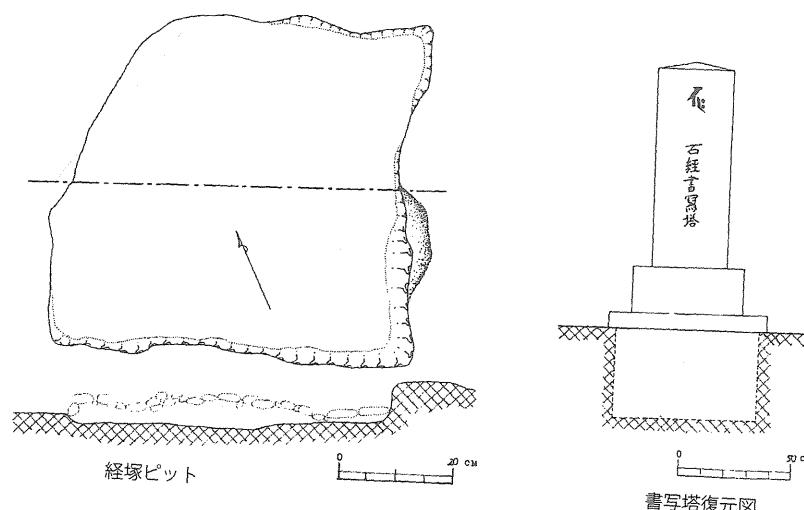


石燈

第6図 宇都宮市新里町萱野石燈・経箱・経碑（大和久 1969）



全測図



書写塔復元図



多字一石経

第7図 堀端経塚（大和久・浅沼 1967）

も出土している。

なお、石經埋納ピットから6mほど離れた場所に經碑(最下部蓋石は一辺0.69m。その上の台石は一辺0.49m。經碑は高さ0.86m、一辺0.33m)がある(第7図上・中段)。この最下部蓋石は、丁度ピットをふさぐ大きさである。それゆえ、經碑は本来、石經埋納の方形ピットの直上に据えられていたと推定されている。經碑には、

梵字バク 石經書写塔

書写師 法印秀運

寛政七年乙卯天[1795]

十有月吉 辰

と刻まれている(大和久・浅沼1967, 1~10頁。大和久1970, 199頁。ただし碑文[]内は池田補記)。

河内郡上三川町・上蒲生遺跡では、日産自動車柄木工場建設に先立って2基の塚と古墳時代住居跡が発掘調査された。1・2号塚とも、小型円墳と同じような規模・形状をしているが(第8図上段)⁽¹⁹⁾、塚は周辺の土をかき集め盛土しただけの簡単な工法であった。このうち1号塚頂部には凸形の深い掘り込みがあった(聞き取り調査等の結果、同町上三川・普門寺境内に現存している享保5年銘經碑が建っていた痕跡であること判明)。この直下から一字一石經⁽²⁰⁾とこれを埋納した方形孔が検出された。なお、1号塚に建てられていた經碑の銘文は次の通りである(大和久・大金1969, 8~9頁。ただし銘文[]内は池田補記)。

梵字サ 享保五庚子歳[1720]十一月吉祥日

梵字キリーク 大乗妙典前々一万五千部供養 敬白

梵字サク 萩原 氏

施主 同 氏

国府田 氏

他方、2号塚からは「一物も検出されていない」。上述の普門寺境内に現存するもう1基の經碑(正徳6年銘)も、かつてこの塚の頂部にあったことから「紙本經を埋納した塚」の可能性が推定されている。なお、2号塚經碑の銘文は次の通りである(大和久・大金1969, 8~9頁。ただし銘文[]内は池田補記)。

願[以]此功德普及於一切

我等与衆生皆共成仏道

梵字キリーク 大乗妙典六千部供養之塔

萩原勝右衛門勝秀

檀主 同姓市右衛門秀重

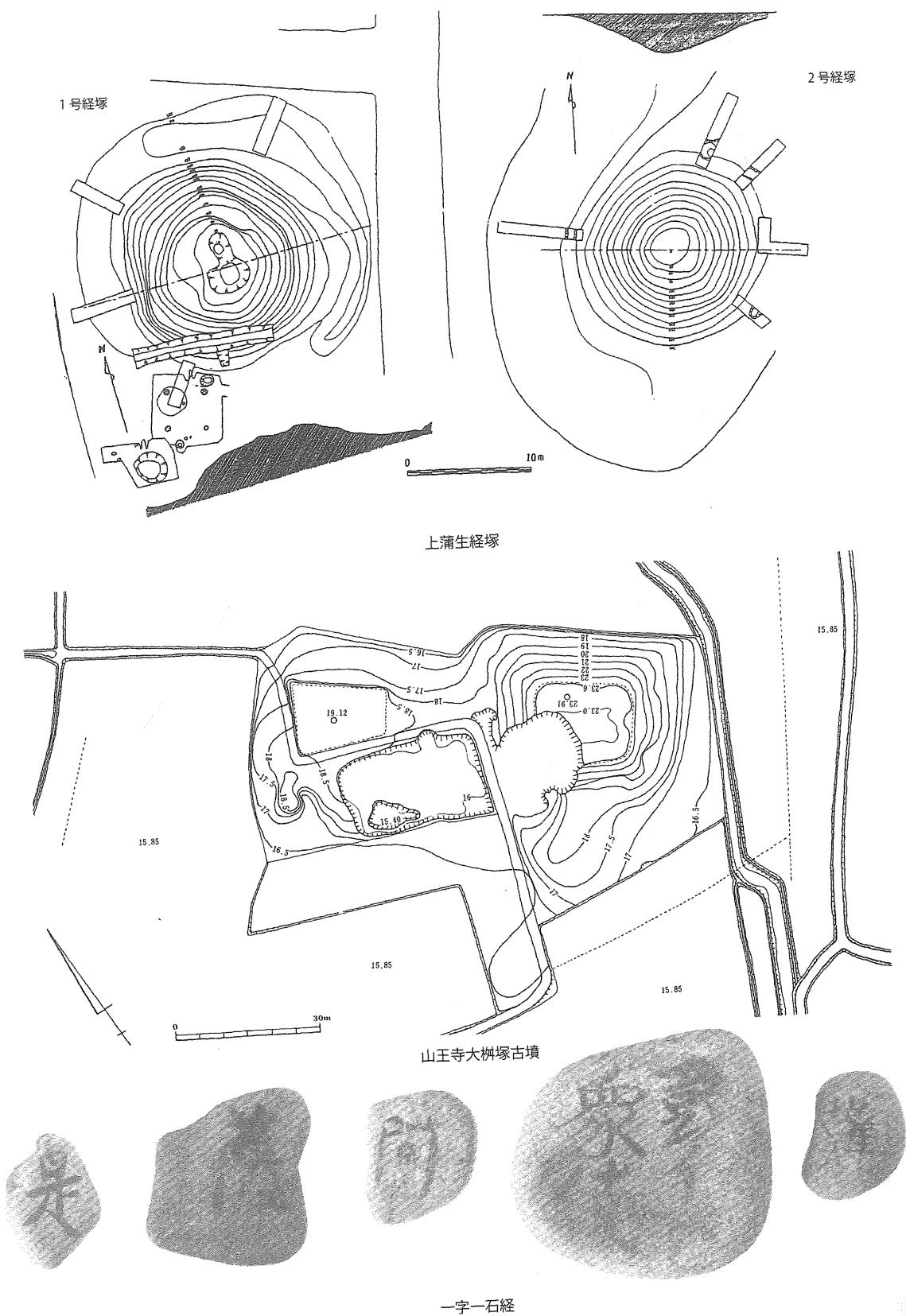
国府田氏悔口道華

正徳六丙申歳[1716]二月摩[訶]吉日

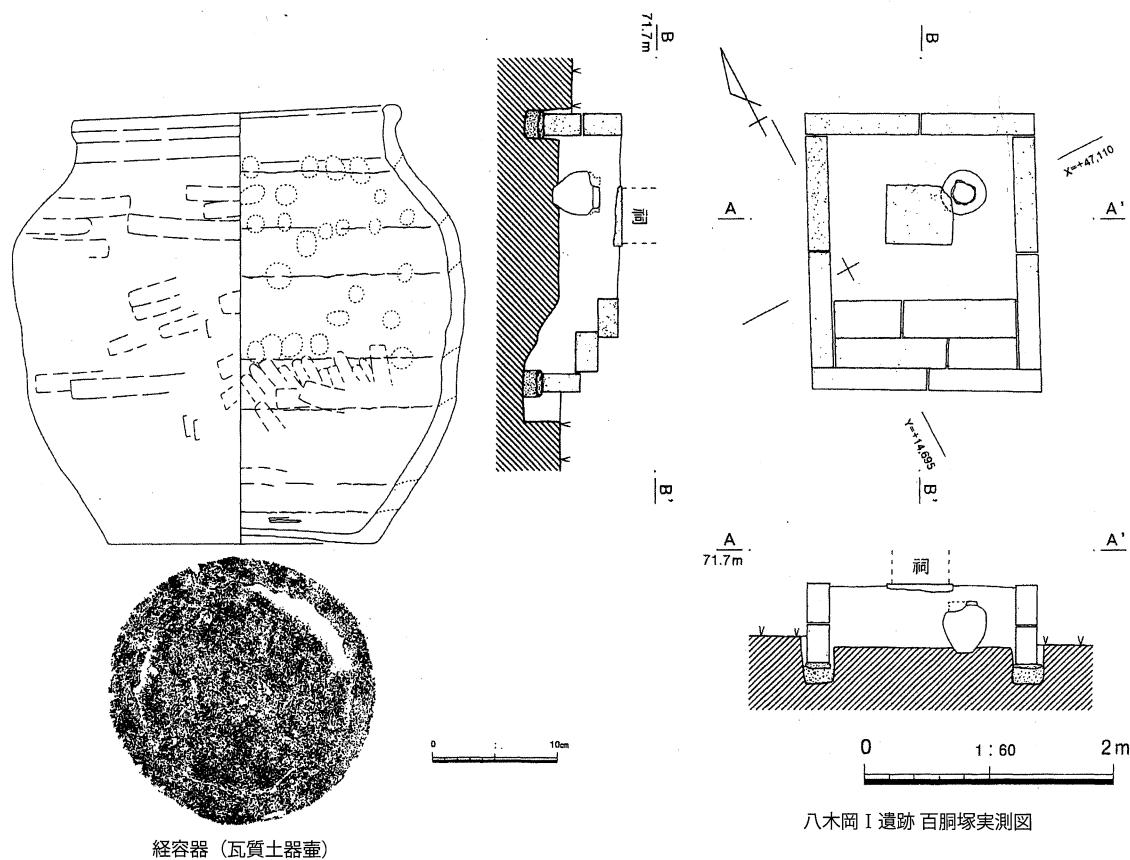
c) 塚への埋納

柄木市藤岡町蛭沼・山王寺大耕塚古墳〔古墳時代前期の前方後方墳[全長約96m]〕は、「南側裾部一帯に山王寺という寺がかつてあった」という(墳丘は寺の所有地で、前方部中央には墓地が営まれている)。古墳発掘調査中、後方部墳頂部の南東縁や同東縁部の表土-20cmほど深さから一字一石經群が出土した(第8図下段)。「山王寺に因る仏教信仰の所産」と推定されている(前澤1978, 28~29頁)。

真岡市八木岡地内では、国道294号バイパス建設に伴い同地区遺跡群の発掘調査が行われた。このうち、八木岡I遺跡調査区内に所在する「百胴塚」の石組基壇(近~現代になってから造立。発掘調査着手直前まで祠が

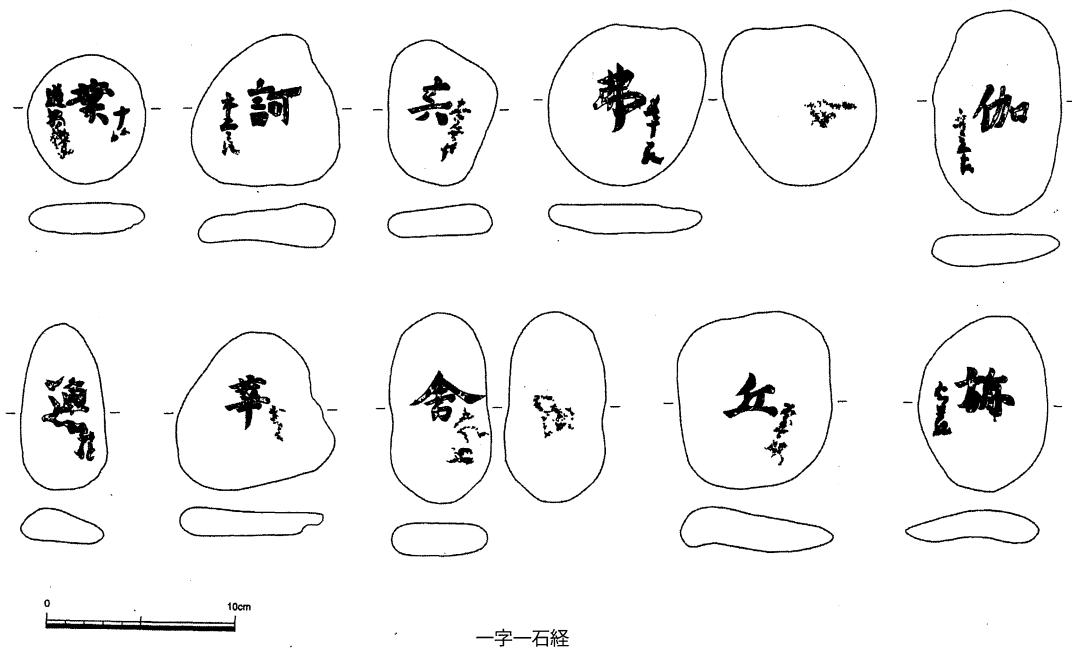


第8図 上蒲生経塚・山王寺大樹塚古墳（大和久・大金 1969、前澤 1978）



経容器（瓦質土器壺）

八木岡 I 遺跡 百洞塚実測図



一字一石経

第9図 百洞塚出土遺物（吉田 1998）

建っていた) (第9図上段右)を除去した際、当該地から礫石経・経容器が出土した。このことから、初めて経塚であることが認識された⁽²¹⁾。

経容器は瓦質土器である(口径 26.0 cm, 器高 35.0 cm, 底径 21.2 cm. 第 9 図上段左)。「口縁部の一部が欠損した状態で出土した。元々欠損していたのか、祠に納めた際に欠損したのかは不明である」と言う。一字一石経(長径 7~10 cm 程の扁平な楕円礎に墨書き)は、経容器の内外から 233 点出土している⁽²²⁾。判読できた主字は「葉」「訶」「真」「弗」「伽」「(蓮?)」「華」「舍」「丘」「旃」など、脇字は「道場口」「木二口」「(吉兵衛?)」「長十郎」「(重?)三郎」「花」「(与?)藏」などがある(第 9 図下段)。判読できた文字数が 41 点と少ないことから、出典を明確にはできなかった(ただし、「(蓮?)」「華」字から『妙法蓮華經』の可能性を推定している)〔吉田 1998, 88~89 頁〕。

この他、大田原市両郷の丸山経塚では、塚(高さ1mほど、径2mほど)の「4周が切り取られ、その結果、川原石をぎっしり積み、その上に土をかけたものであることが」開墾により判ったと言う(渡辺1963, 119~120頁)。また、「芳賀郡小貝村大字續谷[現.市貝町続谷]字西山経塚ニ於テ一石一字ノ墨書アルモノヲ發掘」したと云う(佐藤1924, 13頁. 栃木縣1927, 135頁)。さらに、芳賀郡「南高根澤村大字芳士戸[現.芳賀町芳志戸]字沓形」でも「經石出土」があったと云う(佐藤1924, 13頁)。

3.まとめ—栃木県域における経塚の特徴—

本県域における経塚の特徴を整理すると、次のようにまとめられよう。

(1) 古代的経塚

(1-1) 栃木県域では、東京都・白山神社経塚や茨城県・東城寺経塚等(関ほか 1986, 白井編 2017)のような古代経塚(里山に所在し多量の経塚遺物が出土)は現時点では確認されていない。

(1-2)一方、栃木市岩舟町小野寺出土経筒銘文が、当時の近畿事例に近似していることから、「西日本で広く行われていた経塚造営の実態に近いものであったと推定」される(斎藤 2009, 332 頁)。なお、小野寺出土経筒は、山梨県・柏尾山経塚(康和 5 年[1103]銘)と同様、東日本最古級の経塚である⁽²³⁾。

(1-3) 日光男体山頂遺跡と太郎山頂遺跡は、他の宗教遺物と混在しており、「いわゆる経塚のよう」に経巻を収めた経筒を主体とした遺構はな」い(斎藤・佐野・永峰編 1963, 194 頁)。奈良県・金峯山、和歌山県・那智山などと同様に「埋経を含む多用な山岳宗教が重なり合った複合遺跡」であるがゆえと言えよう(関 1990, 26 頁)。

(1-4) 古代的な經塚(埋經)は、11～12世紀にかけて造立されたのち、13世紀以降、急激に減少・消滅していく。こうしたなか、男体山頂遺跡では散発的ではあるものの、「承久3年[1221]」から「元亨3年[1323]」に至る期間、埋經が行われている(同遺跡出土經筒銘文より)。

(1-5) 男体山頂遺跡出土の元享3年銘経筒には「下野国日光禪定権現御宝殿」の語がみられる(本稿註9を併照)。加えて、同遺跡では禪定札・種子札⁽²⁴⁾や御正体⁽²⁵⁾などの修驗道系遺物も出土している(第2図下段)。(1-3・4)の背景には修驗行者の関与も想定できよう。

(2) 中世の経塚

(2-1) 古代末～中世期、人々がおこなえる作善と回国巡礼とが結びつき中世的納経・埋経が展開した。しかし、14～15世紀頃の遺物としては寺社奉納の納札が残るいでで、経塚遺物は少ない。こうしたなか、元徳三年[1331]の紀念銘をもつ日光市中宮祠・上野島納経塔は稀少な事例である。しかも本例は、一字三

礼(写経に際し、一字書くたびに仏を念じ三度礼拝)にもとづく正式な如法経(『法華経』)書写である。

(2-2) 栃木県域の経塚 29 遺跡中 8 遺跡は六十六部聖が関与した経塚・経塚遺物である。なお、現時点では、本県域の六十六部聖経塚・経塚遺物は大永 5 年 [1525] から天文 14 年 [1545] の期間に限られる(他地域では 16 世紀中葉～後葉でも六十六部聖関与の経塚が営まれている)。

(2-3) 日光滝尾神社・大永 5 年銘経筒、小野寺京呂戸経塚・大永 6 年銘経筒は、法印・上人⁽²⁶⁾クラスの僧侶が且那となり、六十六部聖が本県域寺社・経塚に奉納・埋経した事例である(六十六部聖の多様性を考察していくうえで興味深い事象であるが、両者の関係性の分析・検討については今後に期したい)。

(2-4) 日光男体山頂遺跡では、六十六部聖により自然地形を利用した(古代的)埋経が行われている(男体山頂遺跡・天文 2 年銘経筒)。

(2-5) 下野国在住の六十六部聖による国内寺社・経塚への明確な埋経事例としては、「宇都宮住宥清」による番七稻荷社境内経塚への埋経(天文 14 年銘経筒)、「壬生住僧静遍」による橋本鎧塚(経塚)への埋経(享禄 2 年銘経筒)がある。

(2-6) 遠隔地からの六十六部聖埋経事例としては、「下總國沓懸社松本民部少輔宗膳」が且那となった日光滝尾神社境内への埋経(大永雪月銘経筒)、土佐国高岳四万川[現在の高知県高岡郡四万町]住の「賢正」による聖山公園 2 号経塚への埋経(享禄 2 年銘経筒)、大隅国會於郡[現在の鹿児島県曾於郡]住の「宗遍」による雀宮牛塚南方(経塚)への埋経(天文 7 年銘経筒)がある。

(2-7) 中世の経筒銘文に記される「大乗妙典」は『法華経』をさすと概説書に往々記されている。しかし、小野寺京呂戸経塚で出土した天文 5 年銘経筒銘文を見ると信濃国・善光寺阿弥陀如来の参詣のため「奉書阿彌陀經六卷」等を読誦・埋経したことが分かる⁽²⁷⁾。また、このことから、本經筒銘文の「大乗妙典百部」は『阿彌陀經』を意味することが明らかである。「大乗妙典」 = 『法華経』だけではないことを示す好例である(実際、寺社奉納經で『大般若羅蜜多經(大般若經)』が大乗妙典として扱われる事例も存する)。今後も注意深く経塚銘文を検討していく必要があろう。

(3) 近世の経塚

(3-1) 栃木県域の経塚 29 遺跡中 16 遺跡は近世の経塚・経塚遺物で、最も多い。なお、那須町伊王野備中廓には宝永 6 年 [1709] 銘の一字一石供養塔と経碑(一字一石経)が存在している。さらに那須烏山市・妙光寺でも宝永 6 年 [1709] 銘の一字一石経が出土している。現時点では、本県域における礫石経塚の初現事例である(考古資料として)。

(3-2) 17 世紀以降、経碑は多数造立されるものの、碑下の埋経については十分な調査がされていないとの指摘がある。しかし、本県域では、1920 年代と 1960 年代に、先駆的に経塚・経碑の有機的調査・検討がなされている(那須町伊王野備中廓の経塚・経碑、日光市倉ヶ崎の堀端経塚・経碑、宇都宮市新里町萱野の石櫃・銅製經箱・経碑、上三川町上蒲生の上蒲生経塚・経碑)。経塚研究史的にみても特筆できよう⁽²⁸⁾。

(3-3) 堀端経塚では「法印」が「書写師」となって礫石経塚・経碑が築造されている⁽²⁹⁾。また伊王野備中廓経塚でも「法菴」により「大乗妙典一石一字供養」が行われている。一方、在村の名主層が施主となっている事例として宇都宮市新里町萱野の石櫃・銅製經箱・経碑(ただし「導師」として複数の僧侶らしき人物名も記される)や、上三川町上蒲生 1・2 号経塚・経碑がある。

(3-4) 中～近世の経筒・経碑に記される「大乗妙典」は、『法華経』を意味する事例が多い。それゆえ、堀端経塚例のように釈迦牟尼仏(『法華経』の説法主)の種子バクが同時に記されることも多い。一方、宇都宮市

新里町萱野の銅製経箱・経碑や、上三川町上蒲生1・2号経塚の経碑には「大乗妙典」供養の願文上に阿弥陀三尊の梵字・種子(阿弥陀如来のキリーク、観音菩薩のサ、勢至菩薩のサク)が刻字されている。『法華経』信仰と阿弥陀浄土信仰が融合した結果と考えられる(前稿 2019)。

(3-5) 宇都宮市新里町萱野の銅製経箱には「西国秩父坂東百ヶ寺巡礼」「当国卅三所觀世音順始宝永六己二月取願成就攸」が、同・経碑には「奉寄納法華妙典坂東卅三部 安全取願成攸」の語が記される。なお、観音菩薩は三十三の化身を生じて衆生を救済すること(これにちなんで、西国秩父坂東の観音三十三所靈場巡礼が成立)、在俗的性格を持っていることから、人々から人気が高い仏尊である。観音菩薩の功德を説く經典は多数存在する。その基本になっているのは『法華経』「觀世音菩薩普門品」であり、「法華妙典」奉納・誦誦と矛盾するものではない(前稿 2019)。

(3-6) 古代～中世経塚にはなかった現世利益の願文(新里町萱野銅製経箱の「子孫繁栄家内安全攸」や同経碑の「安全取願成攸」)、祖靈供養を意味する文言(新里町萱野銅製経箱の「忍誉妙得爲菩提」や、堀端経塚出土礫石経の「口印導/靈魂口/代々先祖/諸聖靈/[梵字]ア 普岳道觀」、伊王野備中廓經碑銘文の「自他平等/師親眷属七世父母三界萬靈/即身成仏」)が近世経塚には認められる。なお、大乗妙典である『法華経』は諸功德やあらゆる衆生の成仏を説いており、現世利益・祖靈供養の文言と矛盾するものではない(前稿 2019)。

(3-7) 東京都杉並区・妙法寺祖師堂須弥壇の床下からは一字一石経 48,241 点ならびに多字一石経 136 点が発掘調査により検出されている。地鎮めと多数作善が融合した埋經のようである(有富 2001)。一字一石経を敷き並べていた佐野市鉢木町・願成寺境内觀音堂床下事例も妙法寺祖師堂と同様に地鎮め、ないし多数作善によると推定してみたい。

(3-8) 栃木市藤岡町蛭沼・山王寺大経塚古墳の南側裾部に山王寺という寺がかつてあったという。墳丘に散在する礫石経群は、経石散布による「まじなひ」(地鎮め等)なのであろう⁽³⁰⁾。

謝辞 中山 晋氏、石橋知明氏、津野 仁氏、塚本師也氏には、高根沢町・会橋久保経塚の発掘・整理・報告書作成に関わる御縁を作つて頂いた。塩谷 修、比毛君夫の両氏からは土浦市・浅間台一字一石経塚に関して多々御教示を頂いた。足立佳代・篠原浩恵・岡野秀典・内山敏行・大竹弘高の各氏からは経塚に関する情報・文献の御提供を頂いた。なお、本稿は、村木二郎氏、斎藤 弘氏らと、かつて同行した全国経塚データベースの賜物と言つてもよい。末文ながら、記して御礼申し上げます。

【註】

註 1 弘法大師空海[774-835]は、承和 2 年[835]3 月 21 日に入定した(『續日本後紀』卒伝)。しかし、高野山奥之院靈廟に身をとどめ弥勒菩薩の下生を待ちながら、衆生を見守ってくれていると今なお信じられている。この信仰のもと奥之院が山内重要の聖地とされ、平安時代末期以降、経塚や塔婆が造立され続けている(納骨も行われている)。

註 2 関 1985, 1 ~ 6 頁をもとに記述した。

註 3 植田猛縕[1757~1843]は、八王子千人同心組頭として日光山火の番役の業務を勤めるとともに、公儀の要請により地誌編纂に関わり『武藏名所図会』[文化 3 年[1806]成立]を編じている。また、勤番の傍ら日光山の史跡名勝に関する聞き取りをおこない『日光山志』10 冊本[文化 7 年[1810]の序]を作成、昌平坂学問所に献じている。この『日光山志』10 冊本をもとに、さらなる校訂をおこったのが刊本版『日光山志』[官許 天保七年[1836]丙申九月、同八年[1837]丁酉正月刻成の奥付]である(太田 1995)。

註 4 福島県喜多方市・松野千光寺経塚では、寛文 10 年(1670)、経筒や大治 5 年(1570 年、東北地方最古の経塚資料)の銘が刻

まれた石櫃・副納品が発見されたのち、石櫃側面に当時の発見経緯を刻字し再埋納された。その後、再埋納された遺物の一部が1934年に偶然発見され聞き取り調査が行われた。また、1993年、学術発掘調査が実施された。結果、埋経遺構4基(新規発見含む)を検出し、過去の発掘地点を確定すると共に多大な成果をあげた(辻・片岡編1999)。

静岡県牧之原市原口では、静岡空港整備工事に伴う発掘調査により、10世紀後半～15世紀後半に至る山林寺院跡(堂ヶ谷廃寺)と、12世紀後葉の経塚3基が発見された(寺院跡の南東隣接地)。とりわけ1号経塚からは銅製経筒と共に、折り曲げられた黒漆大刀1点、小刀63点、鏡16点が出土し(埋経の場で、繰り返し除魔儀礼をおこなった結果と推定)、注目を集めた(井鍋編2010)。

茨城県土浦市木田余では、急傾斜地を保護するための工事現場から『法華經』を書写した一字一石経塚が発見され、急遽、発掘調査が行われた(発掘調査された一字一石経塚としては、水戸市・湿気遺跡に統いて茨城県内2例目)(土浦市2017)。

1975年刊行の『土浦市史』には木田余西から一字一石経の出土があった旨、記されている。当該地は、今回発掘調査地点の可能性も考えられるとの由(塩谷修・比毛君夫両氏の御教示)。

註5 奈良国立博物館「弥勒如来にささげる一お経のタイムカプセル」は、親子向け展示にもかかわらず同館が所蔵または保管する一級品の経塚遺物を惜しげなく用いている(井口・岩戸2003)。岩手県立博物館「岩手の経塚」は、岩手県内で数多く発見されている12世紀の経塚資料集成(本企画展が岩手県内初の試み)を行っている(三浦2000)。立正大学博物館「経塚の諸相」は、同大学が所蔵する経塚資料(三宅敏之氏寄贈資料含む)、および武藏地域の経塚資料を展示、併せて経塚造営の背景を概観している(三宅[慶]・池田[奈]2016)。

註6 正法・像法各五百年、正法五百年・像法千年、正法千年・像法五百年、正法・像法各千年などの考え方がある。6世紀頃、中国で末法思想が成立し唐時代[618-907]に一般化、日本に伝來した。日本では正法・像法各千年説によっており、『扶桑略記』には「去年の冬より疾疫流行し、年を改めて已後、彌以熾盛なり(略)今年[永承7年]始めて末法に入る」と記される(多屋ほか編1995.426頁、大隅2011,210頁)。

註7 『法華經』「如來神力品第二十一」は、法華經を受持・詠誦・解説・書写するところは、いざこであっても仏の教えが実践される聖地であると説く。筆者は、この「どこでも聖地」論を思想根拠の一つとして埋経信仰が形成されていったと想定している。なお、これについては、今後も、さらに検討を続けていきたく考えている。

註8 本経筒が発見された経緯は明らかではなく、「出土状況やその時期など全くわからない」という。(略)その後どのような経過を経たかは不詳であるが、栃木県立博物館が業者より購入した。経筒と蓋には保存処理が施され現在に至っている(斎藤2009,332頁)。なお、栃木県1927文献には、本経筒に関する記載はない。

註9 承久3年[1221]銘経筒は、銅板製で高さ12.8cm、ひしゃげており蓋・底ともに欠損(ただし径は約5cm余りと推定可)、厚さ0.06cm。銘文は「奉施日光山中禪寺如法經/銅筒一口承久三年辛巳五月十一日/藤原包則」と記される。

安貞3年[1229]銘経筒断片は、銅板製で高さ13.8cm、板状になり口径は不明、厚さ0.04cm。銘文は「安貞三年口己丑三月/聖人玄長」と記される。

文永元年[1264]銘経筒は、鋳銅製で高さ14.9cm、口径6.1cm、厚さ0.3cm。蓋は欠損。銘文は「当上人金剛仏子慶裕/懶法衆/覺誉/弁全/果誉/前賢/覺也/円宗/円然/文永元年甲二子二月廿九日」と記される。

元応元年[1321]銘経筒断片(残存率1/2)は、銅板製で高さ14.8cm、口径5.5cm、厚さ0.05cm。蓋は欠損。銘文は「口/口/口/口三人藤原宗清/元応元年己未七月十五日」と記される。

元享3年[1323]銘経筒は、銅板製で高さ14.4cm、口径6cm、厚さ0.05cm。蓋は欠損。筒身は鍍金を施す。銘文は「下野国日光禪定権現御宝殿/奉納法華經一部(則)天長地久/(所)願圓滿法界衆生平等利益也 宇都宮中川原住人/七郎太夫(藤)(原)(宗)清/元享三年癸亥七月廿七日」と記される(以上、斎藤・佐野・永峰編1963,194~198頁)。

なお、天文2年[1533]銘経筒については、本文(「2-(2) 中世の経塚 b) 寺社境内の埋納」)で述べる。

- 註 10 ただし、この時期においても、寺社境内に設けられた奉納所や鉄塔（例、島根県太田市・南八幡宮）に奉納するケースもみられる。なお、土中埋納タイプの場合、副納品（鏡・小刀・銭貨・仏像・仏具など）を伴う事例も幾ばくかあるが、古代の経塚と比べて数・種類は多くない。
- 註 11 栃木縣 1927 文献には、「上都賀郡日光町「大字中禅寺湖上野島ニ、元徳三年十二月十五日在銘ノ鐵製納經塔建立セラレアリ。之レ又一種ノ經塚類似ノ遺品ト認メラル」と記されている（栃木縣 1927, 134 頁）。
- 註 12 栃木縣 1927 文献によれば、「祖母井赤坂（ママ）道上地内周闊約十二間、高約七尺ノ丘塚中ヨリ、天文十四年在銘ノ經筒ヲ發見セリ」と記されている（栃木縣 1927, 133 頁）。
- 註 13 聖山公園遺跡 1～3 号塚は円形の高塚である（1 号塚は径 7.5m, 高さ 1.3m, 2 号塚は径 6 m, 高さ 0.8m, 3 号塚は径 7.3m, 高さ 1.2m）。塚の築造にあたっては、周辺の土をかき集め、小高く盛土（1 層のみ）した程度であると言う（宇都宮市教育委員会 1993, 247 頁）。
- 註 14 経筒銘文は、丸山 1924 論考ならびに佐藤 1927, 16 頁をもとに記述した（〔 〕内は池田補記）。
- 註 15 経筒銘文は、出井 1924, 42～43 頁ならびに佐藤 1927, 17 頁をもとに記述した（ただし銘文〔 〕内は池田補記）。ちなみに、関 1994, 18 頁の「鎧塚経塚」の所在地が「下都賀郡石橋町橋本」になっているのは誤記と思われる。
- 註 16 栃木縣 1927 文献でも、「雀宮村牛塚ニ於テ、天文六年在銘ノ經筒ヲ發掘ス」と記述されているのみである（栃木縣 1927, 133 頁）。
- 註 17 磨石経塚は、容器に陶磁器製・石製・木製などを用いる例や、副納品（鏡・利器・銭貨・仏像・仏具・火内鎌など）を伴う例も確認されるが、いずれも稀である。
- 註 18 磨石経塚の標識として建立された石碑や石塔のことを経碑という。願意（築造の目的）、供養者名、供養の年月日、書写經典名などを記している。17 世紀以降、多数造立されるが、碑下の埋経については十分な調査がされておらず未確認の事例が多い。ちなみに、願意をみると、多数作善（多くの人々が結縁することを目的）の例、追善供養の例、現世利益を求める例など多種多様である。
- 註 19 1 号塚は直径 17m 前後、高さ 3 m で、「古墳の周溝のように、裾の周囲がやや低くなっている」。2 号塚も直径約 16 m、高さ 3 m で、1 号塚とほぼ同規模である。ちなみに、上蒲生地域には他にも後期古墳が存在するため、調査開始当初は、この二つの塚を小型円墳と認識していたと言う（大和久・大金 1969, 8 頁）。
- 註 20 「1 号経塚から磨石が発見されている。小石に墨書したもので、一石に一字を書いたもの、数字を書いたものなど様々であるが、大半はすでに解読不能である。若干判読せる磨石を手がかりに経文の出典を尋ねたがどうも判然しない」（大和久・大金 1969, 8 頁）。
- 註 21 旧地権者の祖父の代（戦前）には、「かろうじて直径 3.5～4.0m 程度の地膨れが残っていたらしい。しかし、耕作用として土取りを繰り返すうちに消滅してしまったそうである。その際に経容器に入った磨石経が出たため、祠を建てて納めなおした」とのことである。この話をもとに調査区内にトレッチを数本入れたが、塚の盛土痕跡や、経碑の痕跡は認められなかった。ちなみに、「百胴塚」という名称の由来は、周辺住民の話によると、戦国時代に、戦で敗れた側の武将たちが斬首された際に、首の部分は首塚に、胴の部分は当塚に納められたからだそうである（吉田 1997, 88 頁）。
- 註 22 「一度掘り出されてから、再び経容器に納められたため、容器内にそれ以外の石が混入しているか、逆に容器外に磨石経が転落している可能性があった。（略）この結果、容器内 89 点、容器外 134 点の合計 223 点（二次的に混入した打製石斧 1 点、須恵器大甕破片 1 点を含む）の遺物が出土した」（吉田 1997, 88 頁）。
- 註 23 栃木市岩舟町小野寺出土経筒銘文に「天台比丘成算寛澄」の名が記されていること、経筒が出土した小野寺の地には大慈寺（天台宗の東国拠点の一つ）が所在することをふまえると、小野寺経筒（ならびに経塚造営）に大慈寺が関与した可能性は高かろう。なお、東日本最古の山梨県・柏尾山経塚出土銅製経筒（埋経に至った過程が漢字仮名まじりで 783 文字記され

る。康和5年[1108]銘)にも天台僧寂円・堯範の名が見られる。「天台僧は各地の経塚造営に積極的であったのだろう」(斎藤 2009, 332 頁)。

註 24 禪定(s:dhyana)とは「心静かに瞑想し、真理を観察すること」をさす。さらに、大乗仏教では「菩薩が実践すべき修行徳目」の一つに数えられる(中村ほか編 2002, 620 頁)。それが転じて、日本では、山に登って行者が修行を積むことや、靈山の頂上をも禅定と称した。なお、行者等による山頂登拝記念の奉納札を禅定札(禅頂札)と呼ぶ(禅頂の語は近世以降のことばである)(宮家編 1986, 228 頁. 坂詰編 2003, 226 頁)。なお、種子札は禅定札と「同じ意味合いの遺物で、尊像を種子で表したものである(大和久 1986, 23 頁)。

註 25 御正体(別称:懸仏)は、本地垂迹思想に基づく神の憑代を原義とし、鏡や円形の板の中央に、線刻または浮彫で仏像・種子を表したものである(建物内に懸けられる)。「平安時代の鏡像から発展したと考えられ、鎌倉・室町時代の間に最も盛んに奉納され、江戸時代には衰退した」(中村ほか 2002, 963 頁. 坂詰編 2003, 388~389 頁)。

註 26 法印は、古代僧綱制度では僧位の最上位を示した(僧正が任せられる)。ただし、11世紀以降、その原則が崩れ、僧正にならずに法印に任せられる僧都・律師などが現れた(その語義は時代が下るとともに拡散し、後世、密教僧や山伏が法印と呼ばれるようになっていった)。他方、上人は、徳の優れた高僧や修行を積んだ聖者をさす(上人のほか、聖人・聖とも呼ばれた)。中～近世期、一種の僧位として、朝廷から勅許(綸旨)された(中村ほか 2003, 542・903 頁)。

註 27 阿弥陀如来ならびに西方極楽浄土世界を簡潔に述べたのが『阿弥陀経』である(浄土各宗派で往々誦誦される)。また四十八願とは、法藏比丘(のち悟りを得て阿弥陀如来)が衆生を救うために立てた 48 の誓願(例. 南無阿弥陀仏と唱えたあらゆる人々を極楽浄土へ導く)である(『無量寿經』卷上に説く)。十二光佛とは、阿弥陀如來の徳を十二光として形容・称讃したものを言う(『無量寿經』卷上に説く)。なお浄土信仰では、極楽往生・阿弥陀仏への帰命を發した偈文を「發願文」と呼ぶ(多屋ほか編 1995, 122 頁. 中村ほか 2002, 428・926 頁)

註 28 最近刊行された津野編 2019 文献でも、経塚・経碑の相互関係分析・検討がなされていること付記したい。

註 29 堀端経塚のある畠地は、「天台宗真光院境内地に隣接しているが、同地はもと同院境内地の一部であったものが戦後に民有地になった」と言う。また、文献史料、ならびに真光院墓塔銘文を検討した結果、「真光院が天台宗と関係をもった年代を少なくとも貞享年間[1684-1688]まではさかのぼって考えることができる」とのことである(地元所伝によれば、浄土宗法藏寺の別院であったものが、ある時期に日光山の天台宗妙道院の末寺になったという)(大和久・浅沼 1967, 11~16 頁)。「法印」が「書写師」となって本経塚・経碑が築造されていることとも矛盾しない。

註 30 栃木市・大中寺の「門前並木ノ杉ノ根本ヨリ」発見された一字一石経も、経石敷き並べ(または散布)による「まじないひ」(地鎮め等)かもしれないこと付記しておく(ただし、これらについては今後の事例増加を期したい)。

〔引用・参考文献〕

有富由紀子 2001 「妙法寺祖師堂床下の経塚—経石からみた近世信仰形態—」『江戸遺跡研究会会報』No.79. 江戸遺跡研究会

井口喜晴・岩戸晶子 2003 『親と子のギャラリー 弥勒如来にささげる—お経のタイムカプセル—』奈良国立博物館

池田敏宏 2019 「第4章 総括 第3節 『法華経』に関する基礎知識—会橋久保経塚を解釈する一助として—」『会橋久保

経塚発掘調査報告書』高根沢町教育委員会

稻垣晋也ほか編 1977 『経塚遺寶』奈良国立博物館、東京美術

石田茂作 1929 『考古学講座』第貳拾巻 経塚、國史補習會・雄山閣

石田茂作 1977 『佛教考古學論叢』3 經典類、思文閣

出井高義 1924 「下野國家中村出土の寫經」『考古學雑誌』第 15 卷第 4 號、考古學會

稻垣晋也ほか編 1977 『経塚遺寶』奈良国立博物館、東京美術

- 井鍋譽之編 2010『堂ヶ谷廃寺・堂ヶ谷経塚』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 植田猛縕 1996『版本地誌大系 11 日光山志』臨川書店〔原著は官許 天保七年[1836]丙申九月、同八年[1837]丁酉正月刻成の奥付〕
- 太田勝也 1996「解説」『版本地誌大系 11 日光山志』植田猛縕著、臨川書店〔原著は官許 天保七年[1836]丙申九月、同八年[1837]丁酉正月刻成の奥付〕
- 大和久震平・浅沼徳久 1967『堀端経塚発掘調査報告書』今市市教育委員会
- 大和久震平・大金宣亮 1969『上蒲生遺跡発掘調査報告書』日産自動車株式会社
- 大和久震平 1969「宇都宮市新里町出土の経箱」『考古学雑誌』第 54 卷第 3 号、日本考古学会
- 大和久震平 1970「栃木県日光市二荒山神社境内経塚/栃木県今市市堀端経塚」『日本考古学年報 18(昭和 40 年度)』日本考古学協会編、誠文堂新光社
- 大和久震平 1972「第 6 章 有史文化 第 2 節 遺構」『栃木県の考古学』塙静雄・大和久震平、吉川弘文館
- 大和久震平 1986「1 考古資料 9 男体山頂遺跡/10 太郎山頂遺跡」『日光市史』史料編 上巻、日光市史編さん委員会編、日光市
- 奥村秀雄 1971「経塚」『新版考古学講座』8 特論(上)祭祀・信仰・雄山閣
- 柿園 生 1927「伊王野に於ける経塚」『下野史談』第 4 卷第 6 號、下野史談會
- 藏田 藏 1936「埋經」『佛教考古學講座』第六卷、雄山閣
- 藏田 藏 1961「経塚の諸問題」『世界考古学大系』4 日本 4 歴史時代、平凡社
- 考古學會 1901「彙報 ◎古石庫を發掘す」『考古界』第 1 篇第 4 號
- 斎藤 忠・佐野大和・永峰光一編 1963『日光男体山頂遺跡発掘調査報告書』日光二荒山神社、角川書店
- 斎藤 弘 2009「岩舟町小野寺出土の経筒について」『野州考古学論攷—中村紀男先生追悼論集—』中村紀男先生追悼論集刊行会
- 坂詰秀一編 2003『仏教考古学事典』雄山閣
- 佐藤行哉 1927「芳賀郡の経塚 附 下野國經筒年表」『下野史談』第 4 卷第 2 號、下野史談會
- 佐野大和 1964「栃木県日光市男体山頂遺跡」『日本考古学年報 12(昭和 34 年度)』日本考古学協会編、誠文堂新光社
- 白井克也ほか編 2017『東京国立博物館図版目録』経塚遺物篇(東日本)新訂、東京国立博物館
- 白井克也ほか編 2018『東京国立博物館図版目録』経塚遺物篇(西日本)新訂、東京国立博物館
- 関 秀夫 1984『考古学ライブラリー24 経塚地名総覧』ニュー・サイエンス社
- 関 秀夫 1985『考古学ライブラリー33 経塚』ニュー・サイエンス社
- 関 秀夫編 1985『経塚遺文』東京堂出版
- 関 秀夫ほか 1986『特別展観 経塚—関東とその周辺—』東京国立博物館
- 関 秀夫 1990『日本の美術』No.292 経塚とその遺物、至文堂
- 杉山 洋 1994『浄土への祈り—経塚が語る永遠の世界—』雄山閣出版
- 田熊清彦 1982「栃木県東宮神社境内出土の銅製経筒」『月刊考古学ジャーナル』No.199、ニュー・サイエンス社
- 田沢金吾 1933『鞍馬寺經塚遺寶』鞍馬寺、便利堂
- 田代 孝・出月洋文 1993『第11回特別展 山梨の経塚』山梨県立考古学博物館
- 多屋頼俊ほか編 1995『新版仏教学辞典』法藏館
- 千田孝明ほか 1982「作品解説 21 県文 宝篋印塔(納経塔) 大工沙弥行西作 1基」『開館記念 栃木の名宝展』栃木県立博物館
- 千田孝明 2000「作品解説 88 栃木県文化財 鉄製納経塔 沙弥行西作」『世界遺産登録記念 聖地日光の至宝展』栃木県立博物館

- 辻 秀人・片岡 洋編 1999『松野千光寺経塚発掘調査報告書』福島県喜多方市教育委員会
土浦市 2017『広報つちうら 2017年3月号』No.1190
津野 仁編 2019『会橋久保経塚発掘調査報告書』高根沢町教育委員会
帝室博物館編 1927『帝室博物館學報第五 那智發掘佛教遺物の研究』帝室博物館
帝室博物館編 1937『帝室博物館學報第八 金峯山經塚遺物の研究』帝室博物館
栃木縣 1927『栃木縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第2輯
中村 元ほか編 2002『岩波仏教辞典 第2版』岩波書店
難波田 徹編 1986『京都国立博物館藏 経塚遺宝』京都国立博物館、便利堂
速水 侑 1980『弥勒信仰—もう一つの浄土信仰—』評論社
古谷 清・丸山瓦全 1924「日光二荒山頂上發見品に就て」『考古學雑誌』第14卷第10號、考古學會
保坂三郎 1971『経塚論考』中央公論美術出版
保坂三郎 1977「経塚概論」『新版仏教考古学講座』第6卷 経典・経塚、雄山閣
前澤輝政 1978『山王寺大経塚古墳』藤岡町教育委員会
丸山瓦全 1924a「下野國に於ける金石文(四)」『考古學雑誌』第14卷第2號、考古學會
丸山瓦全 1924b「下野國に於ける金石文(五)」『考古學雑誌』第14卷第8號、考古學會
丸山瓦全 1924c「續日光二荒山頂の發見品に就て」『考古學雑誌』第14卷第14號、考古學會
三浦謙一 2000『岩手県立博物館 第50回企画展 岩手の経塚』岩手県立博物館
皆川義之 2001「下野の経塚資料とその特徴」『栃木県立博物館 研究紀要一人文一』第18号、栃木県立博物館
三宅 慶・池田奈緒子 2016『立正大学博物館 第10回特別展 経塚の諸相』立正大学博物館
三宅敏之 1977「経塚の遺物/遺跡と遺構/経塚の分布/経塚遺物年表」『新版仏教考古学講座』第6卷 経典・経塚
雄山閣
三宅敏之 1979「栃木県と経塚」『栃木県史しおり』(資料編考古2)、栃木県〔のち「栃木県の経塚」と改題して三宅1983文献
に収録〕
三宅敏之 1983『経塚論攷』雄山閣
村木二郎 1998「近畿の経塚」『史林』第81卷第2号、史学研究会(京都大学)
村木二郎 2003「東日本の経塚の地域性」『国立歴史民俗博物館研究報告』第108集、国立歴史民俗博物館
官家 準編 1986『修驗道辞典』東京堂出版
矢島恭介 1937「経塚」『佛教考古學講座』第十卷、雄山閣
矢島恭介 1956「経塚とその遺物」『日本考古学講座』6 歴史時代 古代、河出書房
梁木 誠編 1983『聖山公園遺跡I 発掘調査概要報告書』宇都宮市教育委員会
梁木 誠編 1993『聖山公園遺跡・根古谷台遺跡(古代・中近世編)』宇都宮市教育委員会
吉田 哲 1998『八木岡I 遺跡』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
和田千吉 1901「經文埋没の種類とその主意」『考古界』第1篇第8號、考古學會
和田千吉 1904 a 「常陸國新治郡東城寺村經塚の研究」『考古界』第4篇第5號、考古學會
和田千吉 1904 b 「常陸國新治郡東城寺村經塚の研究(完)」『考古界』第4篇第6號、考古學會
和田千吉 1912「経塚の位置とその内部の状態」『考古學雑誌』第2卷第8號、考古學會
渡辺竜瑞 1963「栃木県那須郡丸山経塚」『日本考古学年報6 (昭和28年度)』日本考古学協会編、誠文堂新光社

第1表 栃木県域の経塚(時期別一覧)(1)

古代的経塚

	遺跡名または出土地	所在地	出土遺物	時期	主な文献	備考
1	小野寺(経塚か)	栃木市岩舟町 小野寺	青銅製経筒・蓋1(長治元年銘), 経巻残片 (軸頭・軸木, 経紙残片, 発装, 銅板片)	1108年	斎藤2008	出土状況、採集時期などの詳細不明。現在は栃木県立博物館所蔵
2	太郎山頂遺跡(埋経か)	日光市中宮祠	渥美窯産陶器壺1, 双鳳円鏡1, 銅板製経筒蓋1, 常滑窯産陶器三筋壺, 銅製経筒1	12~13世紀頃	大和久1986	市史編さん事業に伴う表探資料
3	男体山頂遺跡(埋経)	日光市中宮祠	青銅製経筒11(うち5点は承久3年銘, 文永元年銘, 元応元年銘, 元亨3年銘, 天文2年銘), 経軸頭18	13~14世紀頃	斎藤・佐野・永峰編1963	1924年採集資料公表, 1959年 学術発掘調査

中世の経塚

	遺跡名または出土地	所在地	出土遺物	時期	文献	備考
4	中禅寺湖上野島納経塔	日光市中宮祠	鉄製宝篋印塔型納経塔(元徳元年, 大工沙弥行西銘)	1331年	千田2000	現在は輪王寺宝物館で保管・収蔵
5	滝尾神社境内(埋経か)	日光市山内	青銅製経筒(大永5年銘) 青銅製経筒(大永雪月銘)	1525年 1520年代	植田1997(原著は天保8年頃)	文政6年[1823]に、別所の西方に所在する影向石付近で経筒2点が出土
6	小野寺京呂戸経塚	栃木市岩舟町 小野寺	青銅製経筒(大永6年銘) 青銅製経筒(天文5年銘)	1526年 1536年	丸山1924b	山麓に所在する「小丘4個」のうち、「二個の塚を塚の樹根を發掘せし際、各塚より一個づゝ経筒を發見せり」
7	東宮神社境内(埋経か)	栃木市皆川	青銅製経筒・蓋(享禄2年銘)	1529年	田熊1982	1929年に発見(神社拝殿前「地下約四尺位ノ下ヨリ」)
8	橋本鎧塚(経塚か)	栃木市家中	経筒1(享禄2年銘), 紙本経(現品所在不明)	1529年	出井1924	「念佛原といふ原野の一部を地均しの爲、其處にあった小塚を發堀」
9	聖山公園1~3号経塚	宇都宮市 上久町	1号塚遺物なし。2号塚は六角宝幢経筒(享禄2年銘)。3号塚は古鏡1	1529年	梁木編1993	1982年発掘調査。宇都宮市教育委員会所蔵
10	深津(経塚か, 埋経かは不明)	鹿沼市深津	経筒残欠(「妙典六十」「部聖」「享禄3年」銘)	1530年	丸山1924a	「道路普請の爲め小丘を發掘せし際發見せるものにて、數片に缺損せし」
11	牛塚南方(経塚か)	宇都宮市雀宮	青銅製経筒(天文7年銘)	1538年	佐藤1927	経筒銘文以外の情報は不詳
12	番七稻荷神社境内経塚	芳賀町大字祖母赤坂道上	青銅製経筒(天文14年銘)	1545年	佐藤1927	「筒中には經文が入ってゐたのであらう、黒い灰のようなものになって約五分程填充されていると云ふ」
13	二荒山神社境内 (埋経か)	日光市山内	多字一石経	中世か	大和久1970	1965年発掘調査

中世の経塚参考資料

	出土地	所在地	出土遺物	時期	文献	備考
参考1	「大字高久」	那須町大字 高久	円鏡(鎌倉末足利初期ノ作品ト認メラルヽモノナリ)	中世か	栃木懸1927	「古鏡發見地又恐ラク經塚ナリシナラント」
参考2	鹿島神社境内	芳賀郡益子町	秋草文鏡, 秋草双雀文鏡(何レモ鎌倉時代ノ作品ナリ)	中世か	栃木懸1927	「他ノ發見ニ就テハ不明ナレドモ、恐ラク經塚ナラム」
参考3	「字経塚」	益子町 大字上大羽	古鏡	中世か	栃木懸1927	「先年古鏡ヲ發見セリト云フ」
参考4	八幡神社境内	真岡市中	秋草文鏡(鎌倉期ノ作品ナリ)	中世か	栃木懸1927	「恐ラク經塚ナラム」

第2表 栃木県域の経塚(時期別一覧)(2)

近世の経塚

	遺跡名または出土地	所在地	出土遺物	時期	文献	備考
14	備中廓経塚(礫石経塚)	那須町伊王野	一字一石経	1709年	柿園1927	経碑(宝永6年銘)あり。「其角塔婆の下の塚即芝墓の下より一石一字の墨書きし經石を出す」
15	妙光寺境内(礫石埋経か)	那須烏山市南	一字一石経(宝永6年銘)	1709年	栃木縣1927	「内長サ約九寸幅廣キトコロ四寸五分アル扁平ナル石ノ表面ニ願文記シ、裏面ニ寶永六年[1709]己丑八月ト墨書」
16	萱野(埋経か)	宇都宮市新里町	石櫃1, 青銅製經箱(宝永7年銘)1	1710年	大和久1969	経碑(宝永7年銘)を伴う
17	上蒲生2号経塚	上三川町 上蒲生	出土遺物なし	1716年	大和久・大金 1969	1968年発掘調査。経碑(正徳6年銘)は同町・普門寺に移設
	上蒲生1号経塚(礫石経塚)		一字一石経	1720年		1968年発掘調査。経碑(享保5年銘)は同町・普門寺に移設
18	堀端経塚(旧・真光院の境内地。礫石埋経)	日光市倉ヶ崎	多字一石経964点	1795年	大和久・浅沼 1967	1966年発掘調査。近在に経碑(寛政7年銘)あり
19	八木岡I遺跡百胴塚(礫石経塚)	真岡市八木岡	瓦質土器壺1, 一字一石経233点	近世か	吉田1998	1997年発掘調査。栃木県埋蔵文化財センターで資料保管
20	丸山経塚(礫石経塚)	大田原市両郷	一字一石経	近世か	渡辺1963	1953年現地踏査(開墾により礫石経塚と判明)
21	泉渓寺境内(礫石埋経か)	那須烏山市金井	石庫, 一字一石経	近世か	考古學會1901	「直徑四尺計りなる石庫なるを見出したり」「卵形平面の小石に法華經八巻を一石に付一字ずつ書しあり」
22	荒針(礫石経塚か)	宇都宮市城山町	一字一石経(朱書)	近世か	栃木懸1927	「一石一字ノ朱書アルモノ發掘セリ」
23	西山(礫石経塚か)	市貝町続谷	一字一石経	近世か	佐藤1927	「經石續出發見」
24	沓形(礫石経塚か)	芳賀町芳志戸	一字一石経	近世か	佐藤1927	「經石出土」とのみあり
25	満願寺(礫石埋経か)	栃木市出流町	一字一石経	近世か	栃木懸1927	「觀音堂岩屋道二於テ一石一字ノ墨書アルモノ發掘ス」
26	大中寺(礫石埋経か)	栃木市大平町	一字一石経	近世か	栃木懸1927	「慶長七年ニ此杉並木ヲ植ユト云フ」「其時根元ニ此經石ヲ埋メシモノカ」
27	山王寺大樹塚古墳(礫石散布か)	栃木市藤岡町蛭沼	一字一石経	近世か	前澤1978	1975年発掘調査。後方部墳頂部の南東縁や同東縁部から石経群が出土
28	願成寺観音堂床下	佐野市鉢木	「一石一字ノ墨書アルモノ敷並ベアリ」	近世か	栃木懸1927	地鎮めの「まじなひ」か
29	八雲神社旧地(礫石埋経か)	足利市緑町	一字一石経	近世か	栃木懸1927	「一石一字ノ墨書アルモノ發掘セリ」

《凡例》

- 各経塚の情報は、一覧表掲載「文献」にもとづく。ただし、1927年以前の経塚情報については、佐藤行哉1927文献と栃木縣1927文献にもとづいた事例が多い。
- 他文献(三宅1977, 関1984等)の経塚一覧表に遺跡名や出土地名が掲載されていても遺構・遺物の検出内容が不詳な事例は、本一覧表に掲示しなかった。
- 原則として、經典を埋納し盛り土(封土)を有する事例は、遺跡名または出土地に経塚と表記した。一方、經典埋納のみ(封土なし)の事例は、遺跡名または出土地の脇に埋経と注記した。
- 寺社への奉納經典や、納經受取状等は、本一覧表に掲示しなかった。
- 多字一石経、一字一石経の出土事例は、遺跡名または出土地の脇に礫石経と注記した。
- 経碑のみ(埋経を伴うか否か不明)の事例は、本一覧表に掲示しなかった。

研究紀要 第27号

発 行 公益財団法人 とちぎ未来づくり財団
埋蔵文化センター

〒329-0418
栃木県下野市紫474番地
TEL 0285(44)8441(代表)
FAX 0285(43)1972
HP : <http://www.maibun.or.jp>

発行日 平成31年3月26日発行
印 刷 株式会社大塚カラー
